
真・恋姫無双～蒼き忠将～

ワコウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双〜蒼き忠将〜

【Nコード】

N2749M

【作者名】

ワコウ

【あらすじ】

魏の大將軍『夏侯惇 元讓』。

彼が気が付いたら見知らぬ土地にいた。そこは彼が元々いた世界と同じようで少し違う世界であった。

そんな世界で夏侯惇は。

誠に申し訳ありませんがこの作品の更新を打ち切らせて頂き、新たに書き直させて頂きます。どうか御了承の程を宜しくお願い致します。

ます。

プロローグ（前書き）

この作品は真・恋姫無双の二次創作です。原作とは異なる展開になりますので御了承下さい。多少、演義と正史を参考にしております。

主人公は作者の勝手な想像で構成されておりますので実在した人物とは違います、御了承下さい。

このような作品ですが宜しくお願い致します。

プロローグ

数多の戦場に立ち、幾多の功績を上げ、何度も自軍を勝利に導いても人は老いには勝てない。

病に伏し、老いていく自分の身体を見つめながら空虚に包まれ薄れ行く意識を永遠の闇へと手放した　　筈だった。

「……………ここは？」

気が付いたら見知らぬ平原に立っていた。透き通るよいな青い空に浮かぶ太陽は暖かい光りを放っている。

そして思わず呟く声は優しく吹いた風に運ばれて消えて行く。全く状況が理解出来ない。

（私は死んだ筈ですが……）

病に伏し消え行く意識の中、国の未来を案じていた。そして意識を手放した　　筈だったのだが。

（何故、このような地に？　　ここが話に聞く“あの世”でしょうか

？)

そう考えるも、頬を撫でるそよ風や、鼻腔をくすぐる大地の香り、陽光の暖かさ等、現実の物としか思えない程である。

(困りましたね……ん？ あれは)

彼は少し離れた場所で自分と同じく呆然と立っている少年を見付けた。

十代後半くらいだろうか。何故かどこかで見たような気がしてならない。

その少年もこちらをまじまじと見つめている。

(……む？ もしかして……)

彼の脳裏にある者の名前が浮かんた。有り得ない、と思いつつその者の字で少年を呼んでみた。

「……妙才？」

「……げ、元讓殿！？」

彼は自分の従弟である夏侯淵の字で呼んでみたら少年は驚愕の表情を浮かべ、彼　夏侯惇の字を叫んだ。

「妙才、どうして貴方がここに？　それに何故、若返っているのですか？」

夏侯惇は全く理解出来なかった。目の前にいる短く切り揃えた黒髪に人懐っこそうな眼が特徴的な長身の少年は確かに自分の従弟の夏侯淵である。

しかし何故、若返っているのだろうか。夏侯惇の疑問は深まるばかりだ。

「元議殿こそ、何故若返っているのですか！？」

その声に夏侯惇は慌てて自分の頭や顔を触ってみる。

髪は耳が少し隠れるくらいの長さ。肌は老人のような皺も無く、艶やかであった。

夏侯惇は嫌な予感がした。

「妙才……私は何歳くらいでしょうか……？」

「えーと……十代後半頃、十七か十八歳頃くらい……です」

夏侯淵の答えに夏侯惇は思わず崩れ落ちそうになった。

脳裏には浮かび上がって来るトラウマの数々。そのまま落ち込んで行きそうになる気持ちを何とか立て直す。

「……とにかく、ここはどこなのでしょう？ 妙才、分かりますか？」

「いや、俺には全然見当も付きません……」

その答えに夏侯惇は溜め息を吐き、空を仰いだ。

(……全く理解が出来ません)

夏侯惇はそう嘆息するしかなかった。

昇龍との出会い（前書き）

視点がよく変わりますので御了承下さい。

昇龍との出会い

「おい、その兄ちゃん達」

どこからか声がした。男の声である。夏侯淵は声がした方を向いてみた。

するとそこには二十人程の男達がいた。全員、頭に黄巾を巻いている以外は統一性がない服装や装備だ。

ある者は槍を持っていたり、ある者は剣を携えている。意外にも服がボロボロという点では統一感があった。

人は見掛けで判断してはいけないと、よく言ったものだが思いつきり賊にしか見えない。

「何でしょうか？」

夏侯惇が涼やかな声でにこやかに尋ねた。かなり中性的な声である。

恐らく目の前の男共は夏侯惇の事を女性だと思っているのだろう。

生唾を飲み込んでいるのが見て取れる。

確かに、とは思う。改めて隣にいる夏侯惇の顔を見ても女性にしか見えない。

少し耳が隠れるくらいの長さの艶やかな黒髪。整った顔。瑞々しい肌。色っぽい唇。少し切れ長だが優しそうな眼。長身だが全体的に線の細い身体。

軽鎧や小手、脛当てを身に付けているが、実戦で邪魔にならない程度に装飾されている事もあってお洒落にしか見えない。腰に携えている剣でさせ、そんな風に見える。

更に穏やかな物腰もあってか、かなりの美女に見える。少なくとも外見は。

だが夏侯淵は知っている。十代後半頃の夏侯惇はかなり荒れていた。主に彼自身の容姿の所為だろう。

しかし、かなり暴れ回っていたクセに何故か人望はあった。

その仲間内 いや、夏侯惇を知っている者の中で彼に言っではいけない禁句が幾つかあった。

その禁句を目の前の男共が触れないのを願うばかりである。

「へ、へへ。こりゃ、かなりの上玉だぜ」

夏侯淵は凍り付いた。小声だったが、しっかりとハッキリと確実に聞こえてしまった。

（……い、いや、ままま、まだ諦めるな俺！ げ、げげ元讓殿には聞こえていなかった可能性も ）

そう思いつつ夏侯惇の顔を盗み見て 終わった、と感じた。

彼はまだ、穏やかな笑みを浮かべている。しかし、眼は笑っていなかった。むしろ、絶対冷凍の冷たさを宿している。

（い、いや、まだだ！ まだ諦めるな夏侯妙才！ 外見は若返っても精神的には大人だ！ まだ大丈夫だ！ ）

そう願う夏侯淵。少し前に気が付いていた事だが、外見が若返ったのと同じく精神的にも若返っているような感じがする。

それは夏侯惇も気が付いている筈だ。だが、それを踏まえても大人としての矜持を活かし 。

「おい、兄ちゃん。ちょっと悪いんだが金目の物を置いていって貰おうか。それと、その美人の姉ちゃんも」

(……終わった。何もかも……)

最早、手遅れだと悟る夏侯淵。しかも、あからさまな賊発言をしてしまっている。

悪気の無い一般人ならば嚴重注意で済んだだろう。しかし、賊ならば話は別である。

隣から漂って来る静かな殺気から逃げ出したい夏侯淵であった。

「……『美人の姉ちゃん』とは誰の事ですか？」

「ああ？ あんただよ。姉ちゃん」

尋ねる夏侯惇に男の一人が答える。何気に優しく答えている所を見ると、夏侯惇が謙遜していると思っっているらしい。

(……頼む。頼むからこれ以上、火に油を注がないでくれ……)

夏侯淵の切なる願いだつた。最早、身体の震えが止まらない。恐らく顔色は青を通り越して紫になっているに違いない。

夏侯惇から漏れ出る殺気は夏侯淵の身体中を槍で突き刺しているかのようであつた。

[illegible]

夏侯淵の内なる叫びも虚しく男達はニヤニヤと笑つたままであつた。

「つまり、貴方達は賊ですか？」

「賊？ 冗談はよせやい。俺達や、誇り高き黄巾党だぜ。そこいらの賊と一緒にすんなよ、姉ちゃん」

（……ん？ 黄巾党？ あれ？）

男が言った事に疑問を感じる夏侯淵。夏侯惇も同じ思いらしく少

し眉をひそめている。

黄巾党はかなり昔に討伐された筈である。残党か、とも考えたが先程の言い方では違うような気がする。

「さて、お喋りはここまでだ。さっさと金目の物を置いて行きな」

一人がそう言って剣を抜くと、他の者もそれぞれの得物を持ち始める。

それに対して夏侯惇は穏やかな笑みを浮かべつつ男共に近付き、一番近くにいた男の前で止まる。

「先に抜いたのはそちらですからね」

穏やかな声でそう言いながら右手を腰に携えている剣の柄へと持つて行く。

あまりにも自然な行動だった為、男共は気が付いていないようだ。

「ああ？ 何を言っ」

男が言えたのはそこまでだった。夏侯惇は腰から剣を抜き放ち、

横に一閃させた。

男の首が空へと舞い上がる。残った胴体はゆっくり崩れ落ちながら鮮血を噴き出させる。

夏侯惇はそのままの勢いで隣にいた別の男を斬り捨てる。男は何が起きたか分からない、というような表情のまま地に伏した。

周りの男共は呆然としていたが夏侯惇が三人目を斬った時によりやく動き始めた。

何やら喚いている。しかし夏侯淵はそれを無視し腰に携えた剣を抜き、夏侯惇に気を取られている男の一人を斬り付ける。

鮮血が飛び散り、男は崩れ落ちた。そのままもう一人を斬り捨てる。

辺りに響き渡る怒号、悲鳴、絶叫。そして濃厚な血の臭いが漂う。

夏侯淵は剣を振るい続ける。もう一人、二人と倒す。そして次の敵を探そうと辺りを見渡したのだが。

「…………マジですか…………」

「ん？　どうかしましたか妙才？」

夏侯淵の呟きに夏侯惇が涼しげに反応する。しかし彼の周りには肉塊が転がり、血溜まりが何ヶ所もあった。

どうやら全員倒してしまったらしい。余りにも早過ぎるし、更に返り血も浴びていなかった。

「さて、盗み見はあまり良くないと思うのですが」

夏侯惇は視線を転じ近くの茂みに顔を向けて言い放つ。誰か隠れている。

夏侯淵も気が付いてはいた。しかし、このような対応は面倒臭いの
で全て夏侯惇に任せつきりであった。

茂みがガサガサと動く。そして中から人が出て来たのだが　。

（へ？　女？）

そう茂みから出て来たのは白い衣を身にまとった少女だった。

頭には衣と同じ色の白い被り物を被り、髪は透き通るような青色、顔立ちは整っており、瞳は紅玉ルビーのように紅い。

その容姿は世間一般的に言う美少女であろう。その少女はバツの悪そうな表情をしていた。

「いや……済まなかった。助太刀しようと思ったのだが貴殿の太刀筋があまりにも美しく……その……見惚れてしまって」

少女は消え入りそうな声で恥ずかしそうに言った。勿論、自分の太刀筋ではない事は百も承知である夏侯淵。

チラッと夏侯惇の横顔を盗み見る。少し驚いた顔をしていたが、すぐに温和な顔になる。

「そうでしたか。いやはや、御足労をお掛けして申し訳ありませんでした」

「いえ、そのような……」

夏侯惇が優しい声色で言い、少女が慌てたように応じる。夏侯淵はそれを見ながら少女が持っている長槍を見ながら思う。

(……女が武器を持って戦う……のか?)

恐らく夏侯惇も同じ疑問を抱いている筈だ。彼らの常識的には女性が武器を持って戦うのは一揆くらいなものである。

女性を戦場に連れていくのは不吉とさえ言われている程である。

(……こっ、どこだよ)

改めて夏侯淵は思った。少女の髪と瞳の色を見て西域より西の国か、と予測する。夏侯淵達の国では黒髪に黒眼が一般的だ。

いたとしても茶髪。異民族に青い眼を持つ人間もいたがごく少数である。

だが、夏侯惇の言葉が通じる。そして彼女の言葉も自分達に通じる。

異国であれば通じる事はないだろう。疑問は更に深まるばかりだ。

夏侯淵が考え込んでいる間にも会話していたらしい。話題が先程と違っていた。

「成る程……ここは義陽郡、という事ですか……」

「うむ、そうだ」

夏侯惇の言葉に応じる青髪の少女。義陽郡と聞いて首を傾げる夏侯淵。

義陽郡といえば荊州の北部である。北に行けば許都や陳留といった曹魏の中心地がある。

何故、義陽郡なのか訳が分からない。そもそも死んだ筈の自分がここに存在している時点で理解出来ない。

（それにしても、流石は元讓殿だ。誘導尋問はお手の物だな）

何気に失礼な事を考える夏侯淵であったが、ここである事に気が付いた。

（……元讓殿の顔が険しい？）

傍から見たら優しそうな微笑みを浮かべて会話しているように見える。しかし、夏侯惇との付き合いが長い夏侯淵には分かる。

かなり険しい表情をしている。眼には困惑や動揺の色が浮かんでいた。夏侯惇のこんな表情を見たのは久しぶりである。

（……どうしたんだ？ 一体何が……）

夏侯淵が心配していると夏侯惇が青髪の少女と共にこちらを向いた。

「紹介が遅れましたね。こちらが『夏侯威』字を『李権』と言います」

（え！？）

夏侯淵は驚く。夏侯惇が青髪の少女に紹介した名は夏侯淵の息子の名であった。

夏侯淵は夏侯惇に真意を訊こうとしたが、止めた。夏侯惇が眼で

『話を合わせる』と語っていたからだ。

「えー……と、夏侯威だ。よろしく」

「よろしくお願い致します、夏侯威殿。私は姓が趙、名は雲、字を子龍と申します」

(……………へ?)

夏侯淵は思わず真意を問いたただすかのように夏侯惇の顔を見る。その視線に気が付いた夏侯惇は首を振っていた。

「……あ、ああ。よろしく趙雲……殿」

動揺を隠そうとしたが無理であった。意味が分からない。何故、この少女の名が趙雲子龍なのか。

(……嘘を言う奴の眼じゃない。ていう事は本当なのか？ いや、同姓同名なのかも……)

夏侯淵の疑問は更に深くなって行くばかりだ。

拍子抜けな出会い（前書き）

人名や地名で漢字表記が出来ない物は違う漢字を使用するか力
タカナで表記しますので御了承下さい。

拍子抜けな出会い

「ほう、夏侯霸殿は豫州の沛国出身でしたか」

「ええ。良い所でしたよ」

青髪の少女　趙雲の言葉に夏侯惇は応じる。
趙雲と出会って十数日が経過していた。

どうやら趙雲は全国放浪の旅をしている最中であるらしく夏侯淵と共に同行させて貰っている。

ちなみに夏侯惇は夏侯霸、夏侯淵は夏侯威と名乗っておいた。

趙雲に出会い彼女の名前を聞いた際、夏侯惇は嫌な予感がした。
直感と言っても良いだろう。

死んだ筈の自分達が若返って蘇った。黄巾党と名乗る集団。そして趙雲と名乗る彼女。

夏侯惇はとつさに名前を偽った。後に彼女から様々な事を訊き出し、名前を偽った事が正しい判断だったと思う。

この国は夏侯惇達が生きて存在していた国と全く同じであった。しかし幾つかの相違点があった。

ほとんどの武官文官が女性である事や孫堅が既に死去している等々。

正直、愕然とした。曹操が女性である事にも驚いた。そして曹操の下には女性となった自分達もいる事にも驚愕した。全く理解し難い現実である。

余談だが偽名に夏侯淵の息子の名を使った事で夏侯淵から愚痴を言われる羽目になってしまった。

仕方がない。あの時、思い付いたのが夏侯淵の息子の名だったのだから。

「それにしても申し訳ありません。趙雲殿の旅路に御同行させて頂いて」

「なに、私は構いませぬぞ。夏侯霸殿と出会っ寸前まで仲間と三人で旅をしていたのですから」

夏侯惇の言葉に趙雲はそう答える。どうやら他にも旅仲間がいたらしい。

燦々と降り注ぐ陽光の中、夏侯惇達は話ながら歩み続ける。若干、夏侯淵が会話に参加していないが気にしないでおこう。

「それにしても良い天気ですな」

「そうで」

彼の右側にいる趙雲が空を仰ぎながら言った事に応じようとしたが止めた。そして左側にある茂みを見る。
何かの気配がする。

「む？　どうかしましたか？」

「何かが来る」

趙雲が疑問の声を上げ、夏侯惇の代わりに夏侯淵が答える。

夏侯淵は既に剣の柄に手を乗せている。

夏侯惇も既に構えている。趙雲も慌てて槍を構えた。この十数日の間に少しだけだが趙雲と手合せをし、指導をしていた。

夏侯惇達の剣捌きを見て自分より上だと感じたらしく、趙雲から

「……獣？」

「げ、マジで？」

「流石は夏侯霸殿！ この距離で、しかも気配だけで分かるとは！
！」

趙雲が感嘆の声を上げ、夏侯淵は心底嫌そうに言う。
まあ、当然の反応だな、と夏侯淵の反応に納得する。

「李権、そんな反応しないで助ける準備をしましょう」

「いや……でもね、げ　ち、ちちち仲権殿」

夏侯惇の事を元讓と呼びそうになった夏侯淵を軽く睨み付ける。
すると夏侯淵は少し震えながら自分の息子である夏侯霸の字で呼んだ。

「昔、虎に襲われたからといってそこまで恐がらなくても良いですよっ。」

「な！？ 昔、虎に襲われた事があるのですか！？」

「ええ、一度だけですけどね」

驚愕の声を上げる趙雲に応じる夏侯惇。襲われた事は一度だけである。逆に襲った事は何度もあったが。

「あれは……仲権殿が虎を襲い過ぎたから、その復讐に虎が」

「李権、何か言いましたか？」

ボソツと呟いた夏侯淵の方へ視線を向ける。すると夏侯淵は何故か知らないが言葉を止め余計に震え始めた。

少し睨んだだけなのに、化け物を見たかのように震える何て物凄く失礼な奴だ、と内心思ってしまう。

「さて、お喋りは止めて……来ますよ」

夏侯惇は剣を構える。そして、背の高い茂みから人が飛び出して来た。

長身の少女だ。髪は白と黒。まるで牛だな、と思ったのは内緒だ。

眼は切れ長で普段ならば勇ましさを醸し出しているだろうが、今は目一杯に涙を流している。

服は黒を基調とした動き易そうな物だ。ただし、へそ出し。この国の服はよく分からない物が多い、と頭の片隅で思う。

「た、ただ助けてええええええええええ！！」

白黒髪の少女は涙声で叫びながら夏侯惇に抱きついて来た。

（な！？　しまった！？　これでは剣が抜けない！！）

夏侯惇は顔を歪ませる。夏侯淵も剣が抜けない事が分かったのであろう。

慌てて夏侯惇の前に出て、盾になろうとする。

しかし、遅かった。茂みからは何匹もの獣が夏侯惇目がけて飛び付いて来た。

夏侯惇は身体を捻り、白黒髪の少女だけは守ろうとしたが。

「……………へ？」

「……………え？」

夏侯淵と趙雲が間拔けな声を上げる。夏侯惇も啞然とした。唯一、白黒髪の少女だけが泣き叫んでいる。

「……………犬……………ですか」

夏侯惇は啞然としたまま呟いた。何と言うか正直、拍子抜けである。

「嫌あああああ！！　こつち来るなああああああああ
あ……」

可愛らしく尻尾を振りながら、じゃれて来る犬に本気で恐がっている白黒髪の少女だった。

混沌な一日（前書き）

（注意）

現在位置は、まだ義陽郡です。

混沌な一日

あの後、事情を訊く為に白黒髪の少女を伴って近くの村の飯屋に
来た。

座っている場所は夏侯淵と趙雲が夏侯惇の向かい側。隣に白黒髪の
少女という配置である。

「……成る程、貴方が尊敬する方の下へ行き仕官しようとしたが断
られた、という訳ですか」

「ああ……『お前にはまだ早い。もっと見識を深めてこい』と言わ
れた……」

夏侯惇の問いに白黒髪の少女は無念そうに言う。

「あ!?! そんなところに打つんじゃないよ! 違うところに打てよ!」

「フフフ、これで私が優勢になったようだな」

「何故、私の仕官を認めて頂けないのですか桔梗様あああああ
!」

「……………はあ」

夏侯惇は溜め息を吐き、頭を抱えなくなった。話が進まない。夏侯淵と趙雲は携帯式の囲碁を楽しんでいた。それに、いつの間にか趙雲は夏侯淵に対して敬語を使わなくなっている。

仲が良くなったのは良い事だが、時と場所をわきまえて欲しい。

白黒髪少女は少女で、断られた時の事を思い出したのか頭を抱えながら泣き叫んでいる。

「くそう！！　まだだ、まだ終わりはせん！！　むう……………見え
た！！　そこだああああああ！！」

「なんと！？　だが、私も負けはせぬ！　そこう！！」

「ぬわああああにiiiiiiii！！？」

「桔梗様あああああ！！」

「……………はあ」

再び溜め息を吐く。素晴らしく混沌としてきた。もう自分の手に

は負えない。

この店の主人や周りの客は好奇の目でこちらを眺めている。

「ぬわああのう！！ これしきの事でやらせはせん！ やらせはせんぞおおおおお！」

「ぬう、やるな。だが、まだ間合いが甘い！」

「ぬうおおおおおおああああああああ！！？」

「桔梗様あああああ！！！」

「あ、申し訳ありませんが、この飲み物をお願いします」

最早、気にしないでおう。夏侯惇は無視する事にした。次いで近くにいた店員に飲み物を注文する。

「くそう！！ だが、どこかに活路がある筈だ！」

「ハハハハハ！ 圧倒的ではないか、我が軍は！！！」

「ううう、桔梗様ああ」

「注文の品はこちらでよろしかったでしょうか？」

「はい。ありがとうございます」

もう他人の振りである。偶然にも窓側の席であつた為、外を眺める事が出来た。

雲一つ無い晴天である。蒼穹に浮かぶ太陽が発する暖かい光が彼を優しく包み込む。

外では人々が行き交い、話し合う。平和そのものだ。

「見えた！　そこだ！！」

「なんの！　てや！」

「おぐほえあ！？　謀つたな、謀つたな趙雲！！」

「ううう……桔梗様ああ」

「フフ、謀られる方が悪いのだよ!」

「……………はあ」

再び溜め息を吐く。本当に平和だ　一部を除いては。

防衛戦（前書き）

（注意）

三国志の時代の一里は約四百メートルです。

防衛戦

あの後、白黒髪の少女も一緒に旅をする事になった。何度か賊の襲撃もあったものの、ようやく義陽郡を抜ける事が出来た。

「それにしても、まさか彼女が魏延殿だったとは」

「そうですよねえ。魏延殿が義陽郡出身っていう事は知っていたんですけどね」

驚いた事に白黒髪の少女は魏延だったのだ。しかも年齢が少し違う。

夏侯惇達が知っている魏延は趙雲よりも若い。だが、彼女はどこからどう見ても女性の趙雲と同じくらいの年齢だ。

「私達が生きていた国とは、似ているようで違うという事を改めて思い知らされました」

夏侯惇は自分と隣にいる夏侯淵の前を歩いている二人の少女を見ながら言った。夏侯淵も隣で頷いている。

「さて、これからどうしましょうか」

「へ？ 陳留か許都に行くのでは？」

夏侯惇の言葉に夏侯淵は間抜けな声を上げながら応じる。確かにその二つは曹魏の中心地である。しかし。

「……妙才。黄巾党を討伐している時、我が君は太守ではなかったでしょうが」

「……………あ」

そう曹操は黄巾党を討伐していた時は騎都尉であったのだ。討伐が終わった後は済南の相だ。

「そういえば……………騎都尉だ。え、それじゃ……………」

「騎都尉の後は済南の相。済南の相を務めた後は西園八校尉。そして反董卓連合の後に東郡太守です」

そう言いながら昔の記憶が蘇る。曹操達と共に必死に駆けたあの頃。いつ滅びてもおかしくはなかった。

実際、何度か危うかった事もある。しかし生き延び、そして広大な曹魏を築いた。懐かしき日々だ。

「……じゃあ、どこにいるか分からないって事？」

「……そうなりますね。まあ、趙雲殿の話によりますと、ここらにはまだ黄巾党は来ていないらしいですし……ゆっくり探しましょう」

落ち込んだように呟いた夏侯淵を励ます。恐らく曹操はどこかを駆け回っているであろう。

夏侯淵の様子からすると再び曹操に仕える気のようなのだ。無論、夏侯惇もそのつもりだった。

しかし、目の前で会話しながら歩いている青髪の少女　趙雲と旅をする中である疑問が浮かび上がってきた。

初め夏侯惇はその疑問は杞憂だ、と思った。しかし趙雲と旅を続ける内にその疑問はどんどんと大きくなって行った。

そして目の前で趙雲相手に会話している白黒髪の少女　魏延に出会い、その疑問が確信へと変わって行くこととしている。

信じたく無い。もし夏侯惇が考えている最悪の場合であつたら
。

夏侯惇の心は二つの思いの間で揺れ動いていた。もし夏侯淵のよ
うに夏侯惇がずっと曹操の傍らにいる事がなければ、これ程苦しむ
事は無かつただろう。

しかし、夏侯惇は曹操の片腕として傍らにいた。曹操の傍らで様
々な事を学んび、様々な事を考慮して物事を考察するようになった。
これが悩みを作る原因になってしまった。

(……私は……私はどうすれば……)

悩み続ける夏侯惇。しかし突然、我に返った。何かの臭いがする。
嗅ぎ慣れた臭いだ。

「……………妙才」

静かに呼び掛ける。夏侯淵も気が付いているようだ。先程までと
は違う表情 将としての顔だ。

「……一里半（約六百メートル）って所でしようか…………クソッ、追

い風でなければもっと早く分かったのに」

「……それを言っても仕方ありません。それよりも早く行きますよ」

夏侯惇は走り始め、夏侯淵もその後に続く。魏延と趙雲を抜かす。背後で何か言っているようだが今はそれどころではない。

目の前にある小高い丘を風を切りながら駆け上がり頂上へとたどり着いた。

「夏侯霸殿、急に走り出してどうかし　これは!？」

「まったく、なにを走って　な!？」

趙雲と魏延も追い付いたようだ。二人共、目の前に広がる光景に驚きの声を上げる。

村の各所から黒煙が上がっている。そして怒号、悲鳴、喚声が聞こえて来る。

村と言ってもかなり大きい。その村の外側から中央へと向かって行く兵士達。

その兵士達の頭には黄巾が巻いてある。明らかな戦だ。村の各所でぶつかり合いが起きているらしい。一番大きいのは中央である。

「馬鹿な！！ 黄巾党はまだここらには進行していない筈では！？」

（黄巾党か…… 内部に侵入した者達も含め、およそ一千から三千程度。村の防衛戦力は一千以下だろう）

趙雲の声を聞きながら冷静に判断する夏侯惇。喚声は更に大きくなっている。

「李権、私は中央に行きます。貴方は各所で孤立して戦っている部隊を掌握して下さい。掌握後、中央で合流しましょう」

「御意！」

夏侯惇は呼び方を変えながら夏侯淵に指示を出す。中央の戦力が一番多いのが見て取れる。防衛勢力の本陣はそこだろう。

「趙雲殿、魏延殿は私に付いて来て下さい。よろしいですか？」

「は、はい！」

「え、あ……ああ」

「では、行きますよ」

夏侯惇の問いに詰まりながら答える二人。その答たえを聞いたのと同時に夏侯惇は声を掛けながら走り始める。それと同時に夏侯淵も走り始めたようだ。

夏侯惇は目の前にある、村の南口へ向けて駆けて行く。少し後方から足音がするので趙雲と魏延も付いて来ているようだ。

南口の前には十数名の兵士がいた。しかし誰もが夏侯惇に背中を向けている。丘の上から確認した時から気が付いていたのだが、黄巾党の兵士は練度が低い。

命令系統がしっかりしていないのか部隊同士の連携も出来ていない。その上、全部隊を完全に掌握していないのだろう。だから目の前の兵士達のように動いていない兵士が目立つ。

南口へと近付く。まだ兵士達は気が付いていない。夏侯惇は剣を抜く。

更に近付く。ようやく夏侯惇が一番近い者が足音に気が付いたのかゆつくりと振り返って来た。しかし、時既に遅し。夏侯惇の間合いである。

気が付いた兵士に向けて剣を横に一閃させる。首が宙に舞い上がった。一瞬後に鮮血が噴水のように噴き出した。

そのままの勢いで隣にいた兵士の胸を剣で貫く。何が起きたか分からない、といった表情のまま貫かれた兵士は息絶えた。

貫いた剣を引き抜きつつ絶命した兵士が持っていた槍を奪い、左手で持つ。

剣を引き抜く勢いを利用して身体を半回転させる。そして、その勢いで向かって来た兵士に槍を投げた。

槍は唸りを上げながら兵士を貫く。貫かれた兵士は悲痛な叫び声を上げながら倒れ込んだ。

左側から一人、雄叫びを上げ突っ込んで来る。夏侯惇はそのまま左側に飛び間合いを一気に詰める。

一気に間合いを詰めて来るとは予想していなかったのだらう。兵

士は戸惑った様子で一瞬止まる。

夏侯惇はその兵士の顔へ左肘を叩き込む。

叩き込まれた兵士はうめき声を上げながら仰向けに倒れた。すかさず夏侯惇は右足を振り上げ、倒れた兵士の喉へと踵を振り落とす。

足から伝わる喉を碎いた感触を無視しつつ近くにいる兵士との距離を詰める。その兵士は手に持った槍で突きを放って来た

夏侯惇は最小限の動きで避ける。槍が頬を掠め、耳元で唸り声を上げる。一気に間合いを詰めて行く。

兵士は慌ててもう一撃を放とうとするがもう遅い。剣で兵士の喉を貫く。右手を剣から離し逆手で槍を奪う。そして、右片腕だけで背後に槍を突く。

槍から伝わる感触で背後から近付いて来た兵士を貫いた事が分かった。背後にいる兵士はうめき声を上げている。

喉に刺さったままの剣を引き抜き、振り返る。膝立ちで腹を槍に貫かれた兵士がいた。

その兵士の首を刎ねる。血が舞い散る。風に運ばれて来る血の臭いが鼻腔を刺激する。

辺りを見渡すと黄巾兵は全員倒れていた。どうやら趙雲と魏延が片付けたようだ。その二人は夏侯惇から少し離れた場所に立ち、若干青い顔でこちらを見ている。

（まあ、もろに返り血を浴びましたからね。そんな事よりも急がないと……）

「二人共、次に行きますよ」

夏侯惇はそう言いつつ村の中央へと足を運ぶ。村の至る所に黄巾兵がいたので斬り捨てながら進んだ。

しばらく歩いて、ようやく中央付近にたどり着いた。数百名規模の部隊が中央へ向けて突撃を繰り返しているのが見て取れる。

しかし防柵が巧妙に仕掛けられており中々突破出来ずにいる。どうやら村を守る側に知恵者がいるようだ。確実に黄巾党軍に損害を与えている。

「このまま横撃します」

趙雲と魏延に言ったつもりだが、返事を待たずに敵部隊の横腹へ

と向かった為、聞こえていたか分からない。

黄巾兵達は攻めるのに夢中で夏侯惇が近付いて行くのに気が付いていないようだ。

（夏侯元讓、参ります！）

心の中で叫び、黄巾の群れへと突っ込んだ。一人目の首を斬り裂き、手に持っていた戟を奪う。

すぐさま奪った戟で手近にいた兵士を突き、斬り裂く。そして敵部隊の中央へと進む。

中央は他とは違い、比較的動きがしつかりとしている。恐らくそこに部隊長がある筈だ。しかし比較的だ。しつかりと訓練を受けた正規軍と比べたら確実に劣る。

中央へ進む途中で戟を投げ捨て、倒した兵士の武器を奪う。なまぐらな武器が多いからである。何度も斬っていたら壊れる。

（それに比べて、この剣は業物ですね。切れ味も落ちませんし……）

気が付いた時に身に付けていた剣は中々、切れ味が落ちない。流石に刀身に血糊がベツタリと付着していたら切れ味は落ちるが。

奪った武器を更に敵兵に向け、投げ捨て新たに剣を奪う。敵を蹴散らしながらようやく敵部隊の中央へとたどり着いた。

「てめえ、何者だ!!」

部隊長らしき男が叫んで来た。隣には副隊長らしき男もいる。

「その首、頂きます」

「何を言っ
」

言葉が終わる前に首を刎ねた。驚愕の表情を浮かべたまま、首は地に落ちる。もう一人の男が慌てて腰から剣を抜こうとするが遅い。

先程、奪った剣で胸を貫く。貫かれた男はゆっくりと地に伏した。いつの間にか辺りは静まり返っている。

「敵将、この夏侯仲権が討ち取った!!」

夏侯惇はこちらを呆然と眺めている黄巾兵達を睨み付けながら大声で叫んだ。

黄巾兵達が動揺しているのが見て取れる。そのまま睨み付け続けた。ふいに夏侯惇の後方から喚声が聞こえてきた。

どうやら夏侯淵が孤立していた部隊を集めてこちらに來たようである。

喚声は大きくなっていく。

黄巾兵は一人、また一人と逃げ始めて行き、しばらくすると一気に逃げ始めた。

「夏侯霸殿、お怪我はありませんか？」

趙雲が心配そうに尋ねて來た。隣には同じように心配そうな顔をした魏延もいる。夏侯惇は優しく頬笑みながら応じた。

「ええ、大丈夫です。趙雲殿や魏延殿は？」

「フフ、私がこの程度で怪我をするともお思いですか？」

「ふん、ワタシがこれくらいで怪我をするとも思っただのか？」

二人同時に同じような事を言い、顔を見合わせている。まったく
頬笑ましい光景である。

「李権、ただ今戻りました仲権殿」

「御苦労様です李権」

隣にやって来た夏侯淵にねぎらいの言葉を掛ける。夏侯淵はチラ
ッと趙雲達を見た後、更に近付き小さな声で話し始めた。

「孤立していた部隊を全て集めました。戦える者は三百程度です。
敵部隊を少し蹴散らしましたから当分の間は攻めて来ないかと」

「いや、恐らくまた来ます。あれは先陣でしょう」

夏侯惇も小声で答えた。その答えを聞いて夏侯淵は険しい顔をす
る。

「……どうりであっさり退いた訳だ。どうします、これから？」

「乗り掛かった船です。最後まで付き合いましょう。後はこの郡の太守へ援軍を要請します。最悪の場合、隣郡の太守やこの州の刺史にも」

「……こちらの総戦力はおよそ五百ですかね」

防柵の向こう側からこちらの様子を窺っている者達を見て予測する夏侯淵。夏侯惇はその言葉に頷く。

「どちらにしても厳しい戦になるでしょう」

防柵からこちらに向かって来る者がいる。数は三人。どうやら代表者らしい。

「……また女かよ。しかも何だよあれは……」

夏侯淵が呆れたように呟く。出て来たのは銀髪の少女に紫髪の少女、そして茶髪の少女。

「まあ、そういう国だと思っておきましょう」

そう口では言う物の夏侯惇でさえ流石にあれば駄目だろう、と思ってしまう。

銀髪の少女はまだ良い。軽鎧に手甲に脚甲を着けている。紫髪の少女、及び茶髪の少女は論外だ。論外過ぎる。

紫髪の少女は尋常ではない程、露出度が高い服を着ている。特殊な性癖でもあるのだろうか。もしそうであれば、あまり近寄りたくない。

茶髪の少女はまだ幾分かマシだが胸の下から腰にかけて完全に露出している。こちらも少々特殊な性癖の持ち主なのだろうか。

「……ここは変態の集まりか？　というか、よく守り切れたな」

「……妙才、それは言わないでおきましょう」

しみじみと言う夏侯淵に注意を促した。本当に全く完全に違う国へと来たという事を嫌でも教えられる光景だ。

（……先行きが不安です）

どこまでも透き通るように青い空を仰ぎながら心底心配して
いま夏侯惇だった。

夏侯惇の決断（前書き）

（注意）

・ 刺史、牧

簡単に言えば州の長官。

・ 太守

簡単に言えば郡の長官。

・ 県令、県長

簡単に言えば県の長官。

ちなみに

州の中に郡

郡の中に県

というようになっています

夏侯惇の決断

あれから八日経った。現在、夏侯惇は自分の部屋としてあてがわれた一室にいる。

黄巾党を撃退した後、夏侯惇は急いで村の防備を固めた。更に二日目までは攻めて来ないだろう、と予測した。それ以降になると、どうなるか分からない。

とにかく夏侯惇は夏侯淵とその他数名で近隣にいる豪族の下へそれぞれ向かった。豪族は私兵を少なからず持っているからだ。

その私兵を少数でも良いから借りに行ったのである。成果は思っていたよりも良かった。豪族も自分の私有地を黄巾党に荒らされたくないのだろう。

二日間、集めに集めて一千名集めた。正規軍よりも劣るが一般の黄巾党よりはマシだろう。村の方は兵士を集めている間に大量の罾や防柵を設置させておいた。

更に負傷者や女性、子供、老人は近くの村に避難させた。本当は村人全員を避難させたかったのだが、男達は自分達の村は自分達で守る、と言って残ってしまったのである。

正直、邪魔だった。戦闘訓練を受けていない者が戦場に出ても足を引っ張るだけだ。しかし言う事を聞かないので裏方の仕事に徹して貰う事にした。

三日目の昼、黄巾党が攻めて来た。夏侯惇の予想通り、始めに攻めていたのは先陣だったらしい。黄巾党の兵力は約八千。

数に物を言わせて力攻めで来た。しかし幾重にも仕掛けた罠や防柵を巧みに利用し、全て防いでいる。

早くて三日後には援軍が来るであろう。それまで防ぎ切る自信もある。食料や水も心配無い。だが、夏侯惇には頭を悩ましている事が幾つかあった。

まず、村の代表者として夏侯惇達の前に現れた三人の少女である。銀髪の少女は自分の事を楽進と名乗った。同僚の名前であったが、あまり驚かなかった。正直、慣れてしまった。

銀髪の少女は夏侯惇が知っている楽進に似ていた。似ているだけだが。

問題は紫髪の少女と茶髪の少女だ。

紫髪の少女は李典と名乗ったのである。もう、止めてくれ。本気

でそう思った。智将 李典の面影は全く無かった。畏や防柵を設置する時、役に立ってくれたが。

しかし、まずはその服をどうにかして欲しい。一度、本気で相談したがキツパリ断られたので諦めた。

これだけでも充分だからもう厄介な事は遠慮したい。しかし神は何かと意地悪なようだ。そもそも神を信じてはいないのだが。

茶髪の少女は于禁と名乗ったのだ。魏の名将 于禁の名を。どこが于禁なんだ、いい加減にしてくれ、と言いつことになる。

（戦闘中に服の汚れを気にする程ですからね。正気か、とも思ってしまったよ）

紫髪の少女と茶髪の少女の名前を聞いた瞬間、目眩がする程であった。夏侯淵は泣きたくなっただけ。

更に彼女達の戦い振りを見て今度は頭痛までするようになった。

夏侯惇が知ってる三人であれば個人の武力は楽進、于禁、李典の順である。

兵の指揮では于禁が飛び抜けて秀でており、楽進と李典が同じくらい。

知力や知識では李典、于禁、楽進だ。

それがこの国の楽進達になると個人の武力では楽進、李典、于禁。

兵の指揮は楽進、李典、于禁の順だがほとんど差は無い。
知力や知識では李典、楽進、于禁である。

于禁が物凄く酷い。夏侯惇が知ってる于禁とは差が激し過ぎる。
もう泣きたくなってきた。
だが恐ろしい事にこの三人に関する問題はまだまだある。

三人の中で一番優秀と思われる楽進だが時が読めない。退き時が読めないのである。更に一度戦い出すと周りが見えなくなる。

（これでも三人の中では一番マシなんですよね……はあ）

そしてもう一つ夏侯惇の頭を悩ませている事があった。兵の指揮である。

勿論、夏侯惇と夏侯淵は問題無い。問題なのは趙雲達であった。

趙雲達は兵を率いた経験がなかったのだ。

全くの盲点だった。しかし、よくよく考えれば気が付く事柄だ。どこかの勢力に属していれば兵を指揮する機会にも恵まれるだろう。

だが残念な事に彼女達は在野。余程の事がない限り兵を率いる事は無い。

しかし、不幸中の幸いにも夏侯淵が助けた者の中に李通がいたのだ。李通は曹魏の中でも勇将として名高い。

そして、この国の李通は数百程度の兵の指揮を経験した事があったのだ。どうやら雇われ部隊長をやっていたらしい。

更に喜ばしい事にこの国の李通は男だった。夏侯惇は歓喜のあまり李通と握手していた。

とにかく趙雲、魏延、楽進、李典、于禁にはそれぞれ四十名ずつ率いて貰った。夏侯惇と夏侯淵は三百名ずつ。李通は残りの二百名を率いる。

最後に一つ、夏侯惇を悩ませている事があった。趙雲達に出会って生まれた疑問である。

それは楽進達に出会った事によって確信に変わってしまった。それでも悩みに悩む夏侯惇。どうすれば良いのか分からない。

いや、分かっている。分かっているのだが決心出来ないだけである。

『決断の時だ！！ 元讓！！』

聞き覚えのある声が真正面からした。いつまでも悩み続けた夏侯惇がいつの間にか、ウトウトとまどろんでいた時である。

夏侯惇は驚き、急いで声がした方を向く。

『己の信ずる道を行け！！ いつまでも幻影に捕われるな！！』

そこには背の低い男が立っていた。しかし威風堂々とした、その身体からは凄まじい覇気が満ち溢れていた。

知っている。その男の事は誰よりも知っている。誰よりも強く、誰よりも気高く、誰よりも雄々しく、誰よりも賢い。そして誰よりも孤独であった。

「我が君!？」

夏侯惇は叫びながら立ち上がった。しかし、もうそこには誰もいなかった。

夢を見ていたのであろうか。しかし心が軽くなった。

(己の信ずる道……ですか)

決めた。もう悩むまい。幻影に捕われるな、全くその通りである。捕われ過ぎていたのだ。これから自分の信ずる道を行こう。

(……民の平和。これ以上、民が苦しむ所を見たくありません。その為の道)

いつの間にか窓から日が差し始めていた。夜が明ける。彼の心にも日が差し闇を打ち払い、進むべき道を照らしている。

まずは夏侯淵に話そう。恐らく始めは拒否するだろう。しかし、気が付いている筈だ。話せば必ず分かってくれる。

「夏侯霸殿!! もう少して援軍が到着するようですよ!」

扉の外から趙雲の声がそう伝える。援軍が来るのが少し早い。有

能な者に率いられているな。そう思いながら夏侯惇の頭の中が切り替わる。決着を付ける時だ。

「分かりました。全軍に出撃準備を。援軍が到着したのと同時に打って出ます」

「ははっ!!」

もう悩むまい。これと決めたら後は突き進むのみ。どんな困難な道であろうとも行くのみ。夏侯惇はそう決心しながら部屋を後にした。

疾風怒濤（前書き）

（余談）

（本編には全く関係ありません）

・『正史』と『演義』の違い

日本で一般的『三国志』と言われているのは『三国志演義』です。

これは『明』の時代に作られた『歴史小説』です。
事実もありますがフィクションも含まれています。

七割事実、三割フィクションらしいです。
（私としてはフィクションの割合がもう少し多いのではないかなあ、
と思うのですが……）

これに対して『正史』は『歴史書』です。事実が書かれているとは思いますが、勝者からの視点から書かれているので多少誇張されている箇所もあるかと……。

まあ、『正史』と『演義』の違いを簡単に言えば……。

関羽の『青龍偃月刀』

張飛の『蛇矛』

この二つは有名ですよね。

しかし実際には三国志の時代である、後漢末期から三国時代には存在しません。

呂布の『方天画戟』でさえ存在していたか怪しい所です。

他には、有名な『諸葛亮 孔明』

物凄い軍師ですよね……『演義』では。

『正史』では……ね。

差程……まあ……ねえ。

どちらかと言うと政治家ですよ。

まあ、とにかく『正史』と『演義』の違いを探すと色々楽しいですよ。

皆様も興味を持たれたら一度、調べてみては如何でしょうか。

ちなみに私は『正史』も『演義』も大好きです。

（注意）

あくまでも余談ですから。

あと私は専門家ではありませんので間違いがあるかも知れません。

もし、ありましたら御手数を掛けますがお知らせ下さい。

疾風怒濤

燦々と光り輝く陽光を浴びて反射する兵士が持つ剣の刀身や鎧。そよ風が優しく馬上の夏侯淵の身体を包む。

「さあて、行きますか」

夏侯淵は臨時に編成した騎馬隊を率いて村の西口へと進み始める。数は百騎。

敵主力は北から来るこちらの援軍に備えて西口辺りに展開している。

今までの防衛戦で兵士百五十名を失い、総戦力は八百五十。部隊も再編し、夏侯惇が歩兵四百名。李通が歩兵三百名。そして夏侯淵が騎兵百騎である。

残りの五十名は負傷者で村で待機。ちなみに趙雲と魏延は夏侯惇隊。楽進、李典、于禁は李通隊に所属している。

こちらは百五十名の損害だが、敵はその十倍以上の損害を出している筈だ。

敵軍が見えて来た。北ばかりに備えて、こちらには全く備えていない布陣だ。

（陣形が粗いし、士気も低そうだ）

夏侯淵は黄巾党の陣形を眺めて思った。兵力も五千弱だろうか。

視界の端に土煙が見えた。北から上がっている。どうやら援軍のようだ。黄巾党にも緊張が走るのが見て取れる。

（それにしても、俺達は全く無警戒かよ。まあ、良いけどな）

夏侯淵は後ろをチラリと見る。夏侯惇隊、李通隊の順に整列している。

夏侯惇と目が合った。夏侯惇が頷く。行け、の合図だ。

「よし。お前ら、とにかく俺に付いて来いよ！ 行くぞ！！」

夏侯淵は駆け始めた。続いて騎馬隊も駆け始める。敵は北に気を取られて、まだこちらに気が付いていない。

たちまち敵との距離が詰まる。夏侯淵の真正面にいる敵は歩兵ばかりだ。夏侯淵は槍を構える。こちらに気が付いたようだ。

しかし構わず突っ込む。敵軍とぶつかった。槍を振り回し歩兵を蹴散らす。そのまま分断して行く。敵は混乱の極致だ。

無理せずに退く。混乱から立て直った一部の敵は追って来る。急に九十度、右に曲がる。敵は騎馬隊の急な動きに付いていけずそのまま直進する。

そこにいるのは弓を構えて手ぐすね引いて待っている夏侯惇と李通の部隊だ。

夏侯淵は再び騎馬隊を敵本隊へと向け、風を切り裂きながら突撃する。敵とぶつかったらすぐに退き、先程誘導した敵部隊の方へ向かう。

敵は再び追って来る。夏侯淵の目の前には先程、夏侯惇達の弓兵による一斉射により混乱している敵がいる。

その敵へ突撃し向こう側へと突破する。その間にも槍で敵兵を蹴散らした。

背後をチラリと確認する。混乱している敵と夏侯淵を追って来た敵がぶつかり思うように動けずにいた。合計で二千程だ。

そこへ再び夏侯惇達の一斉射。混乱は更に深まっていく。本隊は本隊で北から来る援軍が目の前に迫っている為、増援を出せないでいる。

援軍は視認出来る距離まで近付いていた。数は騎馬二千、歩兵四千の合計六千だ。黄巾党軍の本隊は援軍の方へと進軍する。

行ける、ここだ。夏侯淵はそう思いながら馬を敵本隊へと向ける。敵は移動した為、一瞬だけ陣形が乱れている。

夏侯淵は騎馬隊を率いて突撃する。残りは八十二騎。敵本隊は三千以上はいる。

震えた。無論、恐怖からでは無い。武者震いという奴だ。槍を捨て弓を構えた。

射つ。矢は唸り声を上げながら命中する。本隊にぶつかるまでに八人を射殺した。弓を片付け剣を構える。

敵兵の顔が恐怖で歪んでいた。ぶつかる。四人、首を刎ね飛ばし

た。そして突き進む。その間にも敵兵を斬り裂く。中央に牙門旗とその周りに騎馬隊がおよそ八十騎。

敵将はそこにいる。周りの騎馬は旗本だろう。夏侯淵はそこに突き進む。

背後をチラリと確認した。付いて来ているのは五十数騎。戦死ではなく、夏侯淵に付いて来れない者の方が多いのだろう。

突然、夏侯淵と敵の八十騎の間に別の騎馬隊が割って入って来た。黄巾を巻いている。どうやら本陣が危ないと感じたのでこちらに来たのだろう。数は三十騎程。

「邪魔だあああああ！！」

夏侯淵は叫びながら敵騎兵を斬り裂く。片腕が舞い上がり、敵騎兵は落馬した。更に左から来た騎兵の首目がけて剣を一閃させる。

風を斬り裂き、皮膚を喰い千切り、骨を粉碎する。首は天高く舞い上がり、血が噴水のように舞い散る。

一人、また一人と斬り倒す。ひたすら敵の牙門旗の下へと向かう。

「我が行く道を遮る者は叩き斬る！！」

夏侯淵はそう言った後、吠えた。練度や兵数が同じくらいであれば、後は気迫の問題だ。

夏侯淵の気迫により敵は明らかに怯えている。馬も怯えているのが分かる。そして援軍部隊も攻撃を開始したようである。敵は更に乱れる。

夏侯淵は剣を構えて牙門旗に向かって突撃した。

胸を薙ぐ。返り血をもろに浴びたが関係無い。首を刎ねる、腕を吹き飛ばす、身体を貫く。牙門旗の傍に敵大將らしき者がいた。

馬上で斧を構えて、こちらに向かって来る。夏侯淵も剣を構え直し馬を走らせ、交差した。

剣から伝わる確かな感触。背後から何かが落ちる音。念の為に背後に振り替えた。馬上には首から上が無い死体。地面には何が起きたか分からない、といった表情の生首。

夏侯淵は血塗れの剣を天高く掲げ戦場全体に届くような声で叫ぶ。

「敵将、討ち取ったあああああー！」

一瞬の静寂。そして喚声。残りの黄巾兵は逃げて行く。それを追

撃する援軍部隊。夏侯淵はそれを視界の端に捉えながら生き残りの騎馬隊を集め村へと帰還する。

後は正規軍の仕事である。逃げて行く黄巾党の兵士達を追って行く援軍部隊を眺めながら村へ馬を進めた。

夏侯惇、心中を語る（前書き）

最近、何かと忙しくて更新が遅れてしまいました。誠に申し訳ありません。

夏侯惇、心中を語る

時は深夜。夏侯淵は夏侯惇と向かい合って座っている。黄巾党を撃退してから二日が経った。本来ならば援軍に来た将と会談する予定だった。

しかし、援軍部隊の一部が退却した黄巾党を追ってまだ戻って来ていないらしい。

その為、会談はその部隊が合流してから、という事になったので現在、村の復旧作業を進めている。

夏侯惇から話がある、と呼ばれたのはそんな時であった。目の前にある机には湯飲みが置かれており、中には湯が入っている。

「それで話とは？」

ゆっくりと湯気を上げる湯を飲んでいる夏侯惇にそう切り出した。夏侯惇が湯を飲む姿はその顔と相まって、どこか艶やかである。夏侯惇はゆっくりと湯飲みを机に置く。

「……妙才、貴方はこれからどうしようと思っていますか？」

「これからですか？」

何を今更？ と夏侯淵は思う。答えは決まっている。

「我が君に仕えます。丁度、援軍が我が君の軍でしたし」

そう、援軍の旗印は『曹』そして『夏侯』。つまり曹操の軍であったのだ。少し不安があるとすれば、曹操と思われる人物が金髪の少女という事だけである。

そして、その少女の傍らにいた青髪の女性は雰囲気からして夏侯惇だろう、と検討付けていた。

「……そうですか」

夏侯惇はそう言うとかかを考えるように目を伏せる。夏侯惇にしては珍しい表情だ。しばらく静かな時間が続いた。

「……私は、もしかしたら曹操軍に仕官しないかも知れません」

夏侯惇が不意にそう言う。しかし夏侯淵は一瞬、夏侯惇が何を言

ったのか理解出来なかった。

「な、何を……何を言っているのですか元議殿！」

信じられない。あの夏侯惇がこのような事を言っなんて。曹操の片腕であり腹臣中の腹臣である夏侯惇である。

「妙才、私は別に絶対仕えないとは言ってます。この国の曹孟徳の考え方次第です」

「考え方？」

夏侯惇の言葉に首を傾げる。そんな夏侯淵を見つめながら夏侯惇は口を開く。

「ええ。貴方はこの時期の漢王朝をどう思っていましたか？」

『この国』ではなく『この時期』と夏侯惇は言ったので自分達が元々いた漢王朝だと判断する夏侯淵。

「荒れていましたね。役人には不正が蔓延し、更に役職が平然と金で売買されていましたし。中央も宦官や外戚の権力争いで乱れてい

ました。役職を金で買った者が欲望のままに民へ重税を課す。だから黄巾党が反乱を起こした訳なのですが」

夏侯淵はここで湯飲みわ手に取り、生温かくなつた湯を飲み更に続ける。

「しかし、それでも四百年続いた漢王朝の権威は衰えを見せるものの、まだ存在していました」

「そう、そこです」

真剣な表情で夏侯惇が反応した。

「権威や権力、威光は衰えてはいるものの、まだまだ健在でした。趙雲殿達の話を読んだ所によると、こここの漢王朝も私達が元々いた漢王朝とほぼ同じ状態らしいです」

夏侯惇はこちらを射ぬくような視線でそう語る。

「妙才、もしこの時期に誰かが漢王朝を潰したらどうなりますか？」

「どう、と問われましてもすぐさま乱世に突入するでしょう。漢王

朝の権威や権力、威光がまだ健在であるから各諸侯が表立って力を蓄える事が出来ずにいるのですから」

何を当たり前な事を？、と夏侯淵は思わずにはいらなかった。しかし、そこで夏侯惇が言わんとしている事が分かった。

「まさか……この国の我が君がそのような事を考えていると？」

「そうかも知れません」

夏侯淵の問いに夏侯惇は答える。何を馬鹿な、と思ってしまつ。自分達が仕えていた曹操は滅び行く漢王朝を延命させたのである。漢王朝を潰すような事を曹操が考える訳が無い。

「妙才、貴方も知っている筈です。我々がいた国の者と、この国で同じ名前を持つ者は違つという事を」

夏侯惇は夏侯淵の心の中を読んだように言う。夏侯淵は夏侯惇の言葉に反論する事が出来なかった。気が付いてはいた。この国の趙雲達は、自分達が知っている趙雲達に多少似ている所はあるものの全く違う別人だという事に。

「確かに我々の主である曹孟徳であれば漢王朝をすぐさま潰す事は

しないでしよう。しかし、この国の曹孟徳はどのような考えを持っているのか分かりません」

夏侯淵は無言のまま夏侯惇を見つめ続けた。夏侯惇は更に言葉を続ける。

「もし、この国の曹孟徳が漢王朝を存続させる考えを持っていたら私は粉骨碎身、仕えましよう。しかし、漢王朝を潰すような考えであれば私は仕えません」

「……つまり元讓殿が望んでいるのは漢王朝の復興ですか？」

「ええ。その方が民に無駄な犠牲が出ません」

夏侯惇の眼からは意志の強い光が垣間見る。成る程、と夏侯淵は思う。そして夏侯惇に従おう、と自分でも驚く程あっさりと決めた。

元々、このようなややこしい話は自分には似合わない。ややこしい事を考えるのは昔から全て夏侯惇に丸投げしていたのだ。それに夏侯惇は少なくとも愚かな判断はしない筈である。

「分かりました。自分は元讓殿に従います」

「……案外あっさりと決めましたね」

夏侯惇は少し意外そうな表情で言っ て来た。

「そりゃ、もう昔からややこしい事の対応は全て元讓殿に任せていますから」

そう言つと夏侯惇は苦笑する。そして『ありがとう、妙才』と呟いた。

（さあて、これからどうなるのかな？　まあ、俺は元讓殿の命令に従うだけだな）

夏侯淵は窓から見える夜空を見ながら思う。心なしが先程より月が明るく見えた。

決別と新たな同行者（前書き）

最近、何かと忙しい為に更新が不定期及び遅くなりますので御了承下さい。

決別と新たな同行者

大きな宿屋にある部屋の一室。彼の視線の先で、漆黒に染まる長髪をなびかせる女性が長大な剣を引き抜きこちらを睨み付けて来た。

まるで猛獣の眼である。その女性の端整な顔には怒りの表現が出ている。溢れ出る殺気。普通の者であれば、それだけで何も出来なくなるだろう。

しかし、彼の隣にいる二人の青年は全く動じていない。一人は短い黒髪で、くつきりとした人懐っこそうな眼が特徴的。

もう一人は耳が隠れるくらいの長さの艶やかな黒髪。そして少し、切れ長の眼。瑞々しい肌。どこからどう見ても絶世の美女にしか見えない。

彼自身も身動きする事は出来る。しかし、背中から冷や汗が出ているが。

彼　李通はもう一度、目を正面に向けた。そこには長い黒髪の女性以外にも二人いた。

一人は青い短髪で殺気を放っている長髪の女性とは正反対に冷静

沈着だ。

もう一人は金髪の少女。しかし、その少女からは長髪の女性の殺気が可愛く思える程の覇気を醸し出している。

「もう一度、言っわ。この曹孟徳の下に来なさい」

「再度、申し上げますが断ります」

金髪の少女 曹操の誘いを一刀両断する美女のような青年
夏侯霸。

その言葉に長い黒髪の女性 夏侯惇の殺気が増大した。

「貴様！ 華琳様が直々に言っておられるのだぞ！！」

夏侯惇が凄まじい形相で吠えた。それと同時に窓越しに雷鳴が響き渡る。昼間なのに夜のように暗い。

雨が屋根を叩く音が部屋の中にも聞こえる。まるで、この部屋の状況のようだ。

「別に構わないわ、春蘭。で、私の誘いを断るのならば、それ相応の理由があるのよね？ 聞かせてくれないかしら？」

曹操の口調は丁寧だが、凄まじい威圧感を感じる。息まで苦しくなってきた。しかし、隣の二人は全く平然としていた。

いや、むしろ人懐っこそうな目が特徴的な青年　夏侯威は曹操達を睨み返している。明らかに機嫌が悪そうだ。

夏侯霸は夏侯覇で、いつも通りの穏やかな微笑を浮かべているのだが眼が笑っていない。むしろ据わっている。

実はというと李通は曹操の覇気よりも夏侯霸の眼に押されていた。静かな殺気と表現しても良いだろう。そんな感覚だ。

「貴方が目指している物と私が目指している物が違うからです」

「それは先程、貴方がした漢王朝についての質問かしら？」

曹操の言葉に夏侯霸はゆっくりと頷いた。その瞬間空気が更に張り詰める。

一触即発、とはこのような状況の事なのだろうか。

（早く終わってくれ……頼むから早く終わってくれよ……もう苦し過ぎだ）

こんな事なら戦場にいる方が余程マシである。ちなみに李通にも曹操から誘われたが、夏侯霸達に付いて行く事に決めてあるので断った。

夏侯霸達は見ず知らずの、この村を黄巾党の魔の手から助けたばかりか復旧作業にも進んで手伝ってくれていた。

その義侠心や人柄に惚れた。無論、恋するという事では無い。そもそも、そんな趣味は無い。
とにかく夏侯霸達に付いて行く事にしたのだ。

夏侯惇は相変わらず大剣を持ちながら睨み付け、それに夏侯威が睨み返す。

夏侯霸は夏侯霸で曹操と無言で睨み合っている。

重苦しい雰囲気の中、ふいに曹操が口を開いた。

「分かったわ。でも気が変わったら、いつでも私の下に来なさい。歓迎してあげるわ」

「そうですか。それはありがとうございます。では、我々はこれで」

そう言い夏侯覇は立ち上がり、部屋を出て行くとする。李通はその後に続いた。背後から夏侯威の気配もするので、彼も付いて来ているのであろう。

「この村を出ます」

しばらく歩いた時だった。夏侯覇が唐突にそう言い出した。外は相変わらず激しい雨が降っているらしい。

「そうですね。早く出ましょう」

「李通殿はどうですか？」

「え？ あ、はい。夏侯覇殿や夏侯威殿がそう言うならば異存はありません」

あっさりと決まっていくな段取りに若干付いていけない李通。更に夏侯覇と夏侯威は二人でどんどん決めていく。

「えー……と。何故、そんなに急ぐのですか？」

「殺されるかも知れないからです」

我慢出来ずに李通が尋ねたが、夏侯霸から返って来た言葉は李通の想像を越えた答えだった。

「自分で言うのもなんですが、登用出来なかった有能な人材が敵対する勢力に仕官したらどうなりますか？」

何故？ と訊こうとした李通の心を読み取ったように夏侯霸が答える。そして理解した。

「……有能な人材が敵になる前に殺しておく、という事ですか……」

「ええ、そうです。曹操殿が刺客を放つ可能性もありますから」

確かにそうかも知れない。念には念を、という事だろう。自分と同じくらいの年齢なのにそこまで考えるなんて、と感心する。その後、荷物を取りに行く為に夏侯霸達と別れた。

夏侯霸達は別の宿屋に泊まっているらしく、外へと出て行く。

李通はすぐに自分の部屋へと向かい、荷物を持つ。相棒の槍。剣。

路銀や、その他諸々。

準備を手早く終え、夏侯霸達と合流すべく走り出す。いつの間にか雨が止んでいた。雲と雲の間からは青空も見える。

合流地点は北門。ぬかるむ大地の上を駆けながら胸が昂ぶる。どんな旅になるのか楽しみだ。

しばらく走っていると北門が見えて来た。夏侯霸達は既に準備を終えて待っているのが確認出来る。

しかし何か少し変だ。楽進達三人組の姿も見えるのだが楽進達は頭を下げて何か頼んでいる。

李通は夏侯霸達に近付く。夏侯霸はどこか困った顔をしており、夏侯威は顔をしかめている。趙雲と魏延はどこか面白くなさそうな顔付きだ。

「どうかしたんですか？」

「ん？ ああ、李通か。いや何、こいつら三人が一緒に付いて行くって言うてんだよ」

こいつら三人とは楽進達の事であろう。李通は視線を転じ、楽進達の方へ向けた。

「お願いします！ 夏侯霸様達の戦い振りを見て我々がどれだけ未熟かを悟りました。我々の修行の一環として、どうか旅に御同行させて下さい！」

そう言って頭を下げる楽進。李典や于禁も同じように頭を下げている。

「……はあ。私は別に構いませんが……」

夏侯霸はそう言って視線を自分達に向けて来た。恐らく自分達の意見を聞きたいのだろう。

「私は夏侯霸殿がそう言うのであれば異論はありませんぞ」

「ワタシもだ」

趙雲と魏延がそう言った。その言葉に若干、嬉しそうな表情を見せる三人。

「俺も別に構いやしませんよ」

「夏侯霸殿達の決めた事ならば自分も異論はありません」

夏侯威の次に李通もそう答える。三人は顔を綻ばせ口々に感謝の意を唱える。かなり大所帯の旅になるが期待感に胸を躍らせる李典であつた。

河北の大地を駆ける義勇軍

大地を駆け巡る喚声。飛び交う怒号。轟く絶叫。

兵士が互いに命を奪い合い漂う濃厚な血の臭い。煌めく刀身。倒れ行く兵士。

そんな中、星は槍を扱い黄巾党の兵士を貫く。絶叫を上げ、鮮血の飛沫を撒き散らす。しかし敵の数はこちらよりも多い。

「今です！ 夏侯威隊と李通隊に合図を！！」

そんな夏侯霸の叫びが聞こえた。夏侯霸の言葉に応じて旗が振られる。すると右手の丘と左手の森から軍勢が飛び出して来た。丘側は『夏侯』の旗を、森側は『李』の旗を携えて黄巾党の軍勢へと突撃する。

「全隊反転！ 敵を打ち破ります！」

夏侯霸の心地良い声が響き渡る。その声と同時に守勢だった自軍の兵士達が攻勢に転じる。地を揺るがす喚声と悲痛な絶叫が戦場を支配した。

伏兵の所為で浮き足立っていた黄巾党の軍勢が、こちらの攻勢を

押さえ切れる筈もなく撤退して行く。

無論、夏侯霸がこの程度で終わる訳がない。

「夏侯仲權、行かせて頂きます！！」

夏侯霸が旗本、五百騎を従えて敵軍の背後目がけて突撃する。その後を三千騎の騎馬隊が続く。

一陣の風の如き速さ、そして鋭さで敵陣を貫いて行く。改めて夏侯霸の旗本の動きが凄過ぎると感じてしまう。例えるならば最早、五百騎で一つの生き物に見える。

「はあ、終わったな」

「ああ、そうだな」

漆黒と純白の髪をなびかせながら焰耶は近付いて来るなりそう言うてきた。その声からは疲れを感じさせる。星も槍を持つのでさえ辛いと感じる程だ。

ここ最近、戦ってばかりいる。曹操と別れた後、星達は河北に入った。

河北は黄巾党の動きが活発で豪族の兵を借りて、よく黄巾党の討伐

等をしていた。

そんな時だった。共に黄巾党と戦ってくれないか、と誘われたのだ。勿論、夏侯霸に対してである。

夏侯霸の指揮振りは思わず見惚れてしまう程に素晴らしいものだった。

別に共に戦う事に異論は無かった。しかし、誘ってきたのが黒山賊の張燕だったのが驚きであった。

黒山賊は河北や中原を中心的に活動している賊である。

しかし張燕曰く、それぞれの頭目が黒山と名乗り勝手に暴れ回っているだけらしい。張燕が率いる黒山賊の本拠地周辺では彼らの評判はかなり良かった。

時には自分達で田畑を耕し、時には山で採れた珍しい物を町で売ったり、時には農民達の手伝いをしたり、時には周辺の豪族達と共に黄巾党から農民達を守ったりと、賊がするような事では無い事ばかりしているようだった。

ならば賊と名乗らなくても良いと思ったのだが張燕には張燕の意志というか意地があるらしい。

そんな張燕が仲間内から聞いた情報によると五万にも達する黄巾

党の軍勢が向かって来ているとの事。
対する張燕や豪族達からなる連合軍は二万八千程らしい。

二万八千の内の一万五千は張燕の配下だ。黒山賊の頭目の中でも上位に入る兵力と豪族達との連合軍でも流石に黄巾党の大軍に抗する事は難しい。

そんな時、夏侯霸の勇名を聞いて頼みに来たという訳だった。ちなみに夏侯霸は河北や中原では『義の将』と称されていたりする。

最初は張燕が来た事に驚いていた夏侯霸だったが張燕の誘いは笑顔で了承した。星は夏侯霸の判断に従うつもりであつたし、他の者も異論は無いようだった。

その後、すぐに張燕の配下の訓練を開始。星達も参加していたのだが、あれ程まで厳しい訓練だとは思ひもしなかった。

軍規も厳しく、違反した者は問答無用で処断。現に十名程が夏侯霸に首を刎ねられた。その時の夏侯霸に対して住む世界が違つとまで思ってしまった程だ。

だが兵士達を休ませる時は休ませ、一人一人丁寧に悪い箇所を指摘し直させたおかげか、かなり強くなった。それに兵士達は夏侯霸を慕うようになった。

「李権、李通殿、張燕殿、御苦勞様でした」

「……いえいえ……そんな事はありません」

夏侯霸達と一緒に帰って来た。どうやら追撃もそこそこで切り上げたようである。労う夏侯霸の言葉に答える李通。しかし、その言葉の端々から分かる疲労の色を隠せずにいる。

「俺も……大丈夫……ッス」

夏侯霸の隣にいる茶色の短い髪に活発そうな眼が特徴的な長身の青年　張燕が息絶え絶えに言う。

後から付いて来る兵士達も疲労しているのが分かる。連戦なのだから当たり前だ。当たり前なのだが　。

「どうしますか、仲権殿？　もう行きますか？」

「少し休息し、斥候と合流した後に進軍します」

何故あの二人は疲れないのだろうか。星は夏侯霸と夏侯威を眺め

ながらそう思う。さも、このくらいは当たり前といった雰囲気だ。

星達がこれ程までに疲れているのには訳がある。それは夏侯霸の作戦と指揮だ。

張燕の配下を訓練し終えた夏侯霸は、なんと一万の兵力で戦うと言い出したのだ。つまり張燕の配下、一万五千の内の一万だけである。残りは本拠地の防衛だ。

流石に全員驚き皆、口々に反論した。しかし、その反応に夏侯霸は苦笑し夏侯威は呆れた表情をしていた。そして夏侯霸はこう言った。

『別に、たった一回の戦闘で五万を叩きませんよ。つまり持久戦です。』

という事らしい。つまりじわじわと何回も攻めて兵力を削ぎ落としていく作戦らしい。その他にも理由があるらしいのだが教えて貰えなかった。

とにかく五万の兵士相手に一万の兵士で戦い続けたのだ。夏侯霸の的確な指揮もあって、こちらの損害の十倍以上の損害を出している筈だ。

だが、その夏侯霸の指揮が一番の難関である。とにかく早いのだ。小刻みに命令を出したり、急に命令を出したりと多種多様な命令を出す。

確かに的確なのだが正直辛い。それでも星達や兵士もしつかりと付いて来ていると思っていたのだが、夏侯霸や夏侯威は不満のようだった。

そして夏侯霸は敵を完全に撃破するのではなく、適当に叩き周辺に存在する黄巾党の部隊と合流させ、再び適当に叩くというような作戦を実行している。

つまり、周辺に散らばっている黄巾党の大小の部隊も一網打尽にしようという事だ。今の所は上手く行っている。
しかし。

「今回の敵は八万つて所でしたね。まあ、三万は削りましたけど」

「そうですね。本音を言うと、そろそろ黄巾党本隊と合流してくれたら楽なのですが」

夏侯霸と夏侯威はそう言葉を交わす。そう、上手く行けば行く程に敵の兵力が増えて行くのである。

こちらの兵力も義勇兵が参加して来ているので増えてはいる。

「本隊と合流されたら十万は軽く越えてますよ。まあ、殺れって言われたら殺りますけど」

「ハハハハ。最高でも十万以上、三十万以内ですよ。まだまだ大丈夫ですよ」

何やら恐ろしい事を話しているのは気のせいだろうか。改めて彼らが歴戦の者だという事を確認出来る会話だ。

夏侯霸は夏侯威と、にこやかに会話を続ける。時には冗談を挟みながら。夏侯霸が自分達に見せる笑顔とは、また違う笑顔である。

身内だからだろう。夏侯霸と夏侯威は従兄弟なのだから当然だ。しかし、何故か悔しい気持ちが入り込みに上げて来る。

頭では理解出来るのだが心では納得出来ない感じた。夏侯威の次に付き合いが長いのは自分だ、と思ってしまう星。

胸が変な感じだ。言い表わすならば胸がモヤモヤするといった所だろうか。星はこんな感覚や感情は知らない。初めての事である。

何となく胸が苦しい。そんな感覚を振り切るように夏侯霸に話し掛けようと口を開けた。しかし、別の声によって遮られてしまう。

「孫礼、高順、ただ今戻りました」

二人の青年が十名ばかりの兵士を引き連れて夏侯霸に言った。孫礼と高順、この二人は義勇兵として加わった者達である。中々の実力である為、夏侯霸はそれぞれに一隊づつ任せている。

「御苦勞様です。それで敵軍はどこに向かいましたか？」

「このままですと敵本隊と合流します。それと敵本隊と官軍が対峙しています。司令官は盧植という方で、職は北中郎将だそうです」

そう報告する孫礼。それに対して夏侯霸は頷いていた。

「そうですか。では敵の総戦力は？」

「……今の所は二十万以下です。恐らく十七万から十九万といった所でしょう」

普段寡黙で冷静な高順が険しい顔で言った。今の所は、と言った

という事はその数よりも多くなるかも知れないからだろう。

「……今回はかりは官軍との共闘になりそうですね」

そう呟く夏侯霸。物思いに耽るその横顔から目が離せなくなる星。何故か、今度は切ないような気分になる。しかし、決して不快では無い。むしろ心地良く感じる。

「少し休息したら進発しましょう。李権、楽進殿達は？」

「多分、疲れて寝ていると思いますよ。まあ、進発する時には大丈夫でしょう」

夏侯霸と夏侯威が段取りを決めていく中、この切ないような感じは何なのだろうか、と思い悩む星。

空を仰ぎ、そこに悠々浮かぶ雲を見る。雪のように白い雲を眺めても答えが出る筈も無かった。

敵陣を貫く一陣の風（前書き）

〈五胡〉

五胡とは『匈奴』『鮮卑』『羯』『テイ』『羌』五つの非漢民族の総称です。

（テイは漢字で表記出来ませんでした）

その他にも鳥丸^{うがん}などの異民族が漢にはいました。

ちなみに五胡は総称であって、五胡という組織として動く訳ではありません。

敵陣を貫く一陣の風

陽光が煌めく中、風が血の臭気と兵の喚声を運ぶ。光を反射し、輝く刀身が迫り来る。

それを彼女　華雄は自分の得物である大斧を扱い防ぐ。そして剣を弾き飛ばし敵兵を斬り裂く。血飛沫が白銀の大斧を染め上げる。

状況は極めて不利だ。河北にいる討伐軍と合流しようと進軍していた時だった。黄巾党の大軍と遭遇し済し崩し的に交戦した。黄巾党の兵力は約十万程。それに対して、こちらは三万。

相手の数こそ多いものの、今まで何度も黄巾党と戦って来た自分達の方が練度は高く強い、と思っていたのだが実際には違っていた。

敵の堅陣を崩す事が出来ない。同僚である張遼や呂布と共に突撃しても押し返された。更に敵は隙を突いて、こちらを分断し始めたのである。

その為、呂布や張遼の部隊と分断されたばかりか彼女達の君主である董卓がいる本陣とも分断されたのだ。

本陣の兵力は一万五千。残りは華雄、張遼、呂布がそれぞれ五千づつ率いていた。どうにかして華雄は張遼と合流出来たものの劣勢

である事には変わらない。

「アカン！ 斬っても斬ってもキリがないで！」

華雄の隣で偃月刀で敵兵を薙ぎ払う張遼。彼女の偃月刀が吠える度に鮮血が舞い、偃月刀の刀身を真っ赤に染め上げる。

「クソ！ このような雑兵ごときに！！」

華雄も負けじと大斧を振るうものの、敵兵の数は一向に減る気配を見せない。逆にこちらの兵士の姿が少なくなっているような気さえる。

いや、確実に少なくなっているだろう。風を斬り裂きながら敵兵を喰らう大斧。雄叫びを上げる偃月刀。しかし、華雄と張遼の奮戦も虚しく更に状況は悪くなっていく。

「張遼様！！ 敵軍が我々を包囲しようとしています！！」

「このままでは全滅してしまいます！！」

近くにいた張遼の部隊の隊長格の兵士達が叫ぶ。確かに敵軍はこ

ちらを包み込もうとしている。だが、ここで下手に退いても戦線を保てず崩壊するだろう。

「華雄様、一旦退きましょう！ このままでは全め」

華雄に近寄って来た隊長格の兵士の声が途切れる。華雄が視線を転じて確認すると首から上が無い隊長格の兵士が地に伏していた。

（クソ！！ このような所で私が！ 私が！！）

華雄は内心毒づきながら大斧を煌めかせ敵兵を斬り裂く。辺りから兵士の絶叫が聴覚を刺激する。

「華雄様！ 援軍です！！」

「何だと！？」

近くにいた兵士が指差した方を見る。すると左手の丘から軍勢が現れた。

しかし装備はしっかりしているものの、統一性が無い。恐らく義勇軍なのだろう。数はおよそ二万。

「たった二万程度の義勇軍が援軍に来て、も焼け石に水やで！」

張遼が叫ぶ。その声には失望の色が含まれていた。義勇軍は正規軍とは違い、練度が低いのが普通だ。

たった二万ばかりの兵力では、この戦況を覆すのは無理である。

それを知ってか知らずかその義勇軍は黄巾党軍へ向けて突撃を仕掛ける。

そして滑らかな動きで軍勢を三つに分け始めた。

思わずその光景を見つめる華雄。義勇軍の動きでは無い。むしろ歴戦の部隊と表した方がしっくり来る。

その三つの内の一つはこちらに向かって来た。兵力は騎馬が五百程。歩兵が五千から六千。

残りの二つの兵力は、それぞれ騎馬が一千五百くらいと歩兵が五千から六千。

その中でもこちらに向かって来る五百の騎馬隊が凄まじい。まるで一頭の巨大な獣が動いているかのようだ。

風を切り裂きながら向かって来る騎馬隊。それに対して迎撃態勢を整えようとする黄巾党軍。

しかし、そこへ騎馬隊から何か放たれた。矢だ。矢は天に舞い上がり、大気を貫き黄巾党軍へ降り注ぐ。迎撃態勢を整えようとしていた前衛が次々に倒れていく。

「んな、アホな!？」

張遼が驚愕の声を上げた。それもそうだろう。馬上で矢を放つつまり、騎射はそうそう簡単に出来る代物では無い。

それをこちらに迫り来る義勇軍の騎馬隊がやってのけたのだ。驚かない方がおかしい。

前衛が倒れた空間に騎馬隊が突っ込んで来た。ぶつかった、と思った瞬間に敵陣を紙を裂くかのように貫いて行く。

僅か五百の騎馬隊が疾風になりて敵陣を乱す。騎馬は敵陣中央に向かい貫く。何かが宙を舞った。それを見た敵軍の動きが止まる。

その間に五百の騎馬隊は敵陣を突き抜けた。騎馬隊が敵陣を貫いて出来た穴に歩兵隊が突っ込んで来る。突き抜けた騎馬隊もすぐさま旋回して再び鋭い突撃を仕掛ける。

歩兵隊との挟撃。敵の陣形が乱れる。悲痛な叫びが幾重も戦場に

轟く。その中を貫く騎馬隊。彼らが通った後には鮮血が舞い上がり、死体の山を築く。

騎馬隊は敵陣を何度も貫いて行く。最早、彼らに抗する力を残していない黄巾党。その騎馬隊がこちらに近付いて来た。

「無事ですか？」

先頭にいた女性が涼やかで心地良い声で話し掛けてきた。その顔に思わず見惚れてしまう華雄。美に関する事に疎い華雄であっても、これだけは分かる。美しい、と。

艶やかな黒髪を風になびかせ、切れ長で強い光を放つ眼には優しさに満ち溢れている。瑞々しい肌と唇は見る者全てを魅了するかのようだ。

そんな彼女の右手には長剣が握られていた。白銀の刃を血で深紅に染め上げている。

「……物凄いい、べっぴんさんや」

張遼の惚けたような呟きが聞こえて来た。珍しく華雄も同じ事を思っているのだった。目の前の女性は若干、首を傾げながら再び口

を開いた。

「あの、本当に大丈夫ですか？」

「え、あ、ああ。大丈夫だ」

華雄は慌てて答えた。戦場なのに戦う事も忘れて穴が空きそうな程、見つめていた自分に恥ずかしさを覚える。

「そうですか、それは良かった。被害の方はどうでしょうか？」

「ちょっと損害が大きいけど、まだ戦えるで」

黒髪の美女の問いに答える張遼。確かに損害は大きいが、まだ戦える。

「夏侯霸殿！ 敵軍が後退して行きます！！」

一人の青年が駆け寄りながら目の前にいる美女にそう報告する。どうやら美女の名前は夏侯霸というらしい。

「そうですか。所定位置へと追い込んでいますか？」

「はい、夏侯威殿達が上手くやって来ています」

「ならば私達も行きましょう。付いて来て下さい」

こちらにそう声を掛けるなり馬を返して騎馬隊と歩兵隊を引き連れ進軍し始める夏侯霸。華雄は慌てて部下を引き連れ付いて行く。張遼も少し遅れて付いて来る。

後退する敵軍を追い回している部隊の中に『呂』の旗が見える。更に少し離れた場所には『董』の旗があった。どうやら呂布や董卓も無事らしい。密かに胸を撫で下ろす華雄。

その時だった。後退を続ける黄巾党軍の前方にあった雑木林の中から軍勢が飛び出して来た。数は一万五千程だろうか。

恐らく先程、美女　夏侯霸が言っていた事はこれだったのだろう。その采配振りに舌を巻かずにいられない。

「馬鹿な！？　早過ぎる！！」

大きな叫びを上げる。驚いて思わず夏侯霸の顔を伺った。すると先程まで存在した穏やかな雰囲気は消え去り、顔を歪めていた。

「高順殿！ 私は先に行きます！！ 貴方は彼女達と共に逃げる敵を討って下さい！！ なるべく大きな集団のを狙うようにして下さい」

そう言うなり夏侯霸は騎馬隊を率いて風の如く駆け出して行った。全く状況を理解出来ない華雄は呆然とするしかなかった。張遼も同じ思いなのだろう。

張遼は高順と呼ばれていた青年に訊ねた。

「一体何が早いんや？」

「……伏兵部隊だ。本当ならばもっと待ってから出るべきだった。そして敵の退路を塞ぎ追撃部隊と挟撃し、南へと撤退するように誘導。撤退して来た敵を我々が横撃する手筈……だった」

忌々しそうに伏兵部隊を睨みながら言う高順。凄いとしか言いようのない作戦だ。本当に彼らは義勇軍なのだろうか、という疑問さえ浮かび上がって来る。

伏兵部隊と追撃部隊に挟撃され四散して行く黄巾党軍。しかし伏

兵部隊の大半は追撃部隊よりも動きにキレが無い。

旗印は『劉』や『関』『張』、そして『十』だ。先程の高順の態度からして彼らの部隊では無いのであろう。もしかしたら官軍から借りて来た部隊なのかもしれない。

四散した部隊を切り裂いて行く夏侯霸の騎馬隊。鋭い槍のように敵陣を貫く。

「……我々も行くぞ」

高順は戟を構えて行く。張遼がその後に続き、華雄も大斧を構えて進む。とにかく眼前の敵を倒すのが先決だ。全身に風を浴びながら混乱している敵の一部へと突撃して行った。

ある日の従兄弟

「だから、たった五百騎で二万の軍勢に突っ込むなんて普通は誰もしないですよ！　というか、もう今後一切やらないで下さい！」

部屋に轟く怒号。夏侯惇と机を挟み向かい合わせで座っている夏侯淵が、語気を荒くして言ってきた。

正直、半月も前の事を蒸し返さないで欲しい。だが、そう言つとまた怒鳴られるのが目に見えているので言わないでおく。

黄巾党討伐の戦いから半月が経った。黄巾党と決戦の際に首領である張角、張梁、張宝の三人は曹操が捕縛し処断したという情報が入っている。

現在、討伐軍の大半は周辺の村等の復興作業を手伝っており、夏侯惇達は一段落したので休憩している所だ。

「分かりました、今後気を付けます」

「本当に止めて下さいよ……そういえば、この国の曹操殿はかなり危ない事をしてますよね」

夏侯淵は多少訝しげに、こちらを見た後にそう言ってきた。夏侯惇はその言葉に頷く。

黄巾党の首領である張角、張梁、張宝は曹操が処断したという事になっているが実際には生きて曹操軍の保護下にいららしい。

これは夏侯惇が独自に集めた信憑性の高い情報だ。恐らく、この国の曹操は三人を利用し黄巾党の残存兵力を手中に収める気なのだろう。

しかし、それは諸刃の剣だ。もし朝廷に嗅ぎ付けられたら逆賊扱いされるだろう。民衆に知られてもマズイ。

自分達を苦しめた勢力の首領が、のうのうと生きているのである。

誰もが怒り狂う筈だ。そうしたら民心は離れて行き曹操の名声も地に堕ちるだろう。夏侯惇としては、そんな勢力には少なくとも入りたいとは思わない。改めて曹操の誘いを蹴っておいて良かったと思う。

「ああ、そういえば妙才。最近、この国の私と仲良くしているらしいですね。曹魏で一番の女たらしの異名を持つ貴方の本領発揮ですか？」

そう言ってみたら夏侯淵が思いつきり睨んできた。『いい加減にしろ』と目で語って来る夏侯淵。

そんな夏侯淵に微笑みで対抗してやる。そして『じゃあ、どうい

事が説明しろ』と目で語り返す。

「……『この前の決着を付けよう』って一騎打ちに誘われまして……」

「それで？」

「……俺が勝ったんですけど……何故か知らないのですが、真名を教えてもらいました」

嫌そうに言う夏侯淵。ちなみに夏侯惇と夏侯淵が真名という物を知ったのは、つい最近である。

「流石は『曹魏で並ぶ者無し』と言われた程の女たらしですね」

「だ！ か！ ら！ いい加減にして下さいよ！ というか、そのあだ名が付いたのは元議殿の所為ですよ！！」

声を荒げて反論する夏侯淵。やはり、こういう奴をからかうのは楽しいと思ったのは内緒だ。

「心外ですね。何故、私の所為なのですか？ 人の所為にするのは

良くないですよ」

「心外なのはこちらですよ！！ 元讓殿が幾人もの女性の女心を黙殺するからでしょうが！！ それで元讓殿が自分の代わりに落ち込んだ女性達を慰めろって言ったから、こうなってしまったんですよ！！」

「正直、勝手に私に惚れた方が悪いと思うのですが」

本当にそう思う。確かに自分に対して恋心を抱いていた女性の気持ちに気付かない振りやらその他色々と様々な手段を使い、諦めるように仕向けた自分も悪いと思う。

だが武人に恋だの愛だのは必要無い、と本気で思っている夏侯惇。

「……酷いですね。というか、もしかして……今回も……ですか？」

「ええ、武人に恋だの愛だのはいりませんから。そんな物がなくても、しっかりと働けますしね」

「……本気で止めて下さいよ……もう、俺は嫌ですからね。これ以上、女たらしの称号に甘んじるつもりは毛頭ありませんから……」

夏侯淵はこちらを疲れた視線で見つめながら言う。若干、夏侯淵が萎びているように思えるのは気のせいだろうか。

「……元讓殿……正妻や側室の一人や二人、三人や四人、五人や六人くらい作りましょうよ……俺からのお願いです」

「慎んで断ります」

「即答！？ しかも断られた！？」

当たり前だ。いつ死地に赴くかも分からないのに生への執着を残してどうする。それに悪戯に未亡人を増やす趣味は持っていない。ちなみに、この考えを他人に強要するつもりは無い。あくまで自分に対する戒めである。

「元讓殿、趙雲はどうするんですか？ 趙雲自身、気が付いていないようですが明らかに元讓殿に惚れてますよ」

「気が付いていないのなら気が付いていないままで良いではないですか」

「……魏延は？」

夏侯淵はいつになく粘る。だが、そんな事くらいで心動かす夏侯惇ではない。

「劉備殿に一目惚れしたようですよ」

「いやいや、それは自分の本当の気持ちに気が付いていないだけですよ。絶対、魏延も元讓殿に惚れています」

「まあ、魏延殿が劉備殿を好いているのならばそれで良いではありませんか」

夏侯惇の言葉に夏侯淵は顔をしかめる。しかし、まだ諦めていないようだ。

「楽進は？ どこからどう見ても元讓殿に好意を抱いていますよ！」

「のらりくらりと避けます」

「……………」

無言になる夏侯淵。何を言っても無駄である。例えるならば、五万の兵力で五十万の兵力を相手にしているようなものである。

「……じゃあ、この国の俺は？ 何気に仲良くしているらしいじゃないですか」

「そこまで仲良くありませんよ……そろそろ止めましょうか。このまま続けても平行線のままですし」

夏侯惇がそう言うと言った感じで頷く夏侯淵。しかし、まだ諦めていないようである。

「……そういえば、仕官先はどこにするつもりですか？」

夏侯淵は思い出したように訊いて来た。仕官先は決めていたが、確か夏侯淵に話していなかったような気がする。

「一応、劉備軍に行こうかと」

「何故ですか？」

夏侯惇の言葉に夏侯淵は若干、驚いた顔をしながら訊ねて来た。

「まあ、この国の董卓軍でも良かったのですが劉備軍の方が動き易いと思ったので」

「……と、言いますと？」

「そうですね……考え方の違いですかね。確かに董卓軍の方が精強ですし、董卓殿は劉備殿より君主として、しつかりとした方です。しかし、防御思想なんですね。自分から他勢力に攻め込まないでしよう」

「確かにそうですね……成程、元讓殿が考えている事が分かりました。つまり劉備殿の方が裏から操り易いって事ですね」

「……そこまで言いますか？ まあ、あなたが間違いではありませんが……」

夏侯淵の言い方に苦笑する夏侯惇。董卓の方が意志がしつかりしている分、自らのやり方を変えないだろう。つまり、徹底的な防御策。君主としては立派だがそれでは天下統一など出来はしない。

それに対して劉備の方がまだ、やり易いと夏侯惇は判断した。それに中途半端に大きな勢力の董卓軍よりも弱小勢力である劉備軍の

方が動き易い。

「劉備殿から誘いも来てますし、丁度良いと思ったのですが」

「まあ、俺としては元議殿に付いて行くだけですから構いませんよ。他の奴らも同じでしょう」

にこやかに笑いながら言ってくる夏侯淵。その後、しばらく夏侯淵と今後の事で色々と話合った。

「兵力は二千から三千程度連れて行くと思います。残りは張燕殿に預けて黒山賊の拠点に行っておいてもらいます。補佐は孫礼殿で」

「そりゃ、そうですね。劉備軍と合わせれば三万に到達しますもんね。今回の功績で劉備殿が、どこぞの太守になったとしても三万もの兵力は養えませんか」

「ええ。それにいざというときに予備の兵力はあった方が良いでしょう」

会話は弾み、時には冗談を挟みつつ話す夏侯惇と夏侯淵。話題は巡りに巡り何故か。

「だから！　この際、誰かと付き合っ
」

「いません。というより何故、この話題に戻ったのですか？」

「そんな事はどうでも良いです！　それより誰かの思いを受け入れ
たらどうですか！！　あまりにも可哀想ですよ！　この頑固者！」

「その言葉をそっくりそのまま貴方に返します。それに私に対して
恋心を抱いている事さえ気が付いていないのですから、別にそのま
ま放っておいても構わないではありませんか」

不毛過ぎる口論が続く。何だかんだ良い事を言っている夏侯淵だ
が実際には、これ以上女たらしの称号に拍車を掛けたくないだけだ
ろう。

「もう止めませんか？　そんな事を何回言っても私の考えは変わり
ませんよ」

「……………分かりました、もう止めましょう……………今回だけは」

夏侯淵はこちらを睨みながら言う。そんなに女たらしという称号
が嫌なのか、と思う夏侯惇。もう勘弁して欲しい。

夏侯淵は、まだまだやる気満々のようだが自分の考えは変わる事は無いだろう。密かに溜め息を吐く夏侯惇であった。

ある日の星（前書き）

かなり不定期更新になるので御了承下さい。

ある日の星

曙の光りが辺りを照らし風に誘われて木の葉が擦れ合う音を奏でる。

その音と共に大気を斬り裂く鋭い音が星の耳に伝わって来た。

星の視線の先には己の持てる限りの剣技を出し続ける青年の姿があつた。

艶やかな黒髪を風になびかせ、しなやかな身体を滑らかに動かし、その瑞々しい肌から飛び散る汗を陽光に煌めかせながら斬撃を放つ。

そんな彼 夏侯霸の姿を少し離れた場所から眺め続ける星。彼女にとっては至福とも言える一時である。

夏侯霸達と共に劉備軍の傘下に入って多少、日が経った。当初は慣れない事もあつたが、近頃は馴染み始めて来たが様々な事に不満を感じる事もある。

しかし、今はそんな事よりも彼の姿を見つめ続ける方が先決だ。夏侯霸は斬撃を放った勢いのまま回転し上段蹴りを出す。

この鍛練から夏侯霸の一日が始まる。そして、この鍛練を見て星の一日も始まる。彼と始めて出会い、しばらくしてからこの鍛練に気が付いた。

それ以来、彼の鍛練の見学が毎日の日課になった。星の視界の中で刀身が朝日に煌めき輝く。

長剣を大きく横に薙ぎ、鞘に収める。どうやら今日の鍛練は終了らしい。

星は深呼吸し、ゆっくりとある決心を胸に夏侯覇に近付いて行つた。

以前、気配を消して背後から近付いたら斬られそうになったので気配を消さないように注意しながら彼の下へと歩み寄る。

夏侯覇曰く、微妙に気配を消して近付いて来たから暗殺者の部類が襲つて来たのかと勘違いしたらしい。

その時もいつもと同じ笑顔だったのだが、その時程彼の笑顔が怖かった事は無い。それ以来、夏侯覇に近付く時は気配を消さずに近付く事になっている。

「おはようございます、夏侯覇殿」

「はい。おはようございます、趙雲殿。今日も良い天気になりそうですね」

胸の高鳴りを感じながらも普段通りの声が出るように意識し挨拶する星。それに夏侯覇は傍に置いてあった布で汗を拭きながら星に挨拶を返す。

「ええ、そうですね……その、夏侯覇殿……一緒に……朝食を食べませぬか？」

星は少し詰まりながらも言い切った。何故か不思議な事に早朝鍛練を終えた夏侯覇はどこを探しても見つからないのである。という訳で今回は鍛練を終えた直後を狙ってみたのだ。

とても顔が熱い。恐らく真っ赤になっているだろう。目の前にいる夏侯覇は一瞬、驚いた表情をしたがすぐにいつも通りの笑顔に戻る。

「ええ、趙雲殿が宜しければ私は別に構いませんよ。ただ、汗をかきましたので着替えてからで宜しいですか？」

「え、ええ」

喜びを噛み締めながら何とか普段通りに答える星。更に嬉しさのあまり何を言ったか覚えていないが、成り行きで夏侯覇が汗を拭いた布を星の自室にある洗濯物と一緒に侍女に渡す事になった。

星は夏侯霸と別れ自室へと向かう。その足取りは軽く、鼻歌を歌いそうな気分である。そんな星を祝福するかのように小鳥達のさえずりが辺りに響き渡った。

自室に戻った星は自分の洗い物を引つ掴み夏侯霸が使用した布と共に侍女へ渡す為に歩き始める。

（っは！？ いかんいかん。何をしゃいでいるのだ私は。将たる者、いかなる時も平常心を保たねばならん……）

夏侯霸の教えを思い出し気持ちを落ち着けようとする星は大きく深呼吸をした。しかし、それが間違いだったのかも知れない。星の嗅覚を微かに刺激する匂いが漂って来た。

（あ……夏侯霸殿の……）

夏侯霸の汗の匂いと意識した瞬間、心音が苦しくなる程に大きくなった。息も荒くなり湿り気を帯びているようだ。

星は再び大きく息を吸う。すると先程よりも鮮明に夏侯霸の匂いが鼻腔を刺激する。身体が熱い。汗まで浮かんで来ている。

（わ……私は何をしているのだ……早く侍女に渡さねば……）

そう考えるものの、もう少しだけと自分に言い聞かせる。いつの間にか足も止まっていた。

そして気が付いたら左手に自分の洗濯物を抱えながら右手に夏侯覇が使用した布を持っていた。

湿り気を右手に感じつつ星の視線はその布から離せなくなる。異様な喉の渴きを覚え、唾を飲み込む。

穴が空く程、見つめながら徐々に右手を顔に近付けて行く。その間に段々と夏侯覇の汗の匂いが強くなる。右手は顔の少し手前で止まった。星の嗅覚を支配する匂いで頭の中に靄が掛かったような感じになる。

嫌な匂いでは無い。むしろ、ずっと嗅いでいたいと思う程に好きな匂いだ。例えると、さっぱりとした甘さの果物。

一度食べたら夢中になってしまうような感じだ。少なくとも星はそう思っている。

喉の渴きが強くなり何度も唾を飲み込む。更に息も夏侯覇の厳しい訓練を受けた時みたいに荒くなる。

身体はまるで燃え盛る炎のように熱い。

頭の片隅で警鐘が鳴り響く。こんな事はすぐに止めろ、と。しか

し、もしかしたら右手に持った布がこの耐え難い喉の渴きを癒してくれるかも知れない。

更に気になる事は調べたり確認した方が良く、と夏侯霸も言っていたと自分に言い聞かせ納得させる星。

そう、これはただ単に知的好奇心と探求心に基づいた行動であり決して疚しい事では無い。

そんな事を何度も頭の中で繰り返しながら意を決して一気に顔を布に押し付けた。そして大きく息を吸う。

それと共に肺の中が彼の匂いで満たされる。頭の中で靄が強まったような気がする。何度も何度も唾を飲み込み、息を吸う。

しかし、どこか切ない。胸が彼の匂いに満たされるのにどこか切ない。胸が張り裂けそうだ。その切なさを誤魔化すかのように星は更に布を押し付ける。

「趙雲様、どうかなさいましたか？」

突如、背後から女性の声が聞こえた。星は飛び上がりばかりに驚きながら急いで背後に身体ごと向く。その際、右手を背中に回し

隠した。

声を掛けて来たのは洗濯係の侍女だった。侍女は少し首を傾げつつ言葉を紡ぐ。

「顔が赤いですが、どこか体調でも悪いのですか？」

「い、いや、何つでも、にゃい！」

思いつきり噛みつつ答える星。そんな星を不思議そうに眺める侍女は『そうですか』と言った。

「あ、ああのな、しえんちやくもによを！」

「しえんちやくもによ？……あ、洗濯物ですか！　これはこれは御足労をお掛けして申し訳ありません」

侍女は何度も頭を下げつつ星が持っていた洗濯物を受け取り一礼して去って行った。

（……しまった。夏侯霸殿の布を渡せなかった……）

今、侍女を追いかけて渡しても怪しまれるかも知れないので仕方なく自室に置いておく事に決めた。

走って自室に戻った星は掃除係の侍女に見つからない場所に夏侯霸が使用した布を隠す。そして急いで食堂へと向かった。

そろそろ夏侯霸の着替えも終わる筈だ。怪しまれないようにしなければならぬ。しかし、先程やってしまった事を思い出し罪悪感に苛まれながら夏侯霸にいつも通り接する事が出来るかどうか心配な星だった。

ある日の焰耶（前書き）

誠に申し訳ありませんが、一部の文章がとても長いので御了承下さい。

ある日の焰耶

「うおおおおおお！！」

焰耶は気合いを入れた雄叫びを辺りに轟かせながら剣を振り下ろす。陽光に煌めく刃が風を引き千切りながら彼へと向かって行く。

しかし、渾身の一撃は空を斬った。避けられたのだ。だが、すぐさま剣を斬り上げる。彼はその漆黒の髪をなびかせつつ、後方に跳んで避けた。

しかし予想の範囲内。焰耶は一気に間合いを詰め、鋭い突きを放つ。空気をえぐるような突きは彼の瑞々しい肌に迫る。

「良い突きですね。しかし」

「うわっ！？」

焰耶は一瞬、何が起きたのか分からなかった。彼が消えたと思った瞬間に足へと衝撃が走り、焰耶の視界一面に青々しい空が広がっていた。足払いをされたと気が付いた時には固い地面に仰向けに倒れており、更に彼の剣が首へ突き付けられていた。

「私の勝ちですね」

「……はあ。まさか、あの突きを避けられるとは思わなかった」

彼 夏侯霸に差し出された手を掴み立ち上がるのを助けてもらいながら言う。三日間、考えに考え抜いた戦法だったのだ。

「しかし、中々に良い突きでしたよ」

夏侯霸は微笑みながら言うて来る。汗で濡れた髪の毛の所為で異様に色っぽい。

更に彼の上着は袖無しの薄着であり、汗を吸いピッタリと体に引っ付いていて色っぽさを倍増させている。

焰耶は夏侯霸を直視する事が出来ず、チラチラと見やるしかなかった。

現在、焰耶は夏侯霸と剣の訓練中である。夏侯霸は自分の得物以外に最低でも一つは他の武器を使えるようにしておけ、と焰耶達に言っていたのだ。

これは自分の得物が使用不可、又は手元に無い場合の為らしい。
確かに納得のいく理由である。

「剣の訓練を始めたばかりの頃は笑いが込み上げて来る程の腕前でしたね」

「う……うるさいぞ。昔の事だろうが」

クスクスと笑う夏侯霸に言い返す焰耶。こんな何気ない会話なのに何故か心が温まる。

夏侯霸を一言で言い表わすならば摩訶不思議である。質実剛健でも良いのだが摩訶不思議の方がピッタリのような気がする。

同じ年齢くらいなのに、そこらの名将と呼ばれる將軍よりも全てを上回る。人望も厚い。兵士からも慕われている。本当に凄まじい
としか表現出来ない。

しかし、よく考えるとおかしいのである。例えば夏侯霸の指揮能力。最早、歴戦の将としか思えない指揮振りだ。

だが、見た目から判断して夏侯霸の年齢は十代後半から二十代前

半だろう。

大抵、一般的には十四歳か十五歳くらいで元服だ。もし夏侯霸の年齢が二十歳だとして元服したのは十四歳としても、僅か六年である。

僅か六年間で夏侯霸と同じ指揮が出来るかと訊ねられたら『絶対無理』としか答えようが無い。

夏侯霸の指揮は例えるなら一生を戦の中で過ごし、何万、何十万という兵士を率いてきた將軍の指揮である。

次に武力。これは指揮能力と同じだ。ただ単なる『力』であれば納得の出来る範疇だ。

しかし『技量』は明らかに別物だ。夏侯霸の技量は十年や二十年で達する領域を遥かに凌駕している。

そもそも夏侯霸の年齢で剣に始まり槍、戟、弓、棍等々、何種類もの武器を使いこなす事が出来るのだろうか。

後は商才。義勇軍の時に夏侯霸は兵糧を買い集めて売り、そして再び買い集めて売っていた。

それを何度も繰り返し返す内に兵糧が一番最初に集めた量の四倍になっていた。

（何というか……訳が分からない……）

愉快そうにクスクス笑う夏侯霸を見ながら心底思う焰耶。

（あ、そういえば……）

そこで、ふと思い出す。それは黄巾党討伐が終わった時の事だった。

焰耶が陣中を歩いていたら夏侯霸が大量の軍資金を視察に来た宦官に渡していた所を発見したのだ。

功績を挙げなくても宦官に賄賂を渡しておけば多少良い官位が貰える。

つまり賄賂だ。発見した際憤りを覚えたが仕方ない事だ。

無位無官の義勇軍は所詮使い捨ての駒。どんなに功績を挙げても、あまり高い官位は貰う事が出来ない。

夏侯霸の事であるから私利私欲の為に賄賂を渡したのでは無い筈だ。恐らく自分達や兵士を養う為に官位が必要だったのだ。だから宦官に賄賂を渡したのだろう。

実際に彼が渡した金は太守職であれば楽に貰える金額であつた。しかし幾ら待っても任官の沙汰は来ず、夏侯覇に比べれば埃にも等しい功績であつた桃香が太守職を貰っていた。

そして夏侯覇は劉備軍の傘下に加わつた。全く意味が分からない。確かに夏侯覇が任官されなかつたから桃香と運命的に出会えた訳なのだが納得出来ない。

ぶつちやけ劉備軍の功績は夏侯覇が挙げた功績に比べれば　と
いうより比べれるのも失礼な程の微々たる物であつたのだ。

（なのにな何故……何故にワタシが尊敬し、信頼し、大好きな……つて恋愛とか、そんな意味での好きじゃなくて！　ワタシには桃香様が！　ももも勿論、夏侯覇の事は良く思っているがワタシにはワタシにはワワワワワタシには！！）

少し前の事を思い出し機嫌が悪くなる焰耶だつたが何故か暴走し、勝手に自爆してしまった。

ちなみに劉備軍に加わつた際、夏侯覇以外に真名を授けたり授けたりした。そう夏侯覇以外と　。

そこで再び焰耶が暴走し始める。

「……………ククク……………フフフ」

間髪入れずに焰耶はツツコミを入れる。すると夏侯霸の表情が崩れ笑い始めた。始めは微かにしかし、すぐに愉快そうな笑い声を上げる。

焰耶は思わず、その光景に見入ってしまった。こんな夏侯霸の表情を見るのは初めてである。普段は大人びた雰囲気醸し出している夏侯霸が子供のようにあどけない顔で笑っている。

何故か胸が締め付けられるような感覚が走った。更に思わず抱き締めてしまいそうにもなり無理矢理、根性で押さえ込んだ。何故、急にこんな感覚に襲われたのか理解出来なかった。

「はあはあ……………すみません。あまりにも魏延殿をからかうのが……………楽しくて、つい」

息絶え絶えに言葉を発する夏侯霸はどこか艶やかだった。顔が熱くなり、夏侯霸を抱き締めたという衝動が夏侯霸の胸に飛び込みたいという衝動に変わった。

しかし、何とか押さえ込む。一歩間違えば実行していたに違いない。それに物凄く胸が苦しい。切ない。しかし何故か心地良い。

「フッフ、本当に魏延殿は可愛いですね」

焰耶に近付き笑いを耐えながら、そんな言葉を発して来た。夏侯霸本人は何気なく言ったつもりだったのだろう。

だが、焰耶はその言葉が耳に入った瞬間、止まってしまった。

彼は今、何と言った？ 自分に対して何と？ そんな事を脳裏で繰り返す焰耶。いきなりの事で理解出来ず固まってしまった彼女の頭を誰かが優しく撫で始める。

「フッフ、すみません……フッフ」

若干、いつもとは違う口調で話し、上品に笑いながら焰耶の頭を撫でる夏侯霸。その瞬間、彼が自分に言った言葉の意味を理解した。そして身体全体に電流がほとばしる。

「な、な、なななな！？」

顔が いや、身体中が熱い。呼吸が早まる。胸が破れそうに苦しい。焰耶は彼の顔を直視出来ず俯く。

その間にも絶えず撫でられる頭からは快感が伝わって来る。自分で自分の身体を力強く抱き締める。じゃないと何か色々と溢れ出そうだった。

「ハハハハ……はあはあ、それでは帰りましょうか」

「あ……ああ」

歩き始めた夏侯霸の後に付いて行く焰耶。夏侯霸はまだ笑っているのか時々、身体を震わせていた。

焰耶は焰耶で違う意味で震わせていた。身体中に走った快感の余韻を味わうかのように。無論、焰耶が意識してやっている訳ではないが。

突如として機能停止した頭で自分は どうしてしまったのだろうか と戸惑う焰耶。その手は自分でも気付かぬ間に右手で夏侯霸の上着の裾を掴んでいるのであった。

ある日の天の御使い（前書き）

今回は結構、短めです。

ある日の天の御使い

ある一室で現在、北郷一刀は愛紗、桃香と軍備の事に関して相談していた。

ちなみに朱里や雛里は内政に関しての仕事が忙しい為、この場にはいない。

「ようやく兵力が二万を越えたね」

「そうですね、御主人様。しかし、あの夏侯霸が全兵力を連れて来ていたら……」

「まあまあ、愛紗ちゃん。今更そんな事を言っても仕方ないよ」

「……分かりました」

桃香にそう言われて不機嫌ながらも了承する愛紗。確かに夏侯霸が劉備軍に参入する時に彼が率いていた全兵力をそのまま連れて来ていれば楽だった。

しかし何故か夏侯霸は僅か数千の兵力を連れて来ただけだった。一刀達にとっては夏侯霸達の兵力も目当てだった為、正直がっかりしたものだ。

とにかく、その後もどんどん話は進んで行つた。

「何故、桃香様や御主人様より夏侯霸の方が民に人気があるのか全く分かりません！ 桃香様はこの地を治める太守であり御主人様は天の御使いであられるのに何故、あのような者の方が！！」

「ハ、ハハ。愛紗ちゃん、落ち着いて」

乾いた笑いを上げながら愛紗をなだめる桃香。一刀はその言葉や姿に苦笑するしかない。

愛紗は夏侯霸の事をあまり良く思っていないようだ。確かに桃香や一刀よりも夏侯霸の方が民衆には人気だった。

一刀もそれが不思議で仕方ない。一刀が抱いている夏侯霸の印象は武力に秀でた武将である。

黄巾党との戦いでは二万にも達する兵士を率いていながら実際に彼が直接、指揮していたのは僅か五百騎。この事から指揮能力はあまり良くないのだろうと一刀は判断した。

なので現在、夏侯霸が率いている兵力は五百騎のままである。ちなみに彼の従兄弟である夏侯威も同じ理由で五百騎だ。

一刀が知っている三国志では夏侯霸も夏侯威も大した事の無い武将だったような気がする。

黄巾党との戦いで夏侯霸の義勇軍があれ程の功績を挙げたのは星や焰耶、風達のおかげだろうと一刀は思っていた。

夏侯霸の能力を推測すると指揮能力は風より劣り、武力は星より少し下だろう。しかし何故か内政関係に精通していたので、一刀は夏侯霸に武官の仕事と平行して文官の仕事も任せていた。

「ああ、そういえば愛紗」

「はい？　どうかしましたか、御主人様？」

一刀の言葉に応じる愛紗。一刀は最近、考えていた提案を愛紗に言った。

「実は夏侯霸が今、率いている騎馬隊を愛紗の部隊に編入しようかと思っているんだ」

「え？　よろしいのですか？」

「ああ。夏侯覇には俺から話しておくから」

愛紗がまるで新しい玩具を与えられた子供のような顔をした。それもそうだろう。恐らく夏侯覇の騎馬隊は劉備軍の中でもトップクラスの強さだ。

夏侯覇の騎馬隊は全員が匈奴出身らしい。匈奴は遊牧騎馬民族であり、生まれた頃から馬と共に生活している。

だから、あれ程までに凄い動きが出来るのだ。更に夏侯覇の訓練のおかげでもあるのだろう。一刀は夏侯覇に新兵の訓練も任せようかと考えている程だ。

「あの騎馬隊が我が部隊の中核になれば、もっと御主人様の為に働いてみせます！」

愛紗は顔を輝かせて嬉しそうに言う。今まで頑張ってくれたプレゼントのつもりであったが愛紗に喜んでもらえて何よりである。

「えー、愛紗ちゃんだけズルい。御主人様あ、私にも何か下さいよお」

桃香が頬を膨らませながら子猫のように甘えて来た。その姿がとても愛らしく感じる。

「はいはい、分かったよ。今度、何か買ってあげるから」

「やった！ 御主人様、大好き！！」

そう言いながら一刀に抱き付いて来る桃香。それを見て少し機嫌が悪くなる愛紗。何とも微笑ましい光景である。

「あ、御主人様。一つ気になっていた事があるのですが」

「ん？ 何だい愛紗？」

「夏侯覇が我が軍に入る際に言っていた事は」

「漢王朝の事？」

愛紗の問いに答える一刀。その答えに愛紗は頷いた。

「ううん……やっぱり漢王朝は一度、潰れた方が良くと思うんだ」

漢王朝の力は、ほとんどなくなっている。再び建て直す事は不可能だと思っている。それに漢王朝が民衆に何か良い事をしたのか？いや、していない。逆に迷惑を掛けている。

だったら一度、潰して新しい王朝を建てた方が良くと思っている。その方が民衆の為にもなる。今後の歴史を知る一刀はそう考えていた。

この事はすでに桃香や朱里、雛里とも相談済みであった。その上で彼女達も協力すると言っている。

「しかし、夏侯覇達には……」

「ああ、嘘を言った。じゃないと仲間になってくれそうになかったから」

愛紗にそう返す一刀。夏侯覇が率いていた二万の兵力も魅力的だったし、星や焰耶、凧達がいたのだ。

人材不足の劉備軍には喉から手が出る程、欲しかったから仕方ない。

「大丈夫だよ。話せば分かってくれるよ」

「そつだよ愛紗ちゃん。夏侯霸さん達も私達がしっかり話せば分かってくれるよ」

「そつ……ですね」

迷いが吹っ切れたかのように頷く愛紗。夏侯霸はこんな些細で分かり切った事で、ごちゃごちゃ言う人でもないだろう。

そう思いながら愛紗や桃香と楽しく世間話をする一刀であった。

ある日の夏侯惇

全てを覆い尽くす漆黒の闇。そして辺りには赤黒く燃え盛る炎。天高くへ手を伸ばす焰は互いに競い合うかのように燃える。

そんな中、彼の目の前には一人の少女が地に伏し息絶えていた。年齢は十代後半。少女にしては高い背と凜々しい顔付き、切れ長な眼が特徴的だ。

更に艶やかで耳を隠すくらいの長さの黒髪は乱れ、その瑞々しい肌を鮮血に染めている。

左肩から右腰にかけて斬り裂かれ、溢れ出た血が辺りに水溜まりを作っていた。

そして、こちらを見上げる顔には憎しみに満ちていた。それを確認してから彼は自分の身体を見やる。

着用している軽鎧は鮮血で染め上がり、右手に持つ長剣にも血が滴っており、燃え盛る炎に反射し妖しい輝きを放つ。

『後悔しているか？』

脳裏に響くような声が聞こえて来た。彼は視線を上げ前方を見る。すると、そこには血塗れの少年がこちらを見つめていた。

年齢は倒れている少女と同じ十代後半だろう。その手に持つ槍も鮮血に染まっている。

『後悔しているか？』

再び脳裏に響く声が問うて来た。視線の先の少年から発せられる声だろうか。少年はまるで可憐な美少女のような容姿だ。眼以外は。

少年の切れ長の眼は、まるで猛獣の眼である。鋭い光を宿し、見る者全てを殺すかのような勢いだ。

「……後悔？ そんな物しませんよ。持っていて後々後悔する物は、あの時あの場所に全て捨てました」

暗闇に響き渡る彼の声は冷たさを宿していた。彼の脳裏に蘇る記憶。その記憶を無理矢理、押さえ込み言葉を紡ぐ。

「私に残ったのは『義』『忠』『仁』のみ。他は必要ありません」

そう言った後、一気に間合いを詰めて剣を横に薙いだ。炎の明かりに煌めく剣は少年の首を斬り裂いた。宙に舞う首。鮮血を吹き出しながら倒れる体。

「貴方もその一つです」

鮮血を頭から浴びながらそう呟く。もう一度、地に伏す少女へと視線を戻す。

「……私を憎んでくれていたら、どれ程良かった……」

彼はそう言い、目を閉じる。過去の記憶が走馬灯のように巡った。そして再び目を開ければ見慣れた自室が視界に入ってきた。

「……………はあ」

彼　夏侯惇は先程、見ていた夢の内容に大きく溜め息を吐き、座っている椅子の背もたれに寄り掛かる。目の前の机には内政に関する様々な木簡や竹簡。

仕事の途中で居眠りしてしまったようだ。窓の外はすっかり暗く

なっている。夏侯惇は再び溜め息を吐いた。

「……疲れていますね」

流石に慣れない文官の仕事をやり過ぎた所為だろうか。いや、ただ単に働き過ぎなだけだろう。だが休めない。休む事は出来ない。劉備軍は武官には充実しているが文官は絶望的に少ない。

大きな問題であれば諸葛亮や鳳統が対処するが細々とした問題は通常の文官が対処しなければならぬ。それを劉備が分かっているのか分かっていないのか。

そもそも劉備が君主なのか夏侯惇には最近分からなくなってきた。その原因は北郷一刀である。劉備や関羽達は一刀の事を『御主人様』と呼び、まるで臣下のような態度で接している。

夏侯惇には理解が出来ない。何やら占い師の予言による『天の御使い』という救世主らしい。

物凄く嘘臭い。というより神や奇跡を信じない夏侯惇にしてみれば、そんな戯れ言を信じる暇があったら兵法書を読んでいた方がよっぽど有意義だと思う。

とにかく文官の人数が壊滅的に少なく、その分を補う為に夏侯惇が頑張っている訳である。

(……あー、流石に三日間徹夜は無茶でしたか……)

そう思いながら手元に置いてあった手鏡を覗く。問題児三人組が遊びに来た時に置いていった代物だ。

(……この眼では人前に出れませんね……)

そこに映っていたのは、見る者全てを抹殺するかの如き目付きをした夏侯惇がいた。もう一度、溜め息を吐きながら前髪を掻き上げ目付きを元に戻そうと意識する。

「夏侯霸の旦那あ、入るでえ」

「お邪魔しますなの!」

「おい、お前ら」

騒々しい音を立て扉が開き、更に騒々しい問題児三人組がそれぞれ

れ言葉を発しながら入って来た。

「……既に入ってから言わないで下さい」

「そんなケチケチせんといてや、旦那」

「そうなの。気にしないなの」

「おい！ いい加減にしろ！」

「そうらしいで旦那」

「ちつがああああう！！」

「……はあ」

再び溜め息を吐く夏侯惇。今、一番会いたくない人間の栄光に輝く三人だ、と思う夏侯惇。そして再び前髪を掻き上げた。

「うわあ、色っぽいなの」

「それはウチらを誘っ……風、鼻血出とるで」

「ああ……夏侯霸様……」

「風い、戻って来いやー。おい、風い」

「……はあ」

溜め息が尽きない夏侯惇。何やら部屋を物色し始める于禁。床に真つ赤な模様を描く楽進。それを連れ戻そうとする李典。

もう仕事は出来そうに無い。こうなったら全員呼んで酒宴でも始めようかと一瞬だけ考える。

「夏侯霸殿、良いメンマと酒が手に入りましたので今宵、晩酌で」
「」

「あ、おおきに」

「わぁーいなの!」

「何故、お前達がここにいる!!」

「ああ……夏侯霸様……」

「……はあ」

趙雲と口論を始める李典達。本当に溜め息が尽きてくれないと思う夏侯惇。それに段々と部屋の中が混沌としてきた。

「か、かか夏侯霸！ 良い酒が手に入ってな。いや、お前がこんな遅くまで仕事して可哀想だから、差し入れに……いや、お前の為にはなくて、ただ差し入れに」

「まいど、おおきに」

「わあーい、増えたなの！」

「クツ!! 焰耶、貴様もか!!」

「ああ……夏侯霸様……」

「……楽進殿、そろそろ命が危ないので止めた方が良いと思うのですが」

神は更なる混沌を望んでいるようだ　夏侯惇は神の存在を信じていないが。そもそも魏延の言っている内容が矛盾しているような気がする。

「いやあ。大人気ですね、元讓殿」

いつの間にか夏侯淵も来ており、夏侯惇だけに聞こえるように言う。それに夏侯惇も応じた。

「良い迷惑ですよ。まあ、飲むなら飲みましょう。流石に限界なので休まない」と

そう言いながら夏侯淵が持つて来た酒を飲み始める夏侯惇。いつの間にか趙雲達も酒宴を始めていた。

そして夏侯淵は李典達と他愛も無い話をしていた筈だったのだが。

「仲権殿は意外に純情で、まだ女性を抱いた事がないんだよ」

「えええええええ！？ マジかいな！？」

「嘘なの！？」

「本当本当」

気が付けば何やら夏侯惇の女性関係についての話をしていた。更に趙雲や魏延、楽進も聞き耳を立てている。

「あの百戦錬磨の顔で……有り得へんわ」

「……有り得ないなの」

「……何ですか、その眼は」

驚愕の表情でこちらを見つめる李典達。正直、他人からどんな風に思われていたのだろうか疑問に思う夏侯惇。少し傷付く。

「しかも恋した回数は一度、幼なじみへの初恋だけ。しかも、相思

相愛で許婚という補足付き」

「な!？」

「……え……」

「……………」

「李権!」

全員がそれぞれ驚く。これは洒落にならない。これで趙雲達に夏侯惇への恋を諦めさせようという事も考えられるが、夏侯淵がそんな事をするとは考えられない。

そもそも彼女達は彼女達自身の恋心に気が付いていない。つまり夏侯淵は、この事で彼女達自身が抱いている恋心に気付かせる算段なのだろう。

それも面倒だが、それよりも初恋に関しては触れないで欲しい。蘇る過去の記憶。楽しく充実し、一生で一番輝いていた瞬間だ。そして、それを上回る忌まわしさ。

「もう、見てることがちが恥ずかしくなるくらいの仲だったな。しかも兩人とも自分の親に頼み込んで許婚にしてもらっ程」

「……あ、いや。ハハハ、私とした事がメンマの追加を持って来るのを忘れました」

「ワワワ、ワタシはツマミを持って来る」

「……私も少し……」

趙雲、魏延、楽進がそう言い残し部屋を出て行く。その後ろ姿を楽しそうな表情で見送る李典、于禁、夏侯淵。

「……李典殿、于禁殿。この時間でも開いている店があるので、酒を買って来てはくれませんか？ お釣りは上げますので」

「ホンマ！？ んじゃ、行って来るわ！」

「行くなの！」

金を受け取った二人は何か話ながら部屋を出て行った。

「これで自分達の恋心に気が付けば良いですけどね」

「……妙才」

笑いながら言っ夏侯淵を呼びながら睨み付け、言い放った。

「黙れ」

「……まさか……そんな……」

その時、自分がどんな表情をしていたのか分からない。しかし夏侯淵は何かを悟ったらしい。有り得ない、といった表情でこちらを見ている。

「そんな……何十年も昔の事ではありませんか！！ あいつだって元讓殿に幸せになって欲しい筈です！！」

必死な表情で叫ぶ夏侯淵。そんな夏侯淵の胸ぐらを荒々しく掴み引き寄せる。

「妙才、別に俺はお前の行動を制限はしない。お前が何をしようとお前の勝手だ」

自分の声に殺気が込もっているが関係無い。そして目の前にある夏侯淵の瞳には自分の顔が歪んで映っていた。凄まじく鋭い眼光を宿している。

「誰がどうしようとか俺には関係無い。あいつらが俺に恋心を抱こうが関係無い。そういう年頃だから仕方ない」

「……………」

「だがな、俺の心には一歩たりとも踏み入れさすつもりも無い。失って後悔するくらいなら初めから持っていない方が良い。だから俺は全てを捨てた。お前があいつらに何と言おうが俺は誰も受け入れない。分かったか、妙才」

そう言い放ち夏侯淵を投げるように離す。夏侯淵は無様に尻餅をつきながら悔しそうに呟いた。

「…………俺の馬鹿野郎…………」

夏侯惇は聞かなかった振りをしてしながら酒を飲む。脳裏に浮かぶ過去の記憶。

（恨むべきは己の弱さ……憎むべきは己の弱さ。大切な物は俺に弱点を作り弱くするだけだ）

窓越しに広がる闇夜に浮かぶ月を睨みながら、そう思う夏侯惇だった。

変わり行く信念

青々とした空はどこまでも透き通り、そこに浮かぶ太陽は優しく大地を見下ろしている。

雲一つとして無い晴天。以前ならば己の武を更に高める為に鍛練をしている筈だった。しかし、最近は違う。

彼女は涼やかな風を肌を感じながら目の前に広がる字の羅列を読み進める。初めは理解するのに苦しんだが最近では、それなりに分かるようになってきた。

（ふむ……軍を率いるには武だけではなく文武を統合し、戦争をするには剛だけではなく柔も兼ね備える……か。成る程、成る程。まさに『あの方』だな）

「お、こんな所で何してんの？」

（世人は将を論ずる場合、勇気という点を重視しがちだが、勇気は将の条件の何分の一にしか過ぎない。勇者は力に頼んで戦を始めるが、利害を考えずに戦うのは愚かな事である……まさに私ではないか……）

「おーい、聞こえとる？」

（将の心すべき事は五つ。管理、準備、決意、自戒、簡素化。ふむ、奥が深い）

「なあ、無視せんといてや」

誰かの声が先程から聞こえて来ているような気がする。このまま無視し続けても良いのだが後々、面倒な事になりそうなので反応する事にした。

「……何か私に用か、張遼？」

「あ、やっと反応してくれた。もう、華雄は最近冷たいで」

彼女 華雄の視線の先にいる紫髪と独特な服装が特徴的な同僚である、張遼がそう言ってきた。

「うるさいぞ。私は忙しいのだ」

「また兵法書なんか読んどるんか？　ここ最近、読みっぱなしやんか。ウチは華雄ちゃんを、そんな娘に育てた覚えは無いで」

「私はお前に育てられた覚えが無いがな」

冷静に返す華雄。以前であれば怒鳴り散らす所であつたが最近は冷静に受け答え出来るようになった。
これも、あの方のおかげであろう。

「そついつお前こそ、最近兵法書にハマっているのだろう?」

「あれ? バレとつた?」

「ああ」

黄巾党討伐以来、張遼も変わった。張遼も華雄と同じく武を重んじる傾向にあつたが、今では軍学にも手を伸ばしているようなのだ。

「まあ、華雄ちゃん程ではないけどな」

「馬鹿者、私はまだまだ序の口だ。もっと兵法書を読んで勉強しろ」

「いや、少し前の華雄ちゃんを知ってるウチからしたら異常やで。というか、そんな頑張っても夏侯覇には追いつ」

「馬鹿者！！」

張遼の言葉が終わらない内に華雄は叫ぶ。そして、殺気を込めた視線を彼女に投げ付け、声を荒げて続ける。

「あの方を呼び捨てにするとは何たる事か！！ もう一度言ってみろ、貴様を不敬罪で処断するぞ！！」

あまりにも大きな声を出してしまった所為か、近くの木にいた小鳥達が慌てて飛び去って行く。

「わ、分かった！ 分かったから、右手に持つとる戦斧を下ろしてや！！」

張遼が慌てて言ってきた。いつの間にか自分の右手には戦斧が握られている。しばらく張遼を睨み付けた後、仕方なく戦斧を下ろした。その光景を見て張遼はホッとしているのが見て取れる。

「……華雄ちゃん。もし、もしの話やで。もし、夏侯霸教つていう宗教が出来たら」

「一番最初に入信する」

張遼が恐る恐るといった感じで訊いてきたので、言葉が終わらない内に答えてやった。本当にそんな宗教が出来たら、例えば地の果てにしようとも一瞬にして駆け付け真っ先に入信するに決まっている。

「……今更やけど、医者を呼んで来るわ」

「む？ 何故だ？」

何故か怯えたように自分の事を見つめる張遼。何故だろうか。本当に理解出来ない。

本当に夏侯霸教なんて素晴らしい宗教が出来たら泣いて喜ぶくらい嬉しい筈だ。少なくとも華雄はそう信じて疑わない。

「あかん。こんな華雄ちゃんウチが知つとる華雄ちゃんとちゃう。確かに夏侯霸は凄い将やし尊敬も出来るけど華雄ちゃんは異常や。はよ医者に診せなあかん」

何やらブツブツ呟き始める張遼。そんな光景を首を傾げ眺めつつ、張遼を医者に診せた方が良くかどうか悩み始める華雄。

「……華雄ちゃん。もし、夏侯 華雄ちゃんが尊敬するあの方と戦う事があつたらどうするん？」

「そんな事、決まっている。あの方に失礼にならんよう全力で戦うまでだ」

張遼は何を馬鹿な事を言っているのだろうか。一軍を率いる将は私情を公務に持ち出す筈が無い。例え相手が血縁であろう敵ならば戦うまでだ。

「……なら、ええけど」

「当たり前な事を訊いてどうする。そもそも、近い内に戦う事になるだろう？ 袁紹を中心に何やら連合軍を作っているらしいしな」

華雄がそう言うのと張遼は啞然とした表情になっていた。何故、それを知っている。自分もついさっき知ったばかりなのに、と言いたげな表情だ。

「一軍を率いる将は常日頃からどんな些細な情報でも知っておかなければならない。更に戦場の地形や敵軍の戦力、将、士気を事細かに把握し最善の手を打つ。それが一軍の」

「はいはいはい。分かった、分かったから」

張遼は長くなると判断したので止めたのだろつ。それは正しい判断だ。

しかし、夏侯霸直々に教えて貰った基礎を途中で止められるのはあまり良い気分では無い。

夏侯霸と共にいた時間は少なかったが様々な事を教わった。そして自分がいかに馬鹿げた考えを持っていたかを悟ったのだ。

もし出来るならば過去の武ばかりを求めていた自分を八つ裂きにしたい。本気でそう思っている華雄。

夏侯霸程の将になると敵軍から放たれる気のような物まで感じる事が出来るらしい。更に極めると目に見えるようになるらしい。

華雄はまだ何となく分かるだけだ。夏侯霸は肌を感じ取る事が出来る。いかに自分が未熟か痛感する。

「んじゃ、華雄ちゃん。軍議を開くらしいから行くで」

「うむ、分かった。ここにある物を全部読み終えてからな」

「……ウチの見間違いかな。三十は越えとるように見えるんやけど」

張遼は目を擦りながら言ってきた。確かに見間違いだ。実際には。

「ああ、見間違いだ。四十三はあるぞ」

「……ほら、華雄ちゃん行くで」

張遼は無表情に華雄の手を掴み、引っ張って行く。

「ま、待て！ あと、二十冊は読ませ」

「あかん。行くで」

「わ、分かった！ せめてこの一冊読み終えてから！」

奮戦虚しく華雄は張遼に連行されて行く。何とか引っ張つられながら読んでいたが自分で歩けと怒られてしまふ華雄であった。

前哨戦

何か変だ。どこか引つ掛かる。先程から夏侯惇は心の中で首を傾げていた。

しかし、どこも変な所は無い。反董卓連合として参加し現在、何の障害も無く着々と虎牢関へ進軍している。

何陣かに分けて虎牢関を目指しており、第一陣は公孫賛軍と王匡軍を中心としている。

第二陣は曹操軍と袁術軍傘下の孫策軍が主力。

第三陣は第一、第二陣の後詰め役割として劉備軍だけである。

そして第四陣は反董卓連合の大将である袁紹が率いる軍勢と残りの諸侯。その後方に補給物資の護衛をしている袁術軍がいる。

総勢で数十万の兵力だ。更に斥候部隊も欠かさず出して周囲を警戒している。第一陣から第三陣だけでも、かなりの兵力だ。陣形にも不備は無い。

しかし何か引つ掛かる。そう、これは違和感だ。何故、違和感を覚えるのだろうか。分からない。

夏侯惇は空を仰ぐ。晴天とは言わないが良い天気だ。だが少し浮かんでいる雲が、まるで夏侯惇の違和感を表しているかのようだった。

（……何故だろう。この違和感は……それに、この胸騒ぎは一体……）

更に悩む夏侯惇。しかし答えが出る筈も無かった。何度考えても落ち度は無い。

この連合は袁紹がでっち上げた噂から出来た連合だ。この国の董卓が袁紹が言うような悪い事をしているようには思えない。

しかし、これは劉備軍の飛躍の絶好な機会なのだ。今、劉備は平原国の太守をしているが地理的に袁紹の勢力圏に近い為、将来的にマズい場所だ。

だから、この戦で功を挙げ違う土地に移らなければならない。袁紹と曹操による対立のとばっちりを受けてはかなわない。

とにかく何が何でも少しは功績を挙げなければならないのだ。そう考えながらも一度、北郷一刀に敵軍の陣容を確認しようと思う

夏侯惇。丁度良い事に一刀は近くにいる。

何故、一刀に訊くのかというと反董卓連合の軍議に参加したのは一刀と劉備と関羽であり、そして一刀の方が夏侯惇に近かったからだ。

「北郷殿。もう一度、敵軍の陣容を確認したいのですが」

「うん？ ああ、良いよ。ええと、確か呂布に張遼に華雄に賈馱だったかな？ それで大将が呂布だよ」

「……どうも、ありがとうございます」

自身無さ気な一刀に呆れつつ一応、礼を言う夏侯惇。そこえ別の声が割って入って来た。

「違いますよ御主人様。新しい情報で大将は徐栄という将だと軍議で言っておられたではありませんか」

「ああ！ そうだった。ゴメン愛紗。夏侯覇もゴメン」

何か一刀が言っているような気がするが、それよりも関羽が発し

た言葉に呆然とした。

彼女は今、何と言った？夏侯惇の頭の中で何かが音を立てて組み合わさった。更に胸騒ぎの正体を理解してしまう。

そして、それと同時に最悪の展開が脳裏に浮かんた。そんな筈は無いと思いたいが、否定出来ない。むしろ全てにおいて納得出来る。

「全隊、進軍停止！！　すぐさま迎撃陣形を！！　両翼には騎馬隊を！　中央は歩兵隊を槍兵、弓兵、弩兵、重弩兵の順番で展開！　槍兵は二重に展開せよ！！　急いで下さい！」

夏侯惇は矢継ぎ早に指示を下す。その姿を一刀や関羽達が呆然と見ているが関係無い。急がないと本当に取り返しが付かない事になる。

「……あ、夏侯霸！　貴様、何を勝手に」

「どうかしたの、愛紗ちゃん？」

関羽は我に返ったのか何か怒鳴ろうとする。その時丁度、劉備が騒ぎに気が付いたのか近付いて来た。

「劉備様！ 私に全軍の指揮権を任せて下さい！！」

「え？」

「だから貴様は何を言っている！」

「そうだよ、愛紗の言う通りだ。敵の大將は呂布じゃなくて徐栄だから大丈夫だ」

全員が口々に言うが一刀の一言は信じられなかった。相手が徐栄だから大丈夫だと？ 何故、そんな事が言えるのか理解出来ない。

「相手が徐栄だから急がないと駄目なんです！！ 呂布の方が何十倍もマシです！！」

「何でだよ？ 徐栄って董卓軍でも全く聞かない名前だし……それに確か、あまり強く無い筈だろ？」

夏侯惇が叫んでも一刀はのんびりとした口調で答える。「冗談を言っていると思いたい。いや、冗談であっても洒落にならない。」

「天の国の知識か何だか知りませんが貴方の武將に関する知識は間

違っています！！ 徐栄は ㄥ

最後まで言葉が続かなかった。何故なら劉備軍の前方から喚声が空気を震わせ伝わって来たからだ。

夏侯惇は急いで視線を劉備軍前方に向ける。第二陣辺りで土煙が上がっていた。夏侯惇は自分の頬が引きつるのを感じた。

「あれは一体？」

「何だよ、あれは？」

「何だろうね？」

どうしようも無い程の間抜けな声を上げる関羽、一刀、劉備。その中で夏侯惇は何とか冷静さを保ちながら必死に打つ手を考えつつ言い放つ。

「第二陣は突破されたようです。敵兵力は三万五千。その内、一万五千がこちらに向かって来ています」

「え？」

「は？」

「へ？」

何も理解出来ない顔でこちらを見て来る三人。いい加減にして欲しい。もう時間が無いのに。

劉備軍でも迎撃体勢を整えているのは夏侯淵は勿論の事、趙雲や魏延達など夏侯惇と共に行動していた者達だけだ。

「……そ、そんな馬鹿な。守勢側が数十万もの兵力に突っ込む馬鹿がいるか！」

「その油断が命取りになるのです！　そもそも守勢側が攻めてはいけないという決まりはありません。それに我々は長い行軍の末に兵士達には疲労が蓄積しています。この機会を逃す馬鹿はいませんよ！！」

関羽に怒鳴り返す夏侯惇。前々から思っていたが、この国の人間は本当の戦を知らない。この国の曹操でさえ知らないのだ。最早、怒りを通り越して呆れが来る。

兵士達もどれ程、危険な状態か理解したらしく急いで陣形を整えてようとしているが、もう遅い。間に合ったとしてもギリギリだろう。

もう敵の旗印が視認出来る程の距離だ。旗印は『徐』と『呂』。その旗を睨みながら自分の騎馬隊を集めて駆け出す夏侯惇。

一刀達が騒いでいたが無視して敵軍の側面へと回り込むようにして展開する。僅か五百騎だが少しは圧力になる筈だ。

予想通り敵軍の一部がこちらに向かって来た。数は一千騎、旗印は『徐』。

全て夏侯惇の予想通り。そして恐らく相手の将も。

聴覚に伝わる風を切り裂く震動を感じつつ向かって来た騎馬隊とぶつかった。即座に二人斬り落とし、敵将らしき人物に斬り掛かる。

大気を斬り裂き、陽光に刀身を煌めかせながら相手の身体を喰い千切る筈だった。

辺り響き渡る甲高い音。夏侯惇の一撃は相手の剣に受け止められていた。

そのまま相手を睨み付ける。黒い短髪に鋭い眼光。騎乗していても

夏侯惇より長身だという事が分かる背丈の青年。

二十代前半といった所だろうか。しかし目の前の青年が醸し出す
雰囲気は夏侯惇の予想通り、知っている雰囲気だ。

自分達が幾度と無く煮え湯を飲まされた『あの将』の雰囲気。

「久しぶりですね、徐將軍。まさか貴方までこの国へ来ていたとは思
いもしませんでしたよ」

「ほう。この剣筋、雰囲気、用兵、夏侯惇殿か。まったく、再び
敵として出会うとはな」

そう若返っているが彼はあの徐栄だ。夏侯惇達が元々いた国で反
董卓連合の時に戦い、そして敗れた相手。

「ふむ、貴様が相手となると少し辛いな。まあ、良い。今回は挨拶
代わりだったからな」

「挨拶代わりで、ここまでするのは貴方だけですよ、徐將軍」

「フフ、誉め言葉として取っておこう。では、さらばだ夏侯惇殿」

そう言い放つとすぐさま陣形を整えながら退却を始める徐栄。劉備軍本隊を襲っていた部隊も素早く合流し後退し始める。

引き際も見事。更に退却の仕方も見事としか言えない。もし追撃すれば逆に殺られるだろう。

「……流石は董卓軍で一番の名将と呼ばれた者ですね」

感心の言葉を発するものの冷や汗が止まらない。自分達以外に誰か、この国へと来ていてもおかしくは無い。まさか徐栄だとは思ってもよらなかったが。

（……これは本当にマズいですね……本気で洒落になりません）

劉備軍全体の被害を目測で確認しながら心底感じる夏侯惇。空に浮かぶ僅かな雲が先程よりも、どす黒く感じられた。

混乱する戦況（前書き）

……呉陣営のキャラが書き難いです。

混迷する戦況

深闇が支配する世界に轟く兵士の喚声は大気を伝わり彼女の聴覚へと届く。

風はむせ返りそんな程の血の臭気を運び、僅かな月明かりの下で鮮血が散って行く花びらのように舞う。

至る所から湧き上がる悲鳴、絶叫、悲痛なうめき声。迫り来る刃は月光に妖しく煌めく。そして、彼女は自分が持っている剣で迫り来る刃を受け止めた。

甲高い音と共に飛び散る火花が一瞬だけ仄かな明かりを放つ。すぐさま相手の剣を弾き飛ばし剣を横に一閃させる。舞い上がる首と倒れ行く首無し的身體を尻目に次の獲物を探す。

「まったく、私の寝込みを襲うなんて良い度胸してるじゃないの」

そう呟くものの辺りの喧騒に飲み込まれ消える。

情勢はかなり危険だ。誰もが予想も出来ない事態であった。

初っぱなから敵に強襲され、どうにか陣を立て直し虎牢関を攻めても敵はびくともせず逆に被害が増えるばかり。

攻めるのを止めて退いても追撃され、更には伏兵に会い被害甚大。虎牢関から出た所を狙おうとしても失敗続き。

そして退くと見せ掛けて伏兵で叩こうにも見破られる始末。虎牢関の周りには死体だらけ。兵の士気も否応なしに下がっていく。

そんな時に夜襲だ。しかも他の陣営からも騒がしい声が聞こえる所から同時に複数の部隊が行っているのだらう。燃え盛る『孫』の軍旗を睨み付けながら、そう考える。

「雪蓮！ 一旦、陣を立て直す為に退こう！ このままでは我が軍は壊滅するぞ！！」

月光に輝く黒い長髪に右手には鞭を持つ女性 冥琳がそう叫ぶように言ってきた。

「それは出来ない。反董卓連合が虎牢関を攻めて一週間も経たない内に全滅なんて洒落にならないわよ！ 私は天下の笑い者にはされたくない！！」

そう彼女 雪蓮は叫び返し迫り来る敵兵を斬り裂く。吹き出した返り血を浴びる。いつもならば興奮するのだが、それよりも焦り

の方が大きかった。

「雪蓮！！ 後ろ！！」

冥琳の叫び声が聞こえて来た。それと同時に背後から迫り来る殺気を感じた。慌てて振り返ると、敵兵が槍でこちらを突こうとしている。

避けようにも間に合わない。防ぐ事も不可能だろう。このまま名も無き兵士に殺されるのか、そんな言葉が脳裏を駆け巡った。

嫌だ。まだ死ねない。そう思った所で雪蓮を貫こうとする槍が止まる筈も無かった。迫り来る槍。貫かれた後に来るであろう痛みに備える雪蓮。

その時だった。雪蓮を貫こうとしていた敵兵の左側頭部を矢が貫いた。その衝撃で敵兵は大きく吹き飛ばされる。

「雪蓮！ 無事か！！」

「え、ええ」

駆け寄って来た冥琳にそう答える雪蓮。目の前の光景に驚愕しながら矢が飛んで来た方へ視線を向けた。すると、こちらへと向かって来る騎兵が十数騎。

「…………お見事です」

「お前の淡々とした口調で言われても嬉しく無いぞ、高順。それに、あの程度の距離で当たらない方がおかしいだろ？」

「…………昼間で徒歩ならば、そうでしょうが流石に今の条件では…………」

先頭にいる青年が明るい口調で隣にいる青年と何か会話をしている。先程の矢を放ったのは先頭にいる青年だろう。その証拠に彼の右手には弓が握られていた。

「いやあ、それにしても大丈夫か？」

「…………え、ええ。助かったわ」

先頭にいる青年は急に雪蓮に向かって言葉を発して来た。それに若干、戸惑いながらも答える雪蓮。

「礼には及ばないよ。俺は姓が夏侯、名はえん……じゃなくて威、字を妙さ……でもなくて李権だ」

「夏侯威というと劉備軍か」

「おうよ」

明瞭に答える青年 夏侯威。そこで雪蓮はある事に気が付いた。

(……もしかして、あの距離で当てたの!?)

先程、夏侯威達がいた場所から雪蓮がいた場所までは距離がある。しかし、矢が届かない範囲では無い。

だが届くのと当てるのでは全く違う。更に月明かりの中、しかも馬上で。驚異的と言っても過言では無い。

そんな事実気付き愕然としていた時だった。二百騎程の軍勢がこちらに向かって来る。あちこちに燃え盛っていた火は既に鎮火しとおり月明かりも肝心の月が雲に隠れてしまい、何とか見える状態である。

「まったく、暗くなって何も見えんで……げ、夏侯威!？」

「あ？ 何だ、張遼か。それに華雄まで」

どうやら襲撃して来た敵の軍勢だったらしい。しかも、その軍勢の先頭にいる敵将の張遼に華雄だった。

非常にマズい状況だ。雪蓮達の周りには五十名程の兵士しかいない。対する敵は二百の騎馬隊。完全に劣勢だ。雪蓮や隣にいる冥琳は獲物を構える中、夏侯威達の会話は続く。

「張遼、早く帰るぞ。援軍が来たら厄介だ」

「そやけど、今が絶好の機会やん！ ここであいつら討ち取ったら後々、楽になるやんか!！」

「俺もそう思っけど、惜しかったね。援軍、もうすぐ到着するぞ」

他人事のように言う夏侯威。確かに後方から馬蹄の音が聞こえて来る。恐らく数百騎規模だろう。

その事実には、頷く張遼。どうやら撤退するらしい。雪蓮にし

てみても無駄な戦はしたくない。そう思っていたのだが。

「な！？　もしや、あの旗印そしてこの静かで雄々しい馬蹄の音はあの方の！　スマン、張遼。私には大切な用事が出来たから先に帰還しておいてくれ」

「アホウ！！　どこに行こうとするんや！？」

「いや、あの方に少し挨拶と共に私の用兵術を見てもらおうと」

「あんたなあ！！　自分で早よ帰ろうって言うといて、それかいな！？　ていうか、めっさ危ないで帰るで！」

何故か先程とは逆に華雄が駄々っ子し始めた。それに逆ギレする張遼。その光景に付いて行けず呆然とする雪蓮だった。

「あ、いや、少し待ってくれ！　せめてあの方のお顔を間近で見えから」

「あかへん。帰るで」

「だ、だが。これまで四回も擦れ違っているのだぞ。それに初めの

強襲の時だってあの方が第三陣にいるのならば私だって」

「帰る」

「いや、待て張遼！　話せば分かる！　だから少し待っていてくれ！！」

「分からへん。帰る」

「た、頼む！　頼むから、待ってく」

「聞こえへん聞こえへん。ほら、帰るで華雄ちゃん」

まるで親猫が子猫を運ぶように華雄の馬のくつわを掴みながら無理矢理連行して行く張遼。

思わず呆気にとられながら闇へと消え失せる背中を見送る。しばらく張遼の怒鳴り声が辺りに響き渡っていた。

「……それにしても派手にやられたな」

ポツリと呟いた夏侯威の言葉が雪蓮の胸に突き刺さる。雪蓮はそ

んな夏侯威を睨み付け文句を言おうとしたが、次に出て来た彼の言葉に遮られた。

「でも、お前らが無事で良かったよ。助けに来たのに目の前で死なれたら夢見が悪い。それに、これから反撃開始だ」

そう勇ましく言う夏侯威の横顔を思わず見つめてしまった雪蓮だった。

反撃の狼煙

「よし。皆、味方を助けに行くぞ!!」

「はい、御主人様」

「皆! 私に続けえええ!!」

「鈴々達も続くのだ!!」

一刀の叫びに応じる桃香、愛紗、鈴々。更に一刀の傍らには朱里や雛里もいる。そんな一刀の視界に広がる光景は悲惨な物であった。

反董卓連合と董卓軍の戦いは反董卓連合が優勢、その後に董卓が洛陽を放棄して終結するというのが一刀が知っている歴史。

多少の誤差があつたとしても、歴史通り進む筈だと思っていた。少なくとも、いままでが歴史通りだったのだから。

しかし現在、彼の視線の先に広がる光景は違っていた。曹操軍や公孫賛軍等の軍勢が押し負けている。呂布軍や張遼軍、華雄軍が

縦横無尽に暴れ回っている所為だ。一刀はそう判断していた。

夏侯霸は徐栄の事を一番の強敵みたいな言い方をしていた。確かに徐栄も強いと思う。

だが、やはり呂布や張遼、華雄の方が強敵だと思っている。事実、派手に暴れている呂布軍達に対して徐栄軍は地味に動き回っているだけだ。

とにかく、一刀達は苦戦している味方の救援の為に出陣した。夏侯霸は裏で何かしているらしく、この場にはいない。

夏侯威も袁術から新たに兵士を供給して貰った孫策軍の再編成の手伝いでいない。星や焰耶達は夜襲の対応で疲れていると思い、待機させたままである。

それでも、こちらには愛紗や鈴々、いざという時には朱里や雛里がいる。

呂布達以外には張済や胡軫といった、あまり聞かない名前の将もいるが武力だけが秀でた猪突猛進の将だろう。

ならば、こちらの方が有利だ。そんな一刀の思いを乗せて愛紗と

鈴々の軍勢は敵に突撃を仕掛けて行く。

晴天下の戦場に轟く喚声。まるで波のように退いて行く胡軫軍。流石は軍神関羽と猛将張飛、圧倒的だ。

「これだっ たら行ける！」

「はい。このまま押し切りましょう」

そう朱里が言い、雛里も頷く。胡軫軍が押された為だろうか、張済軍もあっさりと退却して行く。

勝てる。このまま行けば確実に勝てる筈だ。一刀は興奮しながらそう思う。このチャンス逃してはいけない。

「よし！ この機に乗じて俺達も行こう！！」

一刀は大声で叫び、自分達も戦場に向かおうとする。体が震える。恐らく武者震いだろう。そのまま馬に乗り、駆け出そうとした。しかし。

「悪いけど、行かせないよ」

そんな声が背後から聞こえ次の瞬間、景色が一転し背中から重い衝撃が伝わって来た。背中から来る痛みにも何も言えず、うずくまりながら呻く事しか出来ない。何とか落馬した事は理解出来た。

そして、いつの間にか辺りは兵士達の叫び声に包み込まれている。

「はあ。徐將軍も人使いが荒いよ。二日間もこんな所に隠れている、だなんてさ」

一刀は何とか顔を上げて声の主を見上げる。視線の先には馬に乗った凛々しい顔立ちの将がいた。

セミショートで藍色の髪と眼。そして、しなやかな柳のような体付き。

「ええと、貴方が天の御使い君だね。初めまして樊稠という者です」

困ったように笑いながら、少しハスキーな声で言ってきた。しかし、その手には戟を携えている。刃から放たれる光は不気味に感じられた。

「悪いけど、ここで死んでもらうよ。月を討たせる訳にはいかないんだ。本当にごめん。せめて楽に死ねるようにするから」

そう言いながら戟を構える将　樊稠。陽光に輝く刃がこちらを向き、冷たい光を放つ。

体温が一気に下がったのだろう。身体の芯が恐ろしく寒い。そして、今すぐに逃げ出したいのだが身体が動かない。

力が入らない。身体が震え始める。無論、先程とは違う震えだ。呼吸も荒くなる。

怖い。一刀の心の中、全てを恐怖が支配した。愛紗から叩き込まれた戦い方や対処方が全て頭の中から吹き飛んだ。

何をすれば良いのか分からない。分かったとしても身体が動かない。ただ単に迫り来る死に恐怖するばかり。

何も出来ずに迫り来る白銀の刃を見つめ続けていた時だった。一瞬にして視界を遮る白い衣。鳴り響く甲高い金属音。

「おやおや、大丈夫ですか、北郷殿？」

「あ、あ……せ、星!？」

「クソ、援軍か」

涼やかな声が一刀の心に染み渡る。毒づきながら距離を取る樊稠。そんな樊稠と向き合う星の後ろ姿が頼もしい。

「退いてくれないかな。僕は彼を早く討たなくてはいけないんだよ」

「それは無理な相談だな。これは夏侯霸殿の御命令だからな」

睨み合う両者。一瞬たりとも気が抜けない空気が漂う。一刀はそんな光景に視線を逸らせずにいた。

「ああ、それとだな。一つ良い事を教えよう」

「ん？」

「虎牢関は落ちたぞ」

「何を言っ
」

星の言葉に反論しようとした樊稠の声が止まり、呆然としている。
一刀も慌てて樊稠の先　虎牢関の方を向いた。
すると、そこには　。

「そ、そんな馬鹿な！？　何で虎牢関が燃えているんだ！！」

虎牢関からは幾つもの黒煙が上がっている。そして門も開いてい
た。

「な、何故、何故なんだ！？　どうして　」

「後ろから失礼します」

樊稠の言葉を遮るようにして場違いな程、穏やかな声が聞こえて
来た。それと共に力尽きたように地面へと倒れる樊稠。

「さて、趙雲殿。御苦労様でした。後は陣形を整えて洛陽へと向か
うだけです」

「御意！」

樊稠の背後から現れたのは夏侯霸であった。夏侯霸の言葉を聞き、どこかへと向かう星。

夏侯霸は夏侯霸で気絶している樊稠を部下に任せていた。何がどうなっているのか理解出来ない。

「北郷殿は、このまま関羽殿達と合流して下さい」

「え、いや、あの……一体どうなったんだ？」

訳が分からず尋ねる一刀。それに対して夏侯霸はいつものように穏やかに微笑みながら答える。

「時間が惜しいので簡単に説明しますと、昨晚の敵軍の夜襲部隊に紛れて孫礼殿が部下と虎牢関に潜入。そして、火を放った後に開門。その機会を逃さず夏侯威達が虎牢関を突っ切り洛陽へと直行」

淡々と話す夏侯霸。どうやら河北に残っていた孫礼を呼んだらしい。夏侯霸は更に言葉を紡ぐ。

「虎牢関は孫策軍に任せています。呂布、華雄、張遼は既に私が撃破し捕らえました。張済軍と胡軫軍は張燕殿と、その他多数で困っています。まあ、彼らまで来るとは思ってもいませんでした。ちな

みに諸葛亮殿達は救出済みです」

そう言い、最後に苦笑する夏侯霸。一刀は視線を転じて戦場を見渡してみた。すると先程とは全く違う光景が広がっている。

呂布や張遼、華雄の軍勢は消え失せ、胡軫、張済の軍勢は多数の部隊に囲まれていた。その中には黄巾党の残党らしき部隊までいる。

愛紗や鈴々、桃香の部隊は何がどうなっているのかさっぱり分からないといった様子でうろろしているばかり。

「さて、北郷殿。劉備様達の軍勢をまとめて速やかに洛陽へと向かいましょう。虎牢関は袁紹殿達の足を止めるには十分過ぎる程の餌ですからね」

あっさりと言い放つ夏侯霸。つまり、虎牢関を餌にして自分達だけで本命　洛陽を制圧するという事だ。

何とか理解する一刀。だが、実際に実行して成功出来るのだろうか。そもそもここまでの作戦を思い付き更に実行して成功させるなんて信じられない。

素直に驚いた。凄いとも思う。自分が夏侯霸を過小評価し過ぎて

いた事が恥ずかしくも思う。

しかし、それと同時に少しだけ恐怖も感じた。いつも通りの夏侯覇の微笑みに恐ろしさを感じる一刀であった。

『貸し』と『借り』

洛陽制圧戦。それは歴史に残る戦いだろうと評価を下す夏侯淵。

天を舐めるように燃え盛る虎牢関を突破し、一直線に洛陽へと向かった夏侯淵率いる四千の軍勢。

無論、僅か四千の兵力で洛陽を落とす事など到底無理である。しかし、虎牢関での戦いが始まる前に洛陽にも何人か忍び込ましてある。

夏侯淵が洛陽を攻めると同時に城門を開ける算段だ。城内へ突入後、すぐさま董卓以下の首脳部を捕縛。それが無理であれば城門付近を制圧し、後続の為の橋頭堡を確保。

どちらにしても、この作戦は夏侯淵の十八番である。敵陣への強襲作戦。伊達に曹魏の將軍をやっていた訳では無い。

夏侯淵は駆けた。まるで風になったかのように大気を切り裂き進む。

そして洛陽へと到着。手筈通り城門は開いていた。夏侯惇ばかりに負担を掛ける訳にはいかない。

そう思い、雄叫びを上げ激しく攻め立てる 予定だった。

本当に少し……いや、大分……いや、結構……いや真面目に何な
んだろうなと現在、物思いに耽っている。

空には雲も無く、まさに晴天だ。それが逆に悲しい。何をやって
いたのだろうか。

いや、別に構わない。結果が全てである。むしろ損害が出なかつ
たから喜ぶべきだ。しかし、どこか虚しい。

結論を言つと 。

(……何で降伏するんだよ……)

複雑な気持ちになる夏侯淵。人が少ないものの賑わいを見せる洛
陽。

つまり董卓は夏侯淵が洛陽へ突入する前に降伏したのだ。そもそ
も虎牢関が落ちたら降伏する予定だったらしい。

結局、一度も刃を交える事なく洛陽を制圧。既に董卓の軍勢は武装解除していた。

なので洛陽を攻め落とす筈だった夏侯淵の部隊は劉備軍本隊が到着するまで洛陽の治安維持の為に巡回する羽目に。

そして現在、微妙な気分になりつつ街を歩いている。夏侯惇は後始末の為に諸侯と会談中。

つまり自分達がどれだけ活躍したかの自慢大会を開催しているという事である。

ちなみに帝や朝廷は反董卓連合が出来た時点で長安に引っ越したようだ。その際、洛陽の民の一部も引っ越したようであった。

これは夏侯惇の計略通りなので問題無い。今、帝の下へ行っても劉備軍の力は弱く朝廷にこき使われるだけだ。

そして朝廷が洛陽に居たままでは、すぐに曹操の勢力圏に入ってしまう。朝廷を手中に収める時には曹操軍もかなり力を付けている筈だ。

という訳で長安に引つ越すように仕向けたのである。長安は漢王朝に忠義を誓っている馬騰の勢力圏に近いので何とかなるだろう。

夏侯淵は歩きながら考え改めて夏侯惇の凄さに感嘆する。そうこうしている内に目的地へ到着したようだ。更に丁度良い具合に目的の人物が姿を現した。

「よう、孫策」

「ん？　どうかしたの、夏侯威？」

夏侯淵に言葉を返す孫策。そう夏侯淵の目的地は孫策軍の駐屯地であり、そこにいる孫策に会うのが目的であった。

「ああ、あの時の礼がしたくてな」

「あの時？」

夏侯淵の言葉に首を傾げる孫策。そんな孫策に夏侯淵は言葉を紡ぐ。

「いや、俺が虎牢関を突破する時に関内の軍勢を止めてくれただろ。

その礼」

「ああ、それなら別に構わないわ。その前の夜襲の時に貴方に助けられてるから。これで貸し借り無しって事で」

「あ？ それは貸し借りに入らないぞ。あれはお前を助ける事が任だったからな。俺は与えられた任を果たしたまでだから」

楽しげに言う孫策に対して、そう答える。すると孫策は眉を潜めて、こちらを見て来る。そんな事を無視しつつ言葉を続けた。

「という訳でお礼にこれをやるよ」

そう言い小さな布袋を孫策に投げ渡す。勿論、お礼の品はその中に入っている。偶然にも井戸の中で発見した物だ。

孫策は顔をしかめたまま布袋の中身を確認める。そして確かめた瞬間、驚愕したような表情になった。

「い、これって」

「おう、やるよ。別に俺らには必要じゃないしな」

「でも、これって伝国の玉璽」

「ん？　そうだけど。まあ、俺らにしてみれば金色の石ころさ。だけど、その石ころを高値で買い取る強欲商人もいるからな」

笑いながら答えてやる。ここで言う『強欲商人』とは袁術の事である。暗に独立する為の担保にしな、という事だ。

「これで本当に貸し借りは帳消しだからな」

「……割に合わないわよ」

「はあ？」

「割に合わないって言うてるの！　私達は、ただ単に突破するのを手伝っただけなのに……これじゃあ割に合わないわよ！！」

怒鳴る孫策。別に夏侯淵は割に合わないとは思えない。むしろ下手に持っていて危険だ。

だから、それを有効に使える者に渡しただけである。夏侯淵の独断だが夏侯惇も怒らない筈だ。

「あー、そんなに怒鳴るなって孫策」

「雪蓮よ」

「……はい？」

「だから雪蓮って呼んでって言ってるの！」

「いや……それってお前の真名だろ？」

少し驚きつつ訊く夏侯淵。その問いに孫策　雪蓮は頷く。

「真名って命と同じくらい大切なんだろ？　それじゃあ逆に俺の方が」

「はあ！？　こんな凄い物のお返しに真名を教えただけじゃあ足りないわよー!!」

「俺的にはお前の命の方が大事だぞ。玉璽なんて、たかが金ぴかの石ころだろ？んな物よりお前の命の方がよっぽど大切だ」

「……………え？」

何度も何度も喰い下がって来るので正直に言ってやった。すると何故か孫策は呆然とした表情になる。

どうやら、ようやく分かってくれたようだ。全く女性は強情な奴が多いと失礼な事を考える夏侯淵。

「あ……………いや……………でも」

「あー。まあ、せつかく真名を覚えてくれたんだから受け取らないと失礼だよな。だから真名だけは受け取っておくよ」

要するに面倒だから、これ以上この話題を引き延ばすのは止めようと言外に言っているのだ。

しかし、何故か孫策　雪蓮は俯いてブツブツ何か呟いている。一体、どうしたのだろうか。

「んじゃ。俺、帰るから」

「あ、ちよつと待った！」

「ん？」

「……もし、何かあつたら助けてあげるから」

夏侯淵を呼び止めた雪蓮は明後日の方向を見ながらそう言ってきた。その言葉に夏侯淵は雪蓮に笑い掛けながら答える。

「おう。ありがとな雪蓮。んじゃ、またな」

「……ええ。またね」

何だかんだ言つて良い奴だなと思いつながら帰路に着く夏侯淵。また戦場を共にする事を期待しながら戦友の陣営から去って行った。

新しき土地

あまり広くない一室に漂う静かな空気。外からは小鳥達のさえずりが聞こえ、仕事で疲れた身体を癒してくれるような気がする。

椅子の背もたれに寄り掛かりながら体を伸ばす樊稠。長い時間、座っていた為か骨が鳴るのが分かる。執務用の机に竹簡を置き、一息吐く。

虎牢関の戦いの後、劉備軍に参入して少し月日が経つ。劉備軍の雰囲気馴染んできている。

月を始めとする旧董卓陣営の将や文官の大半、更には他勢力からも劉備軍に参入した者もいる。

旧董卓軍からは賈馱や華雄、張遼、呂布、張済、胡軫、李儒やその他多数がいる。他勢力での代表例は袁紹軍から朱霊や孔融軍から武安国やその他にも参入した。

樊稠としては幼なじみで親友である月の安全が保証されれば、どこでも良かった。少なくとも初めはそう思っていた。

しかし、今では劉備軍に入って良かったと心底思っている。樊稠は顔を彼の方へと向ける。

そこには窓から差し込む光に反射し輝きを放つ艶やかな黒髪、瑞々しい肌を持ち切れ長の眼を内政の報告が書かれている竹簡へと注いでいる青年がいた。

最早、美女にしか見えない程の美しさである。そんな彼　夏侯覇と出会え、更には彼の副官に任命されたのだ。

これ程、光栄な事はないだろう。様々な分野において尊敬出来る将であり、あの徐栄からも強敵と言われていたのだから。

君主である劉備　桃香は反董卓連合での功績により徐州の牧に任官された。自分達と戦った時の功績なので少し複雑な気分だが夏侯覇の下で働けるなら問題無い。

しかし、夏侯覇は武官であるのに文官の仕事まで行う。その為に副官である樊稠も文官の仕事まで行わなければならないかったりする。

しかも夏侯覇は武官の仕事も両立し、更に人の数倍は働く。なので物凄く忙しい。最近は慣れてきたが、最初の頃は悲惨だった。とにかく夏侯覇は物凄い将だという事である。

「樊稠、そろそろ休憩にしましょうか」

「あ、はい。分かりました」

夏侯霸が穏やかに微笑みながら言ってきた。やはり綺麗だなあ、
と思いつつ応じる。

ちなみに最初の頃は名前の後に『殿』を付けられていた。立場上
マズいので副官に『殿』付けは止めて欲しい、と言って止めてもら
った。

「それにしても樊稠がいてくれて本当に助かります」

「いえいえ、僕なんか全然ですよ」

尊敬する夏侯霸にそんな事を言われたら照れる。そして夏侯霸の
ような男前になりたいな、とも思っていたりする。

「それにしても徐州ですか……」

溜め息を吐きながら言う夏侯霸。彼らしくない事なのだが最近、
こんな事ばかり言う。どうやら徐州はお気に召さなかったようだ。

「夏侯霸殿はどこが宜しかったんですか？」

「そうですね……荊州が益州ですね……徐州は守り難いですから」

好奇心に負けて訊いてみたが結構深刻そうだ。しかし夏侯霸は「まあ、何とかしてみせますが」と付け加えた。

夏侯霸が何とかすると言ったら本当に何とかしてしまいそうだから凄い。

そのまま夏侯霸との会話は進んで行く。やはり彼との会話は有義なものだった。夏侯霸の副官という事で長い時間、彼の傍にいる。毎日が勉強になる事ばかりだ。

「それにしても夏侯霸殿は凄いですよね。黄巾党の残党や山賊にまで懐かれるなんて」

「いえ、そんな事ありませんよ。理を尽くして対話しただけですし」

それが凄いと思ったが口には出さなかった。夏侯霸は平原国にいた頃に黄巾党の残党や山賊達と、よく交流していたらしい。

詳しい事は知らないが、それに感激して虎牢関へ援軍として出陣したようだ。実際、樊稠が気絶している間に張済や胡軫と交戦していたようである。

胡軫曰く『国中の賊が、あんな奴らだったら俺は一生、賊とは戦いたくねえ』らしい。張済も同じような事を言っていた。

とにかくその後、劉備軍に参入したのだが元黄巾党や山賊の集まりという事で疎まれいた。しかし夏侯霸は自分の部下にすると宣言し、本当に部下にしてしまったのだ。

更に漢王朝直属の近衛軍が使用する筈だった黄龍の軍旗を朝廷から貰い、それを元黄巾党や山賊の部隊の軍旗にしたのだ。

これに物凄く感激したらしく、その部隊全員が泣きながら夏侯霸に忠誠を誓ったという何やら物凄い感動秘話になっている。

ちなみに夏侯霸の部隊は直属の騎馬隊以外は全て元黄巾党や山賊出身の者達である。

「あいつら全員、気前の良い奴らですよね」

「そうですね。本当に良い人達ですね」

実は劉備軍で一番強い部隊は夏侯霸の部隊だったりする。演習の時、関羽や張飛の部隊を散々に打ち破っていたのが印象的だ。

合言葉が『旦那の為なら火の中、水の中だぜ！』である。勿論、旦那とは夏侯霸の事だ。

そんな事を考えながら夏侯霸との会話を進めて行く。穏やかな微笑みを浮かべ涼やかな声を出す夏侯霸。全てを包み込んでくれるような温かさを心の中に感じる樊稠。

ここが徐栄とは違う所だ。確かに徐栄も尊敬出来る将だ。しかし叩き上げの軍人である為か、夏侯霸から感じる温かい優しさは無かった。

だからと言って徐栄が優しくないという訳では無い。ただ夏侯霸と一緒にいるだけで安心する。心地良いのである。

そんな夏侯霸と出会えて本当に良かったと思う。そこで、ふと思いついた。

（徐將軍はどうなったのだろうか……）

虎牢関の戦い後、董卓軍のほぼ全ての人員は劉備軍に組み込まれた。しかし、その中に徐栄の姿は無かった。

もし、どこかの勢力に仕えていたら強敵になるのは間違いない。何たって夏侯霸と同等の力を持っているのだから。

「樊稠、どうかしましたか？」

「はい？……あ、いえ！ 何でもありません！」

「そうですか？ ならば良いのですが」

涼やかな声を発し、安心したように微笑む夏侯霸。その微笑みを眺めながら自分も夏侯霸のような立派な将になりたい、と思う樊稠であった。

霞と刹那の間（前書き）

まさか、こんなにも忙しくなるなんて思いも……しました。

いや、正直甘く見ていただけですね……独り言です

霞と刹那の闇

陽光が輝きを放ち、風が火照る自分の身体を優しく撫でるのが心地良い。そう感じる霞。

光に反射し獰猛な煌めきを放つ偃月刀は空気を斬り裂く唸り声を発して回る。

右に左に自由自在に暴れる偃月刀を制御しながら目標に定めた空間を斬り裂く。

そして最後に偃月刀を大きく横に薙払い終了する。肺と脳が新鮮な酸素を求めて暴れる。それをなだめながら荒い息を吐く霞。

そして視線の先にいる夏侯覇へと向けた。艶やかな黒髪を陽光に煌めかせながら彼は物思いに耽るような感じで何か考えている。

その姿を絵にしたら結構な値段で売れるだろうと大変失礼な事を酸欠で少しモヤが掛かっている脳内で考えた。

「中々良くなってますよ」

いつも通りの涼やかで心地良くなる声で言ってきた。しかし『ですが』と付け加える夏侯覇。

「一点に焦点を合わせない方が良いですよ」

「……はあ？」

思わず疑問の声を上げてしまった霞。しかし何を言っているのか、さっぱり分からないのだから仕方ない。

「そうですね……相手に焦点を合わせるのではなく、どこにも焦点を合わせず全体を感じる感じで」

「……何を言つとるんか、さっぱり分からんのやけど……」

あっさりと簡単そうに教える夏侯覇に張遼はそう返した。すると夏侯覇は困ったように唸って悩み始める。

「何と言いますか……その……ですね……うむう」

腕を組みながら考える夏侯覇の姿は、どこか可愛く見えてしまう。更に『うむう』と唸る声なんかは何も言えまい。

そのまま夏侯覇は四苦八苦しなから説明して来た。こちらでも理解するのに四苦八苦しただが何とか理解出来た。

「あー……つまり、相手だけを見るんやなくて視界に入っとるもん全部を見るって事かいな？」

「まあ、そんな所ですね」

微笑みながら答える夏侯覇。そんなにさらっと言われても困る。理解するのと実際にやるのでは違う。

そして、それを行って何の得があるのだろうか。そんな霞の心を読み取ったのだろうか夏侯覇は言葉を続ける。

「確かに、いきなり出来る物でもありません。十年、二十年と鍛練して身に付くかどうかですから」

夏侯覇は穏やかに言う。その際、そよ風が彼の髪を弄りなびかせる。

「この見方を習得すれば大抵の相手ならばどのような技を出すかが

予測する事が可能です。完全に自分の物にすれば、相手の僅かな視線の振れだけで動きを先読み出来ますよ」

「マジかいな!？」

本当に凄い事だ。もし夏侯霸の言っている事が出来れば相手の力量が上でも十分に戦える。何たって相手の動きを先読み出来るのだ。

これ程までに役に立つ物は無いであろう。そこまで思い至った霞は、ふと気が付いた。まさかと思うものの、この考えならば理屈が通る。

「……もしかしてウチらと戦った時も使ってたんか？」

「はい。勿論」

どこまでも軽く答える夏侯霸。しかし納得した。一度だけ三対一で夏侯霸と打ち合った事がある。

勿論『一』の方は夏侯霸。『三』は霞、華雄、呂布という顔触れだったのだが一度たりとも、こちらの攻撃が当たらず逆に夏侯霸に反撃されるばかりだった。

改めて夏侯霸の凄さを実感する　そして疑問も。夏侯霸は『いつ』このような技能を身に付けたのだろうか。

どこからどう見ても自分と同じくらいの歳にしか見えない。そう、彼には不可解な点が多いのだ。

その事を夏侯霸に訊いてみたい気がする。しかし彼の事だ。絶対に話さないだろう。

「ちなみに、この見方は軍勢同士のぶつかり合いでも有効です」

「……はい？」

「張遼殿は戦の時、敵陣のどこに突撃しますか？」

大気を伝わり夏侯霸の涼やかな声が霞の鼓膜を震わせる。霞は率直に応じた。

「……敵の強い所やな」

「それは駄目ですね」

「え！？ 何でや！？」

強い敵と戦う。それがいけない事なのだろうか。それに強敵を倒せば、その後の戦も楽になる筈だ。

「わざわざ強い部隊に向かわなくとも弱い部隊、つまり他の箇所より兵の練度が低そうな部隊から突撃した方が良いのです。何故だか分かりますか？」

「……分からねん」

「確かに戦闘単位での戦いでは強い部隊も叩かなければならない時があります。しかしながら戦術単位、戦略単位では違います」

まるで親が子供に難しい問題の答えを教えるかのように言うて来る夏侯霸。ちなみに夏侯霸の言う戦闘単位とは数百から数千規模の兵力。

戦術単位は数万規模の兵力、戦略単位は国の生産力等も交えた上に数十万規模の兵力である。

「戦術単位、戦略単位では戦闘単位とは違い、規模が大きいので一部の強い部隊だけでは戦になりません」

「……む？」

「簡単に説明すれば、互いに『十』の部隊がいます。その内で『三つ』が強い部隊、残りは普通、もしくは弱い部隊です」

そこで夏侯霸は張遼の頭に染み込ませるのを待つかのように一息入れ、再び話し始める。

「戦が始まり強い部隊以外は全滅しました。相手の残りは八部隊です。張遼殿、勝てますか？　ちなみに敵にも強い部隊がいて、二部隊生存しています」

「……無理……かな？」

「ええ。余程、素晴らしい策がなければ勝てません。つまり強い部隊だけでは戦は出来ないという事です」

成る程、と霞は感嘆した。確かに兵力に差があり過ぎれば、まともな戦にならない。敵の弱い箇所を削るのだから強い部隊と戦うよりも、損害は少なくなるだろう。

しかし、それと先程の見方がどう繋がるのだろうか。内心、首を傾げる。

「練度が低い部隊は進軍や陣形を整える時に、どうしても遅くなるのです」

「あ、つまり他の所よりも動きが遅い所に突っ込めば……」

「はい、そうです」

良く出来ました、と言わんばかりに優しく言う夏侯霸。極めれば視線の振れだけで相手の動きが分かるのだから動きの早さの違いも見分ける事は可能だろう。

夏侯霸に誉められて嬉しくなる霞。しかし、そこで新たな疑問が湧き上がった。夏侯霸は、それをいつ判断しているのだ？

動きを見極めるくらいの距離。その距離を考えて絶句する。霞の予想が正しければ敵陣へと突撃する最中。

そんな時、冷静に練度の低い箇所を探せるのだろうか。敵陣から

の矢が降り注ぐ中で。無理だ。少なくとも自分には出来ない、そう霞は思った。

「……ウチ、まだまだだな」

「張遼殿の歳で、その事実が付けば十分ですよ」

俯いた霞の呟きに夏侯霸は、そう返した。彼の言葉が優しく心に染み込んで来る。そんな言葉に礼を言おうと霞は顔を上げて 動けなくなった。

正確に表現すると夏侯霸の眼から視線を外せなくなった。彼の眼には 。

「……そう、後悔する前に己の力を見極める事が大事だ……」

低く通る声。しかし、いつもの穏やかな声ではなく何か重々しく、辛そうな声。先程、彼の声に癒された心が冷えて行くのが分かった。

そして彼の瞳に映る感情の色が霞の心を掻き乱す。どこまでも深い闇。落ちたら二度と戻れ無い、そんな気分にさせられる。

その闇には様々な感情が映し出されていた。後悔、怒り、哀しみ、
見ているこちらが変になりそうな程の数。

自分と同一年程度の人間が出せるような代物では無い。駄目だ、
見てもらえない。そう思っても何故か視線を逸らす事が出来ない。

胸が締め付けられるように苦しい。そして悲しい。彼を見ている
だけで、こちらも悲しくなる。何故だ。そう自分自身に問うても答
えは出なかった。

「さて、そろそろ戻りますか」

夏侯霸がそう言う。いつも通りの声だ。先程の永遠に続くかのよ
うな苦しい時間が嘘のようだ。いや、一瞬だったのかも知れない。

「申し訳ありませんが張遼殿。私はこれから用事がありますので失
礼しますね」

穏やかに微笑みながら礼儀正しく一礼し、霞に背中を向ける夏侯
霸。いつもの微笑みだった筈だ。

しかし、どこか哀愁漂う微笑みに見えてしまった。彼の背中也寂
しく見えてしまう。

彼の過去に何があったのだろうか。何が彼にあのような眼をさせてしまったのだろうか。よく考えたら彼の事は一つも知らない。知っているのは名前と出身地、強さだけだ。

知りたい。彼の事が、もっと知りたい。小さくなって行く彼を見つめながら胸を押さえた。

苦しい。痛い。どんな傷の痛みでも堪えて来た。しかし、この胸の苦しさ、痛みは堪えられない。

この二つの感覚が何を意味するのか分からない。しかし彼の事をもっと知ったら、この苦しさや痛みは消えるかも知れない。

既に姿が見えない。しかし視線の先にいるであろう彼の事を思いながら胸を押さえ続ける霞　何故か自分の心音が高まっている事に気が付きながら。

木漏れ日の川

張遼と別れた後、自室へと戻った夏侯惇はある物を用意する。布で巻かれた槍のように長細い物を持ち出掛けた。

政庁を抜け城外へと足を進める。城内の街は賑やかで活気に満ち溢れていた。

人々は笑顔で平和な日常を満喫している。店頭では店主が商品の説明をし、客はそれを頷きながら聞く。

道端では買い物中の女性同士が世間話に花を咲かせ子供達は元気良く駆け回る。

この光景を眺めているだけで嬉しくなる。どんな褒美よりも喜ばしく満足する事が出来る。

徐州に入って大きな戦は起きていない。いや、起きないように努力した。

大きさを問わず大小様々な豪族と話して来た。

上から押さえ付けるのではなく、対等な関係で話して来たつもりだ。それが功を奏し、豪族達も従って来てくれる。

農地に置いて足運び農民一人一人の意見を聞きそれを内政に反映出来るようにしてきた。

その結果が今、目の前に広がる光景だ。燦々と輝く太陽の下、人々は平和を享受する。

これが本来あるべき国の姿。その為ならば、この命をも惜しまない。

商人や職人達から、よく挨拶をされたり話を求められたりした。城内の街では主に商人や職人と接して来たからだ。皆、好意的な態度で接して来る。

夏侯惇にとってはそれも堪らなく嬉しい。努力した甲斐があったと思える。

そんな際、会話をしていく中で気になる情報が幾つかあった。

「曹操様の勢力範囲が急速に広がっております」

馴染みの行商人がそう話して来た。商人は情報に過敏だ。

あそここの地方で織物がよく売れる、こちらの地方では米がよく売れる等々そんな情報を把握しておかないと生きてはいけない職業だ。その為、正確な情報も多い。

「何でも凄い武将が仕官したらしいですよ夏侯霸様」

「その将の名は何と言つのですか？」

「確か……徐將軍という方らしいですよ」

恐らく徐栄の事だろう。虎牢関の戦いの後、徐栄の消息が分からなかったのだ。簡単に死ぬような将でも無い。

曹操軍の勢力圏の急激な拡大はこの為だろう。気を引き締めなければならぬ。

「ああ、後ですね……袁紹様の勢力圏も広がっていますね。この前なんて公孫賛様と争っておられるのに青州をお取りになりましたから」

そう、これは夏侯惇も気になっていた情報だ。袁紹の勢力圏の拡大が異常である。

公孫贊と争いながら青州を征服し、更に領内に点在する黒山賊の討伐も同時進行で進めている。

失礼だが以前に反董卓連合で会った袁紹からはそんな能力があるとは思えなかった。誰か有能な者がいるに違いない。

もしかしたら自分達と同じ国から来た者かも知れない。これも注意せねばならない事だ。

徐州は守り難い土地だ。東は海、西に曹操、北に袁紹、南に袁術と囲まれている。最悪の場合、逃げ場が無くなる。ちなみに孫策が袁術から兵を借りて揚州に入ったようだ。

「貴重な情報をありがとうございます」

「いえいえ、いつも御世話になっている夏侯覇様に私らはこんな事でしか恩返し出来ません故に」

「いえ、物凄く有難いですよ。それでは御仕事を頑張ってください」

夏侯惇は一礼し、その場を後にした。これからどうするかだ。人材不足は將校階級の者を育て上げ補う事にした。

他にも色々とは打ってある。しかし、それでも足りないだろう。

夏侯惇は悩みながら歩く。そして、いつの間にか風が変わった事に気が付いた。

先程までのような人々の熱気が混じった風では無く静かな優しい風だ。

夏侯惇は辺りを確認する。

どうやら無意識の内に目的地へと向かっていたようである。目の前には馴染みの森がそびえている。

夏侯惇は迷わず森の中に入って行く。風が土と緑の香りを肺の中にまで運んで来る。

落ち着く香りだ。そして気持ちも、より穏やかになる。夏侯惇は目的地へと足を進める。

木の葉が騒めき鳥達がさえずり、淡い大地の香りが夏侯惇を優しく迎え入れる。

そして入り組んだ木々を抜けると目の前には清らかに流れる川が視界に飛び込んで来る。ここが目的地だ。

夏侯惇は川の傍に腰を下ろして布に巻かれた物を取り出す。二本の釣竿である。一本は自分の右隣に置いておく。

腰にぶら下げた袋から餌を取り出し、仕掛けに付ける。そして陽光の輝きを浴びて煌めき流れる川へと投げ入れる。

そう夏侯惇は釣りをしに来たのだ。ただし、夕飯の食材確保と気分転換の為にである。

夏侯惇の日々の食事は自分自身で採って来た物を使用していた。ただし、野菜等は農家や市場から調達している。

正直、夏侯惇は食に対する興味が薄い。栄養が均等に摂れれば、それで良い。食事に金を掛けるくらいなら軍備や内政の費用に充てる

実際に夏侯惇の給料の九割は自分の部下の為に使っている。残りの一割は生活に最低限必要な費用である。

釣糸が引かれている。釣竿を引く。当たりだ。今日は、よく釣れる日かも知れない。

しばらく心地良い風に包まれながら釣りを続ける。一匹、二匹、三匹と釣れていく。光に反射し宝石よりも美しい輝きを放つ水面を眺めながら背後に向けて声を発した。

「何故、そこにいるのか訊きたいのですが宜しいでしょうか呂布殿？」

背後から身動きする気配がする。初めは獣だと思ってしまった。こちらに近付いて来る気配がする。

「……ん？」

呂布は夏侯惇の左隣に座り込みながら首を傾げ、こちらを純粹無垢な目で眺めて来た。

「……何故、ここにいますか呂布殿？」

「……お散歩してたら夏侯覇、見付けた」

「……それで暇だったので付いて来たという訳ですか？」

「……うん」

夏侯惇の問いに素直に頷く呂布。まるで、その姿は小動物だが。

「……確か貴方は街の巡回中ではなかったですか？」

「………ん？」

「その間と疑問符は何ですか？」

「………ん？」

「『ん？』では、ありませんよ呂布殿」

「………ん」

何度、訊いても何も言わない呂布は何故か夏侯惇の方へと身を乗り出して来た。何をするのかと見ていたのだが。

「……呂布殿」

「……ん？」

「何故、私の前に座って来るのですか？」

何故か呂布は夏侯惇の目の前、正確に言つと夏侯惇の股の間に座り込んでいる。まるで夏侯惇が呂布を後ろから抱き締めるような形だ。

「……こゝ、落ち着く」

「……はあ。何を言っても退かないつもり……ですよね」

「うん」

何故、そこだけ即答するのだろうか。少し咳き込みながら考える夏侯惇。

数日前から喉に違和感を覚えていたのだ。恐らく焼き魚の小骨でも引っ掛かっているのだろう。

燃え盛るように紅い髪が先程から夏侯惇の鼻先をくすぐる。それ

に彼女の頭の所為で水面が見えない。しかし、よく釣れる。
そこで、ふと気が付いた。

（まさか……呂布殿は私が釣りに行く事を知り、釣り上げた魚を分けて貰う為に付いて来たのでは……）

呂布が大食いなのは周知の事実だ。しかし呂布を眺めながら、そんな事は無いだろうと思い直した。
そんな時だった。呂布が唐突に呟いて来た。

「……夏侯霸」

「はい、何でしょうか呂布殿？」

「……お母さんみたい」

矢が突き刺さった。深く深くえぐるように心へと。『お姉さん』
と言われた事はあるが『お母さん』は流石に無かった。

（私はいつの間に性転換をして子供持ちの親になったのでしょうか……）

何と表現するれば良いのだろうか。そう、これは『諦め』だ。もしくは『絶望』。

「……夏侯霸の腕の中、落ち着く。恋にはお母さんいない。ずっと一人ぼっちだったけど……多分、お母さんはこんな感じたと思う」

「……今は一人ではありませんよ呂布殿。一応、私はお母さんみたいなのでしょうか？」

呂布の頭を撫でながら言う夏侯惇。呂布はまるで子犬のように受け入れ、頭をすり寄せて来る。

「……うん」

そのまま呂布の頭を撫でながら釣りを続ける夏侯惇。呂布が腕の中で小さくなりながら『お母さん』と呟く。

目から溢れてしまいそうな液体を今回だけ、本当に今回だけは頑張って我慢しておこうと心に誓った。

河北の勇将（苦勞人）

大地を揺るがす如く駆ける騎馬隊。触れる者全て喰い千切るような獍猛さを醸し出している。

旗印は『王』。公孫賛軍の將の旗印だ。土煙を上げ迫り来る騎馬隊の後方には歩兵もいるようだ。全軍で一万五千程。

対するこちらの兵力は八千。騎馬が三千、歩兵が五千なのだが彼の周りにいるのは騎馬が五百と歩兵一千だ。

装備が華美な事で有名な袁紹軍にしては珍しい地味でくたびれた装備の兵士達。

彼の隣に立っている『高』の旗も若干萎れているように見える。彼は溜め息を吐きながら兵士達に指示を下していく。

迫り来る馬蹄の轟き。
騎馬が先行し過ぎており、歩兵と間が広がっている。そんな光景を冷めた視線で眺める。

こちらの弩兵や弓兵が矢を放ち始めた。風を貫き轟音を響かせ迫り来る騎馬隊へと降り注ぐ。

何十人もの騎兵が地に落ちるが、それでも騎馬隊の勢いが止まらない。自分達の命を喰らう為の刃が不気味な輝きを放つ。

しかし、それでも冷めた視線で眺め続けた。敵騎馬隊は道の両側に雑木林が生い茂っている場所に差し掛かった。

そこを通り過ぎれば彼の目と鼻の先に敵の騎馬隊が来る。それでも彼は焦らなかった。

雑木林から何かが飛び、敵の騎馬隊へと吸い込まれる。矢だ。それも一本や二本では無い。

敵は突然の事で混乱しているようだ。陣形に隙が出来る。彼がそれを逃す筈も無かった。単純な命令を下した。

「全軍突撃！」

槍を脇に抱えて突つ込む。彼の後に五百騎が続く。その後ろからは歩兵一千。風が耳元で唸りを上げる。

矢の雨が止み、両側の雑木林から騎馬隊が出て来た。彼の部隊の

騎馬隊である。あらかじめ伏兵を仕掛けて置いたのだ。

挟撃を喰らい乱れる『王』の旗印。そこへ彼はそのまま突っ込んだ。一人目を槍で叩き落とし、二人目の体を貫く。

三人目は蹴り落とした。敵の騎馬隊、数は四千といった所だろう。その中央で乱れるながらも一塊になっている奴らがいた。数は約百騎。

恐らく旗本だ。そこに敵将がいる。迷わず突っ込む。道を塞ぐ敵は倒す。鮮血で槍や身体を染め上げるが心は冷めたままだ。

昔のように熱くならない。それはそれで良いのかも知れない。まあ、今はどちらでも良い事なのだが。彼はそう場違いな事を考えながら槍を振るう。

敵の旗本にぶつかった。呆気なく旗本の塊を斬り裂いて行く。斬り裂き駆けた先に敵将らしき男がいた。

恐怖の為何か分からないが顔を歪ませていた。槍を構える。敵将が何か叫びながら剣を抜く。何と叫んだのか分からなかった。

距離が縮まる。完全に彼の間合いに入った。しかし何もしない。

更に距離が近付き敵将が剣を振り落としてきた。

それに対して彼は避けて敵将の顔面に右拳を叩き込んだ。馬から吹き飛び不様に地を転がって行った。

止まったものの動かない所を見ると気絶したようだ。敵の騎馬隊は既に散り散りに逃げて行った。

部下に気絶した敵将を捕らえさせた後、伏兵部隊と合流し敵の歩兵部隊と一戦交えようと駆けた。

見付けた。しかし何か変だ。やる気が無いというか士気が極端に低い事が見て取れる。

何故だろうか。彼は疑問に思いながらも騎馬隊を三つに分けて攻め掛けた。

兵力差は侮れないのでじわじわ削る予定だった。

しかし三回程、繰り返し攻撃しただけで後退し始めた。畏かと思つたが逃げ方に余裕が無い所を見ると伏兵はなさそうだ。

とにかく全軍で追撃する。騎馬隊で敵陣へ斬り込み緩んだ所に歩兵がぶつかる。そこかしこで絶叫が響き渡り、鮮血が大地を染める。

深追いは禁物なので適当な所で追撃を止めた。三千は討つただろうか。騎馬と合わせると四千を超えるかも知れない。それに比べてこちらの被害は千にも満たない。

「……呆気なさ過ぎだろ」

呟いた声は風に飲み込まれた。よくよく考えれば捕らえた敵将が、あの軍勢総大将だったのかも知れない。

（総大将の名前は王門。敵騎馬隊の旗印は『王』だった……って事は、あいつが王門だったのか？）

だとしても大将がやられたからといっても、あんな簡単に撤退するとは一体どんな指揮系統をしているのだろうか。これでは、まるで賊だ。

「……人選を間違えたって事かな……」

「はい？」

「いや、何でも無い」

独り言に反応した旗本の一人にそう答えた後、返り血を拭きながら溜め息を吐く。

「報告します。軍馬二百頭、武具約三千、兵糧多数を獲得しました」

「ああ、分かった。御苦労さん」

報告に来た兵士に労いの言葉を掛け、全軍に本陣への帰還を通知した。

荷車に戦利品と負傷兵を詰め込み本陣へと進む。ようやく休める。正直、一ヶ月間は休暇が欲しい。

黄巾党との戦いからずっと戦い続けて来た。黄巾党の次は黒山賊。そして河北の各州攻め。また黒山賊。黄巾党の残党、青州攻め、またまた黒山賊に黄巾党の残党。

そして今回、対公孫贛戦。連戦に次ぐ連戦。本当に一ヶ月は休暇は欲しい。特に兵士達には与えてやりたい。

そんな事をあの人が許す筈があるのだろうか。普通だったら許さ

無いだろう　普通だったらだが。

色々と考えている内に本陣に到着。煌びやかな旗やら何やらかんやら。兵士達の鎧も見た目重視。

こんな所に金を掛けるなど言いたい　　というか実際に言ったが
聞く耳を持たない。

自分の軍勢を副官に任せて本陣の中央にある一際華美な天幕へと
仕方なく向かう　　本当は行きたく無かったが。入る前に溜め息を
先に吐いておく。

中がどんな惨状か想像もしたくない。だが行かなければならない。
もう一度、大きく溜め息を吐いておいた。

「高幹ただ今、帰還しました」

そう言って中に入った瞬間、頭を抱えなくなった。まさか、あいつらもいるとは思わなかった。今日は厄日だ。そう思わずにはいられない。

「おーほっほっほっほー！」
「おーほっほっほっほー！」

「おーほっほっほっほ！」
「おーほっほっほっほ！」

天幕に響き渡る高い声。最近では『うーほっほっほっほ！』に聞こえてしまう。

「元才さん」

「よくやりましたわ」

「やはり私達の指揮の」

「おかげですわ」

言葉を切り切りにしながら一人一人が繋げて言ってくる。よく似た声だ。

天幕の中には他の将や文官、軍師もいたが全員、無視している。ある者は目を閉じ、ある者は隣と話、ある者は地面に穴が開く程に見つめている。つまり全員下手に関わりたく無いという事だ。

彼　高幹（字は元才）は溜め息を吐き、頭を抱えたいのを我慢して目の前の光景を直視する。

視線の先には元々、彼がいた国では伯父であつた筈の女性 袁紹が高笑いしながら立っている。

その両隣には、これまた従兄弟であつた筈の女性達 袁譚、袁熙、袁尚がいた。

元々いた国では伯父の息子であつた筈の三人が伯父の妹になっていた。そもそも伯父自身が女性になっていた。

そんな彼女達は高幹の従姉妹だったり。もう何が何やら。だが既にこの国で十数年過ごした時間は伊達では無く慣れてしまった。

再びこの国で『高幹』として生まれ変わった時は、もう一度天下に覇を唱える機会が来た、と喜んだものだ。

だが、そんな喜びは一瞬にして潰えた。正直、発狂してしまいそうだった いや、発狂した方がマシだったかも知れない。

生まれ変わった、つまり赤子として生まれた訳であつて様々の事に制約を受けた。話す事も出来ないので自分の意志を他人に伝えられず。

動く事も出来ず一日中じっとしているだけの毎日。腹が減っても

泣き叫ばなければ飯を貰えず。更にその飯も味気の無い母乳でしか無く 屈辱だった。

そして赤子なので動けず話せずなので便所に行く事さえ出来なく死にたくなつた。歯が無く噛む力も弱いので、舌を噛み切つて自害する事も出来ず。もう誰か殺してくれと心底願つたものだ。

何故、赤子に自我が無いのか心底分かつた気がする。こんな死にたくなる程の拷問生活を体験した所為で野望や野心やら、そんな物が全て消え去つた。

願うは、ただ一つ。ゆつくりひっそり穏やかに過ごしたい。だが、この国の袁紹の血縁として生まれたからにはそんな事が出来る筈も無かつた。

しかも、袁紹ただ一人でも無茶苦茶なのに他に三人も袁紹モドキがいるのだ。この国での幼い頃から地獄だった。

「元才さん！」

「聞いて！」

「いるの！」

「ですか！」

「聞いていますよ」

四人揃うと、いつもこうだ。一人一人会話を区切って話して来る。本当に目障りだ。そして、これに慣れてしまった自分が悲しい。

この四人は昔から自分に全て押し付けて来た。その為、無駄に色々と出来るようになってしまった。内政関係に始まり軍事、料理、はたまた裁縫まで。

どれだけ苦勞すれば良いのだろうか。神は意地悪だ　まあ、と
つくの昔に神など信じなくなったが。

その後も適当に話を流しながらも休暇だけは貰えるように巧みに誘導した。この四馬鹿を誘導する技術は血縁者にとって必須科目だ。しかしながら貰えた休暇は一週間だった。

再び高笑いを上げている四人を見る。全員、凄まじい螺旋髪だ。

次女、袁譚は腰に達するまで長い金髪を後頭部辺りに結んでいる。
無論、螺旋髪。

三女、袁熙は背中辺りまで伸びている金髪を後ろ首辺りで二つにまとめている。勿論、螺旋髪。

四女、袁尚の金髪は顎くらいの長さに切り揃えている。こちらは先端辺りが螺旋。

ちなみに高幹の髪は黒で耳が隠れるくらいの長さ。螺旋は全く無い。もし、あつたら自害している。

「それでは」

「軍議を」

「終わり」

「ましよう」

その言葉と共に一斉に皆天幕から出て行く。勿論、高幹も四馬鹿に捕まらないように逃げた。

空は青々しく、どこまでも広がる。その空を雲が悠々と泳ぐ。雲になりたいと思った。

その時だった。背中から衝撃を感じた。誰か背中に抱き付いて来

ただ。ここでも溜め息を吐く高幹。

「おい文醜。何でお前は毎回毎回、俺に会う度に抱き付いて来るんだ」

「久々の高の匂いだぜ。えへへへ」

抱き付いて来た張本人 文醜は、どうやら全く聞いていないらしい。ちなみに彼女から『高』^こと呼ばれている。

「うへへへへ。あたいの高。うへへへへ」

「おい。現世に戻って来い」

「うーん。うへへへへ」

いつも抱き付いて来るが今回はかなり酷い。それよりも水浴びは毎日欠かさずやっていたが、本格的には体を洗っていない。

もしかしたら、その臭さで頭が逝かれたのかも知れない。まあ、ほっといたら治るだろうと考えた。

「うーん。やっぱり触り心地も良いし、良い匂いだし。うーん、あたいの高うう。うへへへへ」

止めた方が良いのだろうか。何故か鎧の隙間から手をつ込み身体を撫で回して来る。こいつは本当に何がしたいのだろうか。高幹には理解出来なかった。

周りの者は『またか』という顔をしていたり、ニヤニヤ笑っていたりしている。誰か一人でも良いから助けて欲しいのだが。

「うーん……………うにゅ」

そろそろ本格的に危ないかも知れない。医者と呼んだ方が良さだろうと思いつつ雲を数え始める高幹。

文醜は何気に馬鹿力であるし高幹に抱き付いた時は更に強くなる。そんな文醜を離す事が出来るのは顔良しかないのが現状。

どうせ顔良しかないのだから彼女がここに来るまで暇だから雲の数を数える事にしたのだ。

今までの経験上、顔良以外の奴は手伝ってくれない。顔良を呼ば

うにも動けない。という訳で待ち続けた。

結局、顔良が来たのは大分時が経った頃であつたのだが顔良でさえ文醜を離すのが困難であつた為、更に時間が掛かってしまった。

闇夜の帝王、降臨（前書き）

……今回やり過ぎましたね。本気で疲れて眠いのでレッドゾーンとの境界線を見誤っていると思います。

後悔も反省もしています。

もしかしたら編集し直す事になるかも知れませんが御了承下さい。誠に申し訳ありません。

闇夜の帝王、降臨

「くら！ 星！」

「はっはっはっはあ！ まだまだですな、北郷殿」

中庭に轟く一刀の怒鳴り声。顔を真っ赤にする一刀を見ながら星は笑い声を上げた。

「星！ よくも、そんな羨まし……ではなく、破廉恥な事を御主人様に……！」

陽光が降り注ぐ中、愛紗の怒鳴り声も響き渡った。傍らにいる桃香も羨ましそうな顔をしていたりする。

「おや？ ただ単に首筋へと息を吹き掛けただけですぞ？ そんな事で、あの様に変な喘ぎ声を上げる方がどうかしていると思いませんか？」

「うぐっ！？」

星の返答に変な声を上げる一刀を見て益々、面白く感じる星。中庭で愛紗や桃香と仲良く会話している一刀の首筋に息を吹き掛けただけなのに、この反応。本当にからかい甲斐がある。

「ふう」

「ひゃわ!？」

いきなり首筋へと息を吹き掛けられた。思わず変な声を上げてしまふ。誰がしたのかを確かめる為に慌てて振り返る星。

「フフ、趙雲殿も人の事は言えませんか」

そこにはいつものように穏やかな微笑みを浮かべている夏侯霸がいた。星は文句を言おうとしたが、それよりも早く夏侯霸が星の頭を優しく撫でて来たので言えなくなってしまう。

「劉備様、内政についての報告書を」

「あ、ありがとう夏侯霸さん」

笑顔のまま桃香へと渡す夏侯霸。しかし何故か、その笑顔に違和

感を覚えた。

「いえいえ。本当は昨日、日が暮れた時に渡そうと劉備様の部屋に行ったのですが侍女から北郷殿の執務室におられると聞きましたので」

そこまで言って言葉を止める夏侯霸。一刀や桃香、愛紗は何故か固まっている。何やら不穏な空気が漂い始めている。

「日が暮れたばかりですしまだ政務をしておられる時間帯でしたので執務室に向かったのですが……何やらお楽しみの最中だったようでしたので、しばらく待たさせて頂きました」

「な！？ 貴様！ 盗み聞きとは」

「仕事で赴いたのに盗み聞き呼ばわりですか？」

「うぐっ……なら、せめて一言」

「皆様でお楽しみの最中に私に入れと？」

「ぬぐっ……うう……」

愛紗の言葉をことごとく論破していく夏侯覇。誰が見ても機嫌が悪い事が分かる。星の隣で穏やかに微笑んでいるが目笑っている。いい。

「それにしても随分と長くお楽しみだったようで。ようやく終わったかと思ったら、又もや喘ぎ声が聞こえる始末。そうですね……明け方近くまで聞こえていましたかね」

その言葉に顔を赤らめる一刀達。星としては顔を赤らめるより先に謝っておいた方が良さと思う。というより早く謝っておいて欲しい。

先程から夏侯覇から何か圧力のような物が湧き上がっているような気がする。

「しかも何やら幼気な少女の声も聞こえたような。まさかとは思いますが北郷殿犯罪を犯してはいませんか。『天の御使い』である貴方が、そんな幼女のような方を……ねえ？」

「え、あ、いや、朱里達とは同意の上で」

「北郷殿、別に他人の私生活をとやかく言うつもりはありません」

そこで言葉を止め、三人に顔を向ける夏侯覇。『ひっ!?!』と桃香が声を上げる。三人共、顔色が青を通り越して紫になった。

顔色を紫にする暇があるのなら早く謝って欲しい。先程から地面が揺れているような気がする。

「ただ明け方近くまで延々と待たせられ、聞きたくもない喘ぎ声を聞かされ、挙げ句の果てには昨日、貴方達が終えている筈の政務を押し付けられる始末。何でしょうね、これは？」

「ひ……あ……あの、ご、ごめんなさい!!!」

「あ、あのだな……済まない!!」

「う……ああ……わ、悪かった!! この通り許して!!」

三人共、夏侯覇に跪いて許しを請う。謝るなら初めからやらなければ良いのにと心底思う星。

夏侯覇はどんな表情をしているのか知りたいと思ったが、あまりにも怖いので出来なかった。

「……分かりました。今回だけは許しましょう。ただし、今度したら本気で」

そこで言葉を切る夏侯霸。その瞬間、辺りが真冬並みに寒くなった。吐いた息が白くなっているようにも見える。跪いた三人はひたすら謝りながら逃げ去って行った。

「……夏侯霸……殿？」

「はい。何でしょうか？」

夏侯霸の顔を恐る恐る確認しながら名前を呼ぶ星。答える夏侯霸はいつもの夏侯霸であったので安心した。

「その……御苦労様です」

「いえいえ」

「夏侯霸殿、朝方まで……その、北郷殿達は……男女の営みを……していたのですか？」

「貴方には、まだ早い事なので知らなくて良いですよ」

星の興味本位の問いに夏侯覇は穏やかに答えた。しかし、星はこの答えに不服だった。

（何故、私を子供扱いするのだ！！）

そう夏侯覇はよく星達を子供扱いする。誰に対しても紳士的に接する夏侯覇。特に女性に関してはとても丁寧に接する。

しかし、よくよく考えれば子供扱いしているような気がする。先程、頭を撫でられた時でも妹を見ているような目付きだった。

それが堪らなく嫌だ。自分はしっかりとした大人の女性という事を分からせてやる、そう決心する星。

「夏侯覇殿、窓には注意して下さい」

「はい？」

「フッフ、何でもありませんぞ」

決行は今夜。最近、珍しく蒸し暑い夜が続いているので就寝前に窓を開ける筈だ。

夏侯霸が窓を開けた瞬間、そこから部屋に飛び込み夏侯霸に襲い掛かる。そして大人の女性である星の技量を見せ付けてやる。

夏侯威からの情報によれば夏侯霸の女性経験は、ほぼ皆無。初恋だけという純情振りだ。これならば勝算は十割の筈だ。

星は邪悪な笑い声を心の中で上げる。計画は完璧。もしかしたら初めての口付けを体験するかも知れないが夏侯霸を見返す為だから仕方ない。

そう何度も言い聞かせるように心の中で唱える星。夏侯霸が訝しげにこちらを見ていたが気にしない。

それよりも今夜が楽しみで仕方ない。夏侯霸と別れた後、自室に籠もり脳内で予行演習を何度も行う。

まず床に夏侯霸を押し倒し耳元で甘く囁く。そして首筋や耳に息を吹き掛け、体を優しく撫で回す。

抵抗すれば『私の事が嫌いのですか』と涙ぐみながら囁けば優しい夏侯霸の事だ。下手に動けなくなる筈。後は煮るなり焼くなり好きに出来る。

そう考えながら、ふと鏡に映る自分の顔が見えた。物凄くにやけていた。

「いかんいかん。気を引き締めなければ。相手は経験皆無の夏侯霸殿であつても油断は禁物だ」

自分に言い聞かせるように呟く。そう備え有れば憂い無し。準備もしっかりしておこう、そう思い至る。

「まずは身体を洗わねばならんな」

思い至つたら即実行。湯の張っておくよう丁度、部屋の前を通り掛かった侍女に頼む。

しかしながら既に湯は張っていたらしく、すぐに入る事が出来た。どうやら愛紗が頼んでいたらしい。たまには気が利く、と失礼な事を思う星。

丁寧に丁寧に、これでもかという程に身体と髪を洗う。洗いながらも脳内演習は怠らない。

次は服だ。一応、予備の服に着替えておく。いつも着ている服と同じだが気持ちの問題だ。

後は夜になるのを待つだけだ。仕事は今日は無い。ちなみに下見は数日前から行っていたので問題無い。胸が高鳴る。早く夜になれ。そう願いつける星。

(……そうだ。少し寝ておこう。こちらでも眠くても意味が無い)

そう思い寝台に伏すが、全く眠れない。仕方ないので、そのまま寝台の上でゴロゴロと転がしておく。

胸が張り裂けそう。喉が異常に渇く。何度も水を飲み、何度も脳内演習を行う。本当に楽しみで仕方ない。

ようやく日も暮れ、月が上り漆黒の闇を優しく照らす。時は来たり。

しばらく待った後に行動を開始した。しかし、開始したといっても夏侯霸の部屋の窓付近に隠れて待つだけである。

月光が辺りを照らす。闇の空に浮かぶ月が自分を応援しているようだ。

少々蒸し暑いものの耐えられない事は無い。ひたすら待った。心音がうるさい程、激しく脈動する。

夏侯霸の部屋の灯りが消えた。遂に来た。見つからないように襲撃し易い位置へと移動する。

少し間が空いた後に窓がゆっくりと開く。呼吸が荒くなる。心音がうるさい。胸が高鳴る。大きく静かに深呼吸した。

窓が完全に開いた。今しかない。星は窓へと飛び込んだ。目の前には夏侯霸がいる。灯りを消したばかりだから、まだ暗闇に目が慣れていない筈だ。

それに完全な奇襲。最早勝ったも同然。星は勝利を確信して夏侯霸に飛び付いた。筈だった。

身体がふわっと浮かぶ。視界が周っていく。あれ？と疑問に思った時には既に仰向けで床に倒れていた。

目の前には夏侯霸がいる。丁度、組み伏せられた状態だ。何故だ。完全に奇襲だった筈。混乱する星に夏侯霸が囁く。

「暗殺者かと思えば、可愛い子猫ちゃんだったか」

夏侯霸の言葉に思わず呆然としてしまう。彼は何と言った？ 夏侯霸の顔を改めて見つめた。

そこには星の知る夏侯霸はいなかった。いや、目の前にいるのは夏侯霸であるのは間違いない。彼をずっと見て来たのだから間違える筈は無い。

しかし違う。眼が違う。いつもは穏やかな光を放つ瞳に対して、今の彼は妖艶な光を放ち見る者全てを虜にしまいそうな瞳だった。

「で、私の部屋に何か御用かい、可愛い可愛い子猫ちゃん？」

「ひゃ!？」

耳元で甘く囁かれて思わず声を上げてしまった。夏侯霸はこんな言葉を吐く人では無い。一体全体、何がどうしたんだ。

混乱する頭で必死に考えようとしたが無理だった。

「戸惑っている表情も可愛いね。食べちゃいたいくらいだよ」

「ひゃわう!？」

甘く囁かれた後、耳たぶを甘噛みされた。身体中がゾクゾクする。身体に力が入らない。

夏侯霸は何度も耳たぶを甘噛みしてくる。その度に甘い衝撃が身体中を走り回る。

耳元で囁かれる度に脳がとろけそうな感じになり、頭の中にモヤが掛かる。何も考えられない。

「ひゃわ!？ や!？ あん!」

甘噛みに加え赤子のように耳たぶを舐め始める夏侯霸。その間に手は優しく触れるか触れないかの絶妙な力加減で身体中を触り始める。

腕から始まり脇や肩、腰、腹、首筋、頭、太股、ふくらはぎまで。

だが女性の証である場所　つまり胸等は触らなかった。

しかし、それでも星の理性を破壊するには十分過ぎる程だった。夏侯覇に触れられる場所全てから甘い衝撃が走る。

自分が何か叫んだ気がする。しかし何を叫んだのか分からない。星の心を支配するのは夏侯覇から与えられる甘い衝撃のみ。

首筋を舐められた時には身体の震えが止まらなくなった。夏侯覇に何か囁かれ脳内がとろけされる。

いつの間にか夏侯覇を抱き締めていた。夏侯覇に首筋をも甘噛みされる。自分でも驚く程、甘い声を上げた気がする。

気が付けば寝台の上に寝かされていた。先程と同じく夏侯覇に組み伏せられた状態だ。

「あ……う……いや」

「フッフ、嫌なら逃げれば良いじゃないか。別に私は君を押さえ付けている訳では無いんだよ、子猫ちゃん？」

確かにそうだ。逃げようと思えば逃げられる筈だ。頭の片隅で僅かに残った理性が囁く。しかし無理だ。否、嫌だ。

彼と一緒にいたい。自分がその先に何を望んでいるのか分からないが、とにかく一緒にいたい。

彼の囁き、彼の手、彼の身体、彼から発する熱でさえ感じていた。そんな思いが星を支配していた。

「可愛……い……かわ、いい……私の……こねこ……ちゃ……ん」

彼はそう囁いて星に体重を乗せ身体を合わせて来た。直に感じる彼の体温や重さも甘い衝撃となって彼女を支配する。

星は眼を閉じ改めて夏侯霸を抱き締めながら彼が動くのを待った。しかし、いつまで待っても動かない。

その代わりに彼の規則正しい呼吸音が聞こえて来る。星は我に返り慌てて確認する。

するとどうだろうか。穏やかな表情を浮かべ眼を閉じている夏侯霸がいるではないか。

(……眠って……いる?)

いまだに混乱し続ける頭で何とか状況を整理し、出した結論は。

(寝呆けていた……という事なんだろうか……)

そうとしか考えられない。確か夏侯霸は明け方近くまで起きていたらしい。つまり寝不足気味だったという訳で……。

先程とは違う意味で身体中が熱くなる星。恥ずかしい。とにかく恥ずかしい。穴があったら入って埋まりたい程、恥ずかしい。

とにかく星は夏侯霸の部屋から脱出し自室へと風の如き速さで戻り、寝台へと飛び込んだ。

恥ずかしくて顔から火が出そうだ。先程の事を思い出し悶える星。

しかし、何故か恥ずかしさと共に喜んでいる自分や残念がっている自分がある事に気が付いていた。

それが何なのか。恐らく自分が思っている通りの事なのだろう。

これがそうなのかと考えると妙にしっくりくる。

「……これが」

口の中で言う。胸が少し摘まれたような感じ。甘い感じ。それが心地良い。そうかこれが、と納得する。しかし

（明日からどうやって夏侯霸殿と顔を合わせば良いのだ……）

恐らく、いや絶対まともに顔を見れなくなるだろう　主に恥ずかしくて。

自分もまだまだ子供だと嘆く星だった。

翌朝、恥ずかしさを堪えて何とか夏侯霸に昨晚の事を覚えているか探ってみたが　。

「いや、あまりにも眠くて窓を開けようとした所で記憶が途切れています」

どうやら本当に寝呆けていたらしい。恥ずかしやら喜ばしいやら残念やら。複雑な気持ちの星。

ただ一つ分かる事は
あった。

『寝呆けている夏侯覇には近付くな』で

ある日の徐栄

天下の情勢は激動している。北では幽州の公孫贇が袁紹に敗れた。西では朝廷がある長安にまで勢力を拡げていた馬騰が死んだ。

南では孫策軍が着々と勢力を広げている。徐栄が所属している曹操軍でも洛陽にまで勢力を拡げた。

公孫贇は今までの善戦が嘘のように呆気なく前線を突破され敗れた。

徐栄が独自に集めた情報によると袁紹の血縁である高幹が全軍の指揮を採ったらしい。詳細は分からない。何故か巧みに隠蔽していた。

公孫贇は何名かの部下と共に消息を断っていたが、どうやら徐州の劉備の下へ行っただけらしい。

制圧された幽州は既に民政が機能し始めている。流石は名門。優れた部下が豊富だ。だが河北全域を支配したものの、しばらくは動かないだろう。

西の馬騰は盟友である韓遂と共に朝廷からの要請で長安にまで勢

力を伸ばした。どうやら朝廷は馬騰達に朝廷を守らせる魂胆らしい。

既に朝廷の主だった將軍は職を取り上げられ下野したので好都合だったのだろう。

しかし、この後が不可解だ。馬騰が罪を犯したという事で処刑されたのだ。

そして馬騰の一族全員も処断されたらしい。

ただし馬騰の娘である馬超や馬岱等の何名かが行方不明。馬騰が持っていた全軍は韓遂の指揮下に入った。

こう見ると韓遂が馬騰の全兵力を手に入れる為に朝廷を使って謀殺したように思える。

しかし実際には宦官が謀殺したのだろう。この国は徐栄が元々いた国とは違い宦官の大量虐殺を行っていない。

つまり欲深い宦官達は生き残っているのだ。正義感が強い馬騰の事だ。恐らく宦官と揉めたのだろう。

宦官は目障りになった馬騰を殺した。逆に馬騰の盟友である韓遂が馬超達を逃がす手助けをしたに違いない。それだと辻褃が合う。

馬騰が殺されたのは徐栄にとって想定外の事態だ。そして、これは劉備軍にいる夏侯惇にとっても想定外の事態だった筈だ。夏侯惇としては詰めが甘い。

自室で兵法書を読んでいた徐栄は、そう思った。恐らく宦官の欲深さを読み間違えたのだろう。

(……まあ、仕方の無い事なのだがな)

何故か知らないが、この国の宦官はかなり欲深い連中が多い。夏侯惇はこの事実を知らない筈だ。

それに精神年齢も若返っているので思考や思想も幼くなっている。だが元々の記憶や経験も存在しているので、かなりややこしい事態になっている筈だ。

徐栄もこの国に来た当初は、その事に悩んだものだ。それにしても夏侯惇は以前、戦った時よりも強くなった。

徐栄が死んだ後も戦闘し続け、更に鍛練し続けたのだろう。以前より格段に強くなっていた。

そんな事を延々と考えていた時だった。扉を叩く音が聞こえて来る。

「どうぞ」

「済まんな徐栄」

部屋に入って来たのは、この国の夏侯淵 秋蘭であつた。彼女はそのまま徐栄に近付いて来て言葉を紡いだ。

「徐栄、あのだな」

「秋蘭よ。お前が言おうとしている事に対して私は構わんと言っている」

秋蘭の言葉が終わらない内に言い始める徐栄。更に言葉を続ける。

「だがな、春蘭自身にやる気が無い。やる気の無い者に教えても意味が無いぞ。それにやる気が無い者に構っていられる程、私は暇では無い」

「そう……だな」

徐栄の言葉に溜め息を吐く秋蘭。最近、秋蘭は姉である春蘭に兵法を教えてやって欲しいと頼みに来ている。

別にそれは構わない。しかし、春蘭にやる気が無いのだから仕方ない。

曹操軍に加入した当初、徐栄は春蘭等の一部の者に散々馬鹿にされていた。

大抵、馬鹿にしている方が馬鹿なので相手にしなかったのだが徐栄の部下まで馬鹿にし始めたので気が変わった。

そして都合良く大規模な軍事演習があったので徹底的に打ち負かしてやったのだ。

それ以来、何人かが徐栄を避けるようになってしまったのである。その筆頭が春蘭だった。

「そもそも私が話そうとしたら逃げる。どうやって教えるの？」

「……済まない」

うなだれながら謝罪する秋蘭。確かに徐栄自身、演習の時は本気でやり過ぎたと反省している。

特に春蘭は開始早々、阿呆みたいに突撃して来たので伏兵を用いて一瞬で撃破してしまった。

それが原因で春蘭に存在した誇りやら色々と打ち砕いてしまったらしく、夜な夜なうなされているらしい。

君主である曹操　華琳曰く『徐栄恐怖症』だとか。正直、そこまで言われると流石に傷付く。

「いや、本当に済まない。姉者には私から言っておく」

「気にするな」

兵法書を片付けながら答える。次はどの兵法書を読もうかと考えていたのだが先程から秋蘭の様子が変なのが気になった。

彼女らしくも無く、何か言いたそうな顔をしている。それでいて何か言おうとするのだが、すぐに口を閉じる。

「どうかしたのか秋蘭」

「え、いや、何でも無い」

「……嘘を吐くな。正直に言え。何かあるのだろうか？」

そう言ってやると秋蘭は深刻そうな顔をして押し黙ってしまう。
普段、冷静な秋蘭がこのような顔をするのだ。何か大変な事態が起きたのかも知れない。

それに彼女の瞳には迷いの光が表れていた。

「嫌ならば無理にとは言わん。だが、一人で抱えても辛いだけだ。
私で良ければ話してくれないか」

少し語調を優しくして訊いてみた。すると何故か秋蘭の視線が忙しなく動き始める。そして落ち着きも無くなって来た。

（……私では駄目か。やはり女性の扱いは苦手だ……）

女性に対して、どう接すれば良いのか全く分からない。この女性ばかりの国では致命的な欠点だ。

冷静沈着な秋蘭がこのような態度をするのだ。余程の事に違いない。心配する徐栄だが、どう対応すれば話してくれるのか分からない。

同僚が困っているのに何もしてやれない自分を齒痒く感じる。

「……済まん。私ごとが口出ししてはいけない問題なのだ。迷惑を掛けて本当に済まん」

「え？ あ、いや、違」

「無理言って悪かった」

何か言おうとした秋蘭に謝る徐栄。そして彼女の邪魔をしてはいけないと思い立ち上がって自室から出て行こうとした。

「あ、ちょっと待ってくれ!!」

「……どうかしたのか？」

腕を掴まれて呼び止められた。理解出来ず秋蘭の顔を見つめる。

何故か秋蘭は頬を真っ赤に染めていた。

「いや……あのだな……私も兵法を学びたいと思ってな」

「何だ、それなら早く言え。いつでも貸すぞ」

「え、あ、いや、違」

秋蘭が何か言おうとしていた気がするが、それよりも兵法書だ。どうやら秋蘭は兵法書を貸して欲しかったらしい。

ならば何故、頬を赤らめる必要があるのだろうか。とにかく机の片隅に置いていた数冊の兵法書を秋蘭に渡す。

「私は全部読み終えたから返すのが多少遅れても構わんぞ」

「いや……徐栄。その……だな」

「……どうした？」

何故か申し訳なさそうな顔をする秋蘭。心なしか先程より頬が赤

くなっているような気がする。

「……ああ、そうか。済まなかった。私が読んでいた兵法書か」

まだ途中までしか読んでいないが仕方ない。片付けた兵法書を取り出し秋蘭に渡す。

「いや、あのだな徐栄」

「……何だ？ まだ何か欲しいのか？」

何故か渡した兵法書を抱き締めるようにしてこちらを見つめる秋蘭。頬というより顔全体が真っ赤になっている。

まだ何かあるのだろうか。全く分からない。困惑するばかりだ。

「徐栄……あのだな……」

「だから何だ？」

「わ、私にも……兵法を教えて欲しいのだが……」

「……ならば、そつだと早く言え」

どうやら自分の勘違いだったようだ。しかし、それでも何故、顔を赤らめる必要があるのだろうか。
やはり女性は分からない。

「私は別に構わんが、お前に教えるような事は無いと思うのだが」

正直、徐栄は他人に教えるのは上手く無いと思っている。それに徐栄が教えられるのは基礎基本とちょっとした応用くらいだ。春蘭と違い、秋蘭には教える事は無いと思う。

「いや……徐栄に教えてもらいたい」

「お前がそつ言うのであれば良いのだが……」

「済まない。感謝する」

秋蘭は安心したように息を吐きながら言ってきた。その表情には喜色が浮かんでいる。

もしかしたら秋蘭は『自分も兵法を習っているのだから一緒に習おう』と春蘭を説得するつもりなのだろうか。

しかし何故これ程にも喜ぶのだろうか。まるで徐栄に教えてもらうのが嬉しいような感じた。

(……やはり女性は、よく分かん)

どうやって教えようか頭を悩ませながら、そう思う徐栄であった。

前線部隊の亀裂

空一面に敷き詰められた灰色の雲。風は湿り気を運び身体にまとわり付く。

馬上で不快に思う李通。彼の周りでは大地を踏み締め行軍する兵士達の足音が辺りを支配していた。

「はあ。よくやるねえ、敵さんも」

「……無駄口を吐くな」

独り言の呟いたつもりだったが、どうやら聞かれていたらしい。

声の主　高順が馬を寄せて来た。

「だけどさ、先月と今月で八回目だぞ。流石に嫌気も差してくるぜ。高順もそうたる？」

「……否定はせん」

李通の言葉に高順は静かに肯定する。先月から袁術軍が度々、徐州に侵入するようになったのだ。

初めは数百規模だったが最近では数千規模にまで増加していた。間違いなく徐州を狙っているとしたか思えない。

この侵入に対して君主である劉備　桃香は州境で迎撃する事にしたのだった。李通からしても妥当な作戦だと思う。

袁術軍と劉備軍の兵力差は歴然としている。下手に攻めるよりも守りを固めた方が良い。

今回は前線基地でも作るうと思っているのか五千の兵力を動員して来ている。それに対して、こちらは六千。兵力では勝っているのだが編成に不安が残る。

「高順様、李通様」

そんな言葉と共に一人の青年が馬を寄せて来た。

「……曹豹か」

「よう、曹豹。というかいいい加減に『様』を付けるのを止めてくれ」

青年 曹豹にそれぞれ言葉を投げ掛ける。曹豹は夏侯霸が鍛えた将校の一人である。流石に夏侯霸が鍛え上げたので中々良い戦をする。しかしながら欠点もある。

「いえ、自分のような者がそんなおごがましい事を」

「……あのなあ、曹豹。お前も一軍の将だろ？ 別に構わないだろ」

「そ、そのような事は」

その言葉に溜め息を吐く李通。曹豹の欠点。それは徹底的に自分を卑下する所だ。これが無ければ良いのだが。

「無理ですぜ。曹豹はこんな奴ですから」

「今度は何儀か」

黄色い布を頭に巻いている男 何儀が笑いながら近付いて来た。何儀は元黄巾党で最近、劉備軍に加わった男である。

しかし、本人は桃香ではなく夏侯霸の部下になったと頑なに主張

している。

夏侯霸は元黄巾党勢力や異民族や山賊等に大人気である。劉備軍の軍馬も八割方が夏侯霸を慕う異民族から調達していると言っても過言では無い。

夏侯霸の配下の元黄巾党勢力も日に日に増えている。更に夏侯霸に対して絶対的な忠誠心も抱いていた。

そんな彼らの合言葉が『旦那の為なら火の中、水の中、空も飛んで、山だつて動かしてやるぜ！』である。気が付いたら以前より増えていた。

このままだと新しい宗教が出来そうな勢いである。無論、何儀も夏侯霸に対して絶対的な忠誠心を抱いていた 李通も彼らに負けない程、抱いているが。

「おい！ 貴様ら無駄口を叩くな！！」

そんな怒鳴り声が辺りに響き渡る。その声に全員がうんざりしたような表情になった。あの寡黙で冷静沈着な高順でさえ顔をしかめている。

恐らく李通自身も顔をしかめているだろう。先程の高順の言葉と大差無いが籠もっている感情は全く異なっていた。

高順は弟とふざけて言い合うような温かみのある感じであったのに対して、こちらは人を見下したかのような感じた。いや、実際見下しているのだろう。

「おい、聞こえているのか貴様ら!!」

「……どうかしましたか、陳登殿？」

誰も答えずにいたので、仕方なく李通が応じた。あの真面目な高順でさえ答えないのだ。余程、話すのが嫌なのだろう。

「話している暇があるのなら早く袁術軍を叩くぞ!!それが桃香様の御意志だ!!」

そう声高に宣言する女性　陳登。それに対して、全員何も答えない。恐らく冷たい目で見ているのだろう。いや、見ているだけでも奇跡かも知れない。

「あー、あのですね陳登殿。　まだ敵の位置も判明していな」

「それがどうした!」

「……何でもないです」

「フン! ならば話し掛けるな!」

その言葉に溜め息を吐く李通。陳登は優秀なのだが傲慢で他人を常に見下していた。そのくせ桃香を崇拜していたりする。

これが李通 いや、この場にいる全員が不安に思っ要素だ。

優秀な陳登だが桃香の事になると周りが見えなくなる。しかも桃香が直々に陳登に言葉を掛けたというのだから余計に不安だ。

うなじあたりまで伸ばした陳登の茶髪がなびく。誰もが無言の中、何儀が大きく溜め息を吐いた。

「おい! 貴様、何か不満でもあるのか!」

何故か噛み付いて来る陳登。いきなり怒鳴られた何儀は困惑している。

恐らく桃香から直々に言葉を掛けられたので、いつも以上に暴走しているのだろう。流石に呆れてしまった。

「あー、不満なんて無いですぜ」

「嘘を吐け！ どうせ金や身の安全の事を考えていたのだろう。これだから黄巾賊は信じられんのだ」

陳登の言葉に怒りを感じる李通。しかし、それよりも優先すべき事があった。李通は曹豹の方へ視線を向ける。

曹豹は顔を紅蓮に染め、陳登を睨み付けていた。曹豹は仲間を侮辱されるのが大嫌いなのだ。

それで豪族一人を斬り殺しそうになった事がある。李通は高順に目配せする。高順はその意味を理解したのだろう。

頷きながら曹豹の前へと出る。曹豹も相手が仲間なので必死に怒りを抑えている筈だ。

侮辱された何儀はいつも通りな所を見ると気にしていないようだ。

陳登は鼻を鳴らし、何儀に輕蔑の視線を送りながら去って行った。

「今回はヤバイ……よな。」

「……ああ」

李通の言葉に高順が答える。その声には怒りの感情が見え隠れしていた。勿論李通も陳登の顔に拳を叩き込むのを我慢していた。

「どうするよ。六千って言っても、その内の四千は陳登の指揮下だ」

「……上手くやるしかない」

そう全軍六千の内、四千は陳登が指揮する。李通達が指揮出来るのは二千のみ。これでまともに戦えるのだろうか。

「……少し頭を冷やしてきます」

曹豹はそう呟き離れて行く。その背中にはやり場の無い怒りを持って余しているのが見て取れる。

「何儀、済まない」

「あ？ 何で謝るんだよ、李通？ 別に慣れてるから構わないって。んじゃ、俺は部下の所に行ってるから」

何儀は笑いながら、そう言い去って行く。その背中を眺めながら、これからどうなるのか心配する李通であった。

苦難（前書き）

少しやり過ぎたので書き直しました。御迷惑をお掛けしてしまい
申し訳ありません。今回は短いです。

諸事情により更新が遅くなります。誠に申し訳ありませんが御了
承下さい。

苦難

「……で？」

夏侯淵は寝台に横たわる夏侯惇に向けて多少、怒気を含めて言い放つ。それに対して夏侯惇は不思議そうな顔を作りながら首を傾げる。

そう作っているのだ。夏侯淵が言わんとしている事を理解しながら、とぼけている。それが有り得ない程腹立たしい。

「『で？』とは一体何ですか？」

「……元讓殿」

夏侯淵は唸るような声を夏侯惇に向けて放つ。本気でいい加減にして欲しい。若干顔を赤く染める夏侯惇は首を傾げたままだ。

「元讓殿、俺に何か言う事はありませんか？」

「あ、はい、ありますよ。机の上に内政に関する書類がありますの

で、それを持って来て
」

「げ、ん、じょ、う、殿？」

怒りを大量に込め、彼に投げ付ける。夏侯惇は、そんな事を気にしていないようだ。本当に、この仕事病野郎が。

「あ、駄目ですか？ なら収支関連の書類を
」

「惇、てめえは熱出してんだろぅが！ いい加減にしやがれよ！！
医者が驚いてたぞ『何で過労死しないかが不思議だ』ってな！
どんだけ働けば気が済むんだよ。て、め、え、は！」

「まだ大丈夫ですよ。若干意識が虚ろになるだけで
」

「普通、それが死にかけて言うんだよ大馬鹿野郎！！」

数日前、夏侯惇は高熱を出して倒れたのだ。夏侯淵が早急に救助したので大事には至らなかった。

以前から魚の骨が喉に引っ掛かっている、と言っていたが高熱を出す前兆だったのだろぅ。

そして星の証言が決定的だった。ここ最近、星の夏侯惇に対する態度が変だったので問い詰めたのだ。

すると寝呆けた夏侯惇と遭遇してしまったらしい。これは星自身が己の恋心に気付く絶対の機会だ、と喜んだものだ。

寝呆けた夏侯惇は恐ろしく可愛らしく女性の母性本能を物凄く刺激するようなのだ。しかし、星は夏侯惇が妖艶だったと証言した。

（今更だけど元譲殿って、普段、寝呆けている時と体調が悪い時に寝呆けているのでは全く違うようになるからなあ）

染々と思う夏侯淵。そして思い出したくも無い過去の体験が脳裏に蘇る。

（ていうか、普通に寝呆けた時もありつつ『これは私を誘っているのだな。襲ってくれ、と誘っているのだな』とか言って……結局、俺が元譲殿の貞操を守る羽目に……）

辛く悲しく思い出したくも無い過去の記憶は更に続く。

（元讓殿が熱出した時も、看病していたあいつが『つい先程、惇に誘われたから身体を清めて今夜襲ってもらう』とか言い出しやがって……結局、また俺が元讓殿の貞操を守る羽目に……）

眼から何かが溢れ出しそうな感覚がする。しかし、それを我慢する夏侯淵。

「はあ、一応報告だけはしておきます。陳登達、迎撃部隊は袁術軍を撃退し、その隙に孫策軍が袁術領に侵入。袁術軍が孫策軍の迎撃に手一杯の時を見計らい、徐栄を大将にした曹操軍が袁術領北部に侵入を開始しました」

「はい……御苦労様……です」

「……絶対安静にしておいて下さいよ」

眼が虚ろになり始めた夏侯惇に言々と部屋を出る夏侯淵。何か消化に良い物でも侍女に持って来てもらおうかと考えつつ各国の現状を考察し始める。

（……河北の袁紹が動き始めている。恐らく南下して来る筈だ）

河北を制覇した袁紹がに物資や軍を整えている。しかし、そこに

引っ掛かるのだ。

あからさま過ぎる。まるで『今から攻めますよ』とでも言わんばかりに。それに河北全域を制覇して日も浅いのに民政が完全に機能している。

有能な文官がいたとしても、これ程までに早く回り始める事が出来るのだろうか。政治関連は疎いと自覚している夏侯淵でも異常というのが分かる。

（余程、効率良く文官を配置したり色々工夫を凝らさなければなら
ないと思うのだが……）

夏侯惇が独自の情報網を持っているのと同様に夏侯淵自身も規模は小さいが持っていた。

そこから集めた情報でも袁紹軍に、これ程まで手際が良い者はいない筈である。確かに武官文官に富んでいるが、それを無駄なく有効に使う人物はいない。

（袁紹軍の動員出来る兵力は二十万規模かな。それに対して曹操軍は十万規模。後は豪族がどちらに付くかだな）

悩みながら廊下を歩く夏侯淵。風が頬を撫で日が差す中、歩き続ける。

（……考えれば考える程、徐州は微妙な位置だな。北には袁紹、西には曹操、南には孫策、東は海……逃げ道が無いからキツイ）

夏侯惇が伏している今、夏侯淵が代役を務めなければならないだろう。諸葛亮達には他の仕事もあるようだから頼る訳にもいかない。

（将の質的には曹操軍かな。徐栄もいるし……だが、袁紹軍の手際の良さが不気味だ）

悩めば悩む程、分からなくなる。改めて夏侯惇の偉大さを再認識した。そして自分がどれだけ夏侯惇に頼っていたかを。

「やるしか無いよなあ」

夏侯淵の呟きは風にさらわれ、どこかに消えて行く。とにかく自分の出来る限りの事をしよう。そう夏侯淵は心に決めた。

南下開始（前書き）

今回も短めです。

南下開始

広大な大地に轟く足音。風が馬上の高幹の顔にぶつかる。普段なら心地良く感じるのだが、今の彼にそれを感じる余裕は無い。

徐栄が三万の軍勢を率いて袁術領へ侵攻を開始したのだ。各地の守りを考慮した上で現在、曹操が戦に動員出来る兵力は約十二万程度。

豪族の動きで多少上下するものの全戦力の四分の一を出陣させたのだ。この機を逃す訳にはいかない。

速さを重視する為、情報は垂れ流し状態だろう。逆に堂々し過ぎて他勢力は混乱しているかも知れない。とにかく徐栄が帰還するまでに何としても中原侵攻の為の橋頭堡を作っておきたいのだ。

恐らくその事を承知した上で徐栄は出陣したに違いない。何か罠を仕掛けたかも知れない。だが止まる訳にもいかないのだ。

「高幹様！　これ以上、強行軍を行えば兵が脱落し始めます！」

「構わない！　少々脱落した所で、ここは我らの領地だ！　それに時間が無いのだ！」

副官の言葉に叫ぶように答えた。そう、時間が無いのだ。高幹が独自に調べた情報から推測すると夏侯霸と夏侯威は自分と同じ国から来た者かも知れない。

しかも名將と呼ぶに相応しい能力だ。自前の情報網を持っているが、調略や謀略にまで手を出していない所を見ると根っからの軍人だと考えられる。

そもそも軍人には謀略の類を良く思わない者が多いからだ。高幹もその一人であるし徐栄も戦う事だけに専念している。

それはさておき高幹は夏侯霸と夏侯威という名の将を知らない。自分が死んだ後に活躍した将なのか、はたまた偽名なのか分からない。

唯一分かるのは、そろそろ己を取り戻す頃合いだという事だ。鎧が擦れ合い、奏でる合奏を耳にしながら思う高幹。

この国に来た時、肉体的にも精神的にも若返る。肉体面は別に良いのだが精神面は少々厄介なのだ。考え方や行動まで若い頃に戻るからである。

しかしながら、ある程度この国に慣れれば精神的に若返ったまま本来の自分を取り戻すという不思議かつ複雑で理解出来ない意味不明な現象が起こる。

まあ、赤子にまで若返った高幹としては本来を自分を取り戻しても新手の拷問にしかならなかったのだが。

過去の羞恥拷問の数々を思い出し若干憂鬱な気分になる高幹。とにかく、あれ程までに優秀な将が本来の自分を取り戻せば強敵になる事は間違いない。

（朝廷にも怪しい雰囲気が漂い始めているのに……まったく厄介事だらけだ）

内にも外にも問題を抱える袁紹軍　内は内でも『内』の『上』なのだが。

「高幹様！　黄河が見えて来ました！」

高幹は副官の報告に頷いた。出陣準備が終えていた八万のみ連れて来たが、渡河には時間が掛かる。

無防備になる上陸中に敵が襲って来ない事を祈りながら馬を進め

た。兵士達は疲れているものの、顔に出さないようにしている。

この程度の強行軍であからさまに疲れを見せていたら困る。そんな兵士が戦場で使えるとは思えないからだ　　困くらいには使えるかも知れないが。

「思ったより時間が掛かるようだな」

「準備期間が短かったですから」

高幹の呟きに応じる副官。確かに準備する期間は短い。だが、これ以上時間を掛ける余裕も無かったのも事実。

これは妥協するしか無い。岸に集めてある船を睨みながら、そう考えた。

「先に渡河した部隊は後続が渡り切るまで陣を固める。全軍が渡河した後、近場の敵拠点を制圧。この辺りの安全を確保する」

「戦をするには少々早過ぎたのではないだろうか。後、一年……いえ半年あれば」

「今回の戦で袁紹軍が動員出来る兵力は豪族の兵力を合わせて約二十万。これ以上時を掛ければ二十五万まで達するだろう。しかし同時に相手にも時を与える事になる」

「……確かに、そうですが」

副官が言葉を濁す。やはり、まだ時間が十分では無いと思っているのだろう。だが割り切るしかないのだ。

相手は曹操だ。こんな穏やかな国の曹操であろうと気を引き締めなければならぬ。

兵士が渡河用の船に乗り始める。そして兵士を満載した船がゆつくりと岸から離れて行く。黄河に波紋を残しながら一船、また一船と。

「恐らく将の質、兵の練度は互角だ。兵力は、こちらが上。地の利では、あちらが上」

「参謀陣の謀略合戦に期待しますか」

副官の言葉の端々から嫌悪感が漂っていた。よくよく考えれば参謀陣も互角のような気がする。

「だが、こちらは名門という看板がある」

こんな時にしか役に立たないが、と内心呟く高幹。やはり名門という看板は何かと役に立つのは事実。

しかし名門だからといって能力があるかと問われれば、否だ。高い者もいれば低い者もいる。人とは難しい生き物だ。

「一度で良い。一度でも明白な勝利をすれば、日和見の豪族達がこちらに付く」

「そうなれば、かなり楽になります」

「ああ」

その明白な一勝が難関なのだ。肯定の言葉を口にしながら思う。辛勝でも、何となく手にした勝利でも駄目なのだ。

誰の眼からも、はつきりとした勝利。しかしそう簡単に、その勝利を手にする事が出来る相手では無い。

「まずは橋頭堡だ」

対岸を睨みながら自分に言い聞かせるように呟く高幹。長く辛い戦になる。空を舞う鳥の音が虚しく辺りに響き渡った。

黄河のほとりで（前書き）

久々の更新。遅くなってしまい申し訳ありませんでした。

黄河のほとりで

まずは初戦。とにかく本隊が到着するまで守り抜かなければならない。陣中に響き渡る兵士達の騒めきを耳にしながら改めて考える高幹。

そんな時、一人の伝令が額から汗を流しながら慌ただしく近寄って来て報告を行って来る。

「報告します！ 呂曠様が砦を落としました！」

「損害は？」

「どうやら砦の曹操軍は完璧に油断していたようで、これといった損害は受けておりません」

「そうか。それで物資の方は？」

「はい。かなりの物資が蓄積されておりました」

その後、伝令から詳しく報告を聞き少し安堵する高幹。実は強行軍を続けた為あまり兵糧を持って来れなかったのだ。

持つて来た兵糧は、どれだけ節約しても約四日分であったので敵拠点から調達しなければならなかった。

呂曠に攻めさせた曹操軍の拠点に兵糧があつたから良かったものの無ければ非常に苦しい展開になっていた筈だ。

その後、呂曠の部隊に違ふ伝令を送り幕僚達を集め軍議を開く。

今回、参軍しているのは皆を制圧した呂曠を含め沮授、高覽、呂翔、鄒丹である。ちなみに鄒丹は旧公孫賛軍からの降将である。

「これで多少は楽になりますな」

「そうですね」

簡素な幕舎で沮授の言葉に頷く呂翔。しかし沮授は言外に皮肉つてるのだろう。初めから兵糧を持つて来れば良かったのだ、と。

呂翔に関しては素直に安心しているようだ。そして鄒丹は黙り込み、高覽は沮授の言葉に苦笑いしている。

確かに初めから兵糧を持って来れば、このような事態にならずに済んだのだが少々訳があるのだから仕方ない。

それに八万もの軍勢を素早く渡河させなければならぬのだ。大きな船には軍馬や武器を載せなければいけない。

「さて本題ですが曹操軍はすぐに来るでしょう」

「そうだな」

沮授の単刀直入な言葉に答える。すると、その言葉に対して驚きの表情を浮かべる呂翔と鄒丹。高覧の表情は固くなっている。

「普通、このような最前線の拠点に物資を集めるか？」

「そつえば……」

「うむう……」

高幹の言葉に呂翔と鄒丹は、それぞれ反応を示す。呂翔は今、初めて気が付いたように。鄒丹は顔をしかめて唸っている。

「畏だった、という事ですな」

「いや、どちらかと言うと戦場を選びたかったのでしょうか」

「ああ、確かに。曹操軍の騎馬隊は精強。ここら一帯の地形からして騎馬隊の機動力が存分に活かせる、という訳ですか」

「そうなりますね」

高覧の意見を肯定する沮授。その肯定の言葉を聞いて高覧は、こちらに視線を向け納得したような表情を浮かべる。

「成る程、だから兵糧の代わりにあれ程までの数を持って来た訳ですか」

「まあ、そういう事だ。曹操自身、騎馬隊での戦闘を最も得意としているからな。恐らく戦場は平坦な土地なるだろうと予想はしていた。流石に餌まで用意してくれていたとは思わなかったが」

「流石は高幹殿ですな」

高幹に、そんな言葉を掛ける高覽。呂翔と鄒丹は呆然としている。

「騎馬対策とは言えども私は、あまり賛同出来ませんでしたか」

沮授が微妙な表情を浮かべながら、そう言って来た。彼の瞳に映る感情の光も揺れ動いていた。

「沮授殿は知っていたので？」

「ええ。確かに納得は出来ます。しかしながら、あまりにも博打過ぎます。我らの方が兵站に関しては不利なのですぞ」

そう、沮授の言う事も正しいのだ。領土境での戦闘とはいえ地の利は、あちらにある。

侵攻側である袁紹軍よりも守備側である曹操軍の方が兵站に関する負担が少ない。更に曹操軍の方が兵糧に余裕があるのだ。

元々、高幹がいた国での曹操は戦い続けていた。その為、兵糧の消耗が激しく袁紹軍との戦いでは常に兵糧不足に陥っていた。

それに比べ袁紹軍は公孫賛と黒山賊以外に目ぼしい敵はおらず、兵糧にも余裕があった。

しかし今回は全くの逆である。袁紹軍は河北を統一して、それ程時間が経っておらず、更には連戦に次ぐ連戦であつたので兵糧に不安がある。

それに比べ曹操軍は反董卓連合の後、大きな戦を行っておらず兵糧も潤沢だ。

徐栄が三万の軍勢を引き連れ袁術討伐に行つたというのも南下の理由の一つだが兵糧も理由の一つなのだ。それに時間を掛ければ曹操の勢力は確実に拡大する。

つまり今が絶好の機会なのだ。ちなみに、このような時に名門という称号が有利に働く。商人や豪族から多少無理を言つて兵糧を借りれたりする。

本当にこのような時、名門という力は助かる。心底、そう思う高幹だつた。

「今更、言つても仕方がないのでは？」

「ええ、そうですね。ただ言っただけです。私は文官ですので戦以外の事に関しては躊躇い無く言います」

「これも戦に入るものではありませんか？」

「……そこは、それぞれの判断という事で」

言い合いのような高覧と沮授の会話だが実際には二人共、仲が良
いのである。仲が良いからこそ己の意見を相手にぶつける事が出来
るのだろう。

「それで曹操軍は、どのくらいで来ますか？」

「恐らく二日以内」

「いえ、今日、明日には来るでしょう」

呂翔の問いに対して答える高覧と沮授。高幹としては今日中に来
ると予想していた。

「分かりました。とにかく出陣の準備はしておけば良いのですね」

「ああ、そうだな」

高幹の返答に頷く呂翔。鄒丹も固い表情のまま頷く。恐らく曹操軍は騎馬隊で押して来るだろう。

それに対抗する策はあるのだが、こちらの騎馬隊の数が少々痛い。

やはり、どうしても軍馬を大量に運ぶ事が出来なかったので歩兵が主戦力だった。

もう少し騎馬隊が欲しかったが今更言っても仕方ない。後はどこまでやれるかだ。

今後について話し合いながら、そう思う高幹。幕舎の中に置かれた机を見つめる。そこには周辺の地形が細かく書き込まれていた。

脳裏に浮かび上がる地形と照らし合わせる。耳を澄ませば聞こえる黄河の騒めきが、そんな自分を嘲笑っているかのように感じる高幹であった。

御連絡（前書き）

誠に申し訳ございません。今回は私から皆様への御連絡です。

御連絡

この作品を御閲覧して頂き誠にありがとうございます。

大変身勝手ながら、この作品を一から作り直す事に決めました。

理由は多々ありますが、全ては私の勉強不足と力量不足の所為です。

私自身が納得出来て、そして皆様にも楽しんで読んでもらえるような作品を作りたいと思っています。

中途半端でこの作品を打ち切るという大変失礼な事をし、更に皆様に多大なる御迷惑を掛けてしまう事になり、誠に申し訳ありません。

どうか御了承の程を宜しくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2749m/>

真・恋姫無双～蒼き忠将～

2011年1月15日18時17分発行